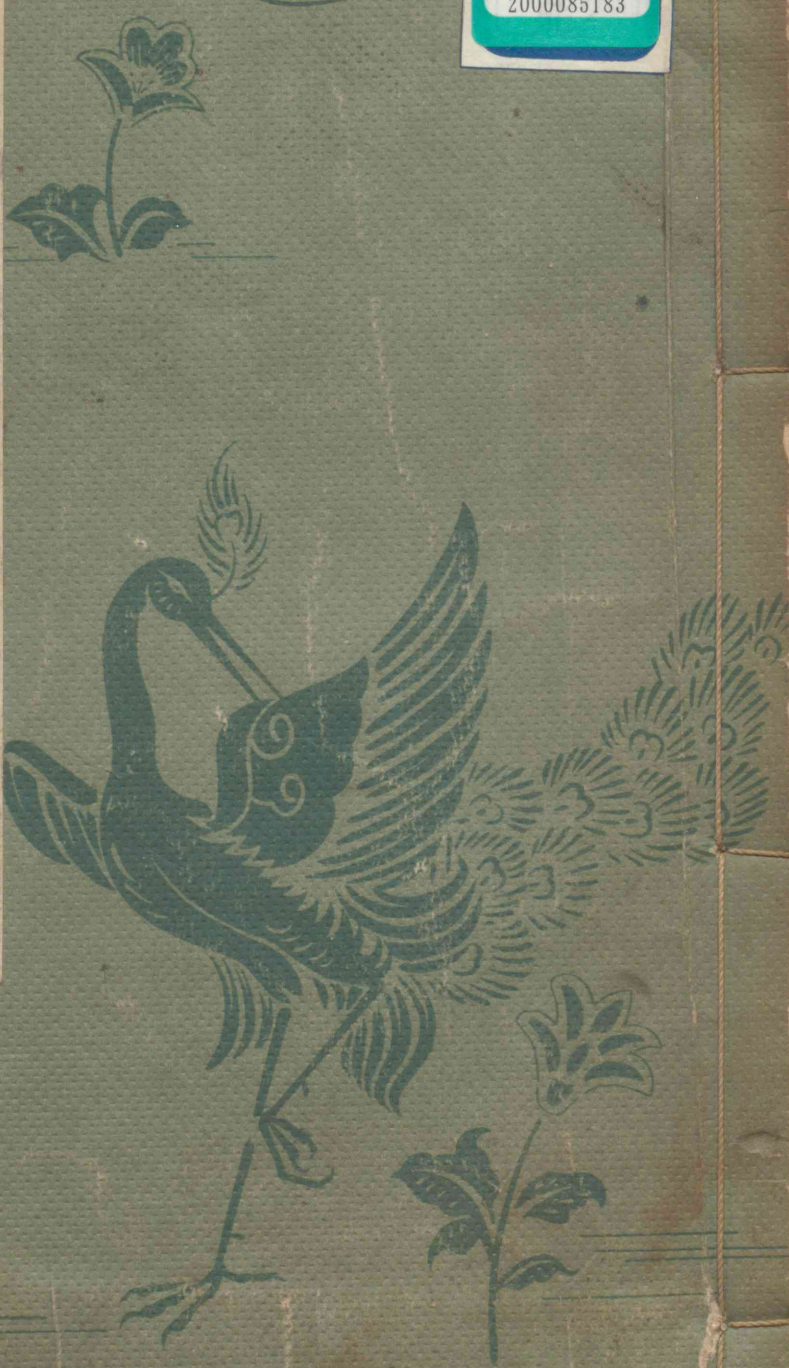
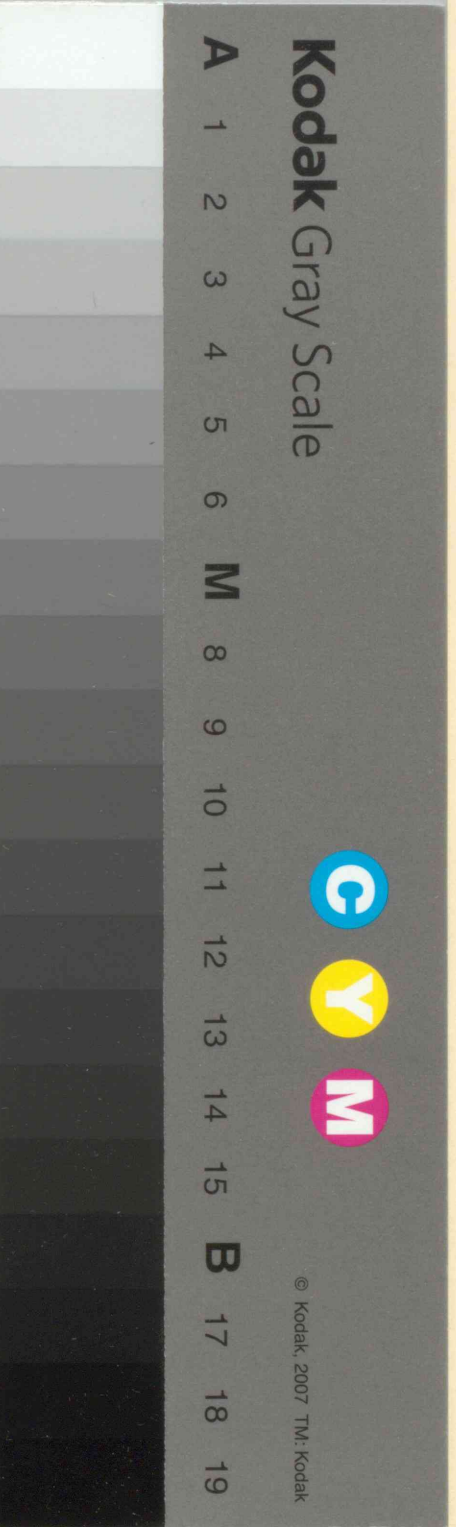
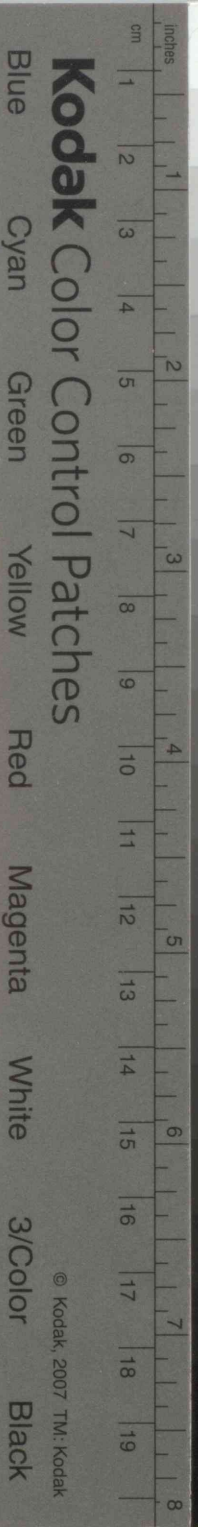
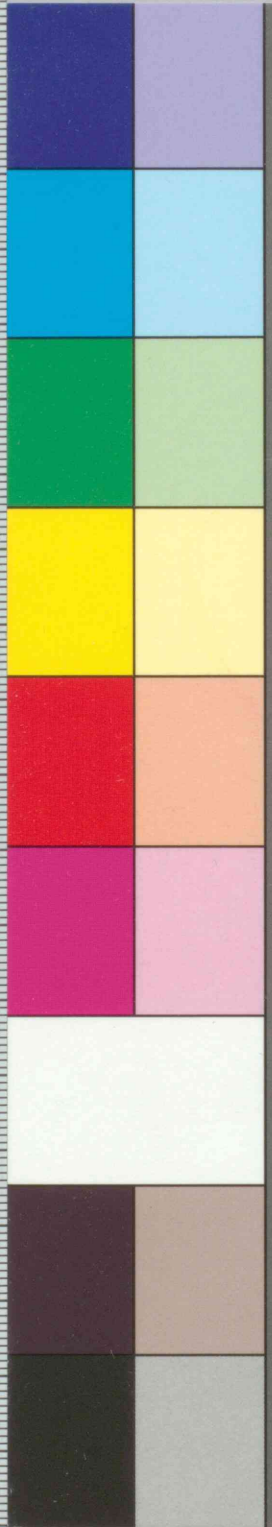


實業帝國新讀本 卷七



教科書文庫
4
810
44-1927
2000085183



43327

教科書文庫

4
810
44-1927
20000
85183



資料室
中央図書館

教科書文庫
4
810
44-1927
2000085183

4C
810
昭2

文學博士芳賀矢一編

實業帝國新讀本

東京
合資
會社
富山房發兌

広島大学図書
2000085183


矢澤弦月筆



西行



實業帝國新讀本 卷七目次

一	春の風	土岐善磨	一
二	花のさだめ	本居宣長	四
三	花月の遊	松平定信	六
四	詩人西行	藤岡作太郎	一〇
	櫻咲く日本よ(自修文)	吉田絃二郎	一六
五	櫻あらしそひ	(狂言)	三
六	南都	佐々木恒清	二五
七	をりふしの移り變り	吉田兼好	三
八	青葉若葉(俳句)		四
九	小松内府その一	(平家物語)	三五

一〇	小松内府その二	平家物語	四〇
一一	平家雜感その一	高山林次郎	四〇
一二	平家雜感その二	高山林次郎	四九
一三	寂光院その一	平家物語	五四
一四	寂光院その二	平家物語	五七
	武士の風流(自修文)		六一
一五	晩春の別離	島崎藤村	六六
一六	四季小品		七四
	一 春 雨	中島廣足	七四
	二 風 鈴	香川景樹	七四
	三 砧	清水濱臣	七五
	四 秋の山田	藤井高尚	七五
	五 冬のころろ	伴 蒿 蹊	七五

一七	川柳點	金子元臣	七七
一八	信濃路の旅	正岡子規	八三
一九	芳流閣上の血戦	瀧澤馬琴	九二
	戯作三昧(自修文)	芥川龍之介	九八
二〇	奥の細道その一	松尾芭蕉	一〇七
二一	奥の細道その二	松尾芭蕉	一一三
二二	郷土の魅力	相馬御風	一一六
二三	天地の心(短歌新調)	佐々木信綱	一二三
二四	畫題としての源實朝	相馬御風	一二三
	雲の峰(自修文)	和辻哲郎	一四一
二五	中宮寺の觀音	矢代幸雄	一四一
二六	美しき故國	上田秋成	一四一
二七	銀の猫		一四一

六 西湖の月 谷崎潤一郎 一六二

元 黄菊白菊 俳句 一七二

三 暮秋の雨 加藤千蔭 一七三

實業帝國新讀本 卷七

一 春の風

一 柳を折る

岸の青柳ほのぼのと、
 駒とめて手折る一枝を、
 なごりや惜しき春の風、
 したひてぞ吹きたなごころ。

二 春のながめ

國破れてやま河はあり、
 春なれや城邊のみどり。

土岐善磨

折揚柳(一)揚巨源
 水邊揚柳綠煙霽
 立馬煩君折一枝
 唯有春風最相惜
 慙慙更向手中吹

春望(杜甫)

國破山河在
 城春草木深

(一)唐の詩人は景山。字

二 花のさだめ

本居 宣長

花は櫻、櫻は山櫻の葉赤く照りて細きがまばらにまじりて花繁く咲きたるは、またたぐふべきものもなく、うき世のものとも思はず。葉青くて花のまばらなるは、こよなくおくれたり。大方山櫻といふ中にも品々のありて、細かに見れば、ひと本毎に聊か變れるところありて、またく同じきはなきやうなり。すべて曇れる日の空に見あげたるは、花の色鮮かならず。松も何も青やかに繁りたる此方に咲けるは、殊に色はえて見ゆ。空清く晴れたる日、日影のさす方より見たるは、匂こよなくて、同じ色とも覚えぬまでなん。朝日はさなり、夕映も。

梅は紅梅。ひらけさしたるほどぞいとめでたきを、盛になるまゝ、にやうやうしらけゆきて、見所なくなるこそいと口惜しけれ。櫻の

こよなくおくる

色はゆ

ねぶ

(一)「残りなく散るぞめでたき櫻花」在りて世の中は「うければ」(古今集)よみ人しらす

したゝかに



(筆舟玉田堀) 躑 躅

咲ける頃までも散ること知らで、むげに匂なくねびれ萎みて残りたるを見れば、げに在りて世の中は何事も皆かくこそと、見る春毎に思ひ知らるか。白きはすべて香こそあれ、見る目は品おくれたり。大方梅の花は、小さき枝をものにさして近く見たるぞ、梢ながらよりは勝れる。桃の花は、あまた咲きつゝきたるを遠く見たるはよし、近くてはひなびたり。

山吹、燕子花、撫子、萩、薄をみなへしなど、とりどりにめでたし。菊もよきほどにつくるひたるこそよけれ。餘りうるはしく、したゝかに作りなしたるは、なかなか品なく懐かしからず。躑躅、野山に多く咲きたるは、目覺むる心地す。海棠といふもの、唐

僻心

めきてこまやかにうるはしき花なり。
 そもそもかくいふは、皆おのが思ふ心にこそあれ、人はまた思ふ心異なるべければ、ひとやうに定むべきわざにはあらず。また今様の世の人のもてはやすめる花どもも、世に多かるを數へ出でぬは、ことさらめきたるやうなれど、歌にも詠みたらずふるきものにも見えたることなきは、心のなしにや、懐かしからず覺ゆかし。されどそれはたひとやうなる僻心にやあらん。
 —玉がつま—

三 花月の遊

松平定信

けふはいと長閑なり。いでや隅田川原の花見んと、小舟に乗りて行きたるが、花見んと立出づる諸人のさま、げにや京のみやびをつくせり。さまざまの心々にうちむれて行くに、女房なども何か口たたきつゝ、心空にありくもあり。馬走せて花をも目につけずいと放

やごとなし

矢立

かへさ

俗に行くもあり。やごとなき人にや人々うち圍みて、つゝましげに行く女もあり。或は木蔭にて早瓢傾け、何やらん矢立出し書いつけ、かうよりして花の枝に附けて、我は顔なる風情なるもあり。げふはげに晴れに晴れて、一天に雲なく、富士も筑波も手に取るばかりに見えたれど、またそれをうち眺むる人もなし。ましてかく晴れたる日は、とみに雨風のあるなどいふことは、露思ふものもあらじかし。この長閑なる御代の春の御恵にぞ、かく心豊かに樂しび遊びて、かへさ忘るゝばかりしても、何のわづらひ憂もなきに、この花も昔より盡きぬ御恵深き露に生ひそひしとやらんと聞けば、さ思ふ人もありやなしやと見れど、王世の民の心とや、かゝる照る日の恵をば思ひも寄らず、いつもかく空晴るゝものとはばかりも思はぬともがら多からんなど思ひ返して、四方をふとうち見れば、筑波峰のあたり、いと細くひらめきたる雲こそありけれ。この雲よ、世にいふはや

てなどいふものなりけり。餘りに朝より珍しく晴れたる日なればとて、かねて蓑も笠も放たでゐしが早臈をしたてて漕歸るをいかにこの花を見捨てて歸るは、雁がねにつらさやならへる。臈の音ばかり學べよかし。など口々に笑ふを、耳にも入れて漕去りぬ。いつかその雲のいと廣がりてけるが、かのともがらは露も知らず。日のかげろふも知らず。けふは暑きばかりなりとて、肌脱ぐもあり、または衣など脱ぎて馳せありくもありぬべし。雨に先だつ風の一通り吹落ちたれば、こは花よと思ふほどもなく、砂吹立てたれば、たゞ驚きてゐるがうちに、雨降出でたり。初は心地よき雨などともいひたらんが、後には人の聲に雨の音もせず。馬を馳せて歸るもあれば、驚きあわてて堤よりまろびて落つるもあり。女などはいといたう見苦しきまであわてふためきて、初め装ひしをも、自ら夢とや思ふらんさまなり。まして酒に酔ひて濡るゝも知らず顔に笑ひな

あわてふため

どするもあれば、思ひ寄らぬ愚かなる雨かなと怒り罵るもありぬべし。

かの舟は早く漕行きぬれど、我が住む浦は遠ければ、とある橋の下に船停めてゐしが、橋の上など人の走り騒ぐは、鳴神のやうに聞えぬ。はや雨も數ふるばかりに川の面に見ゆる頃、夕月のことさらに新しく磨き出でたれば、はや雨の名残もなし。堤の花いかがあらんと漕返して見れば、その頃ははや人もなし。櫻の木の間にはほのぼのと月の見えたるは、我が爲に作りなしけんと思ふばかりなり。濡れにし人はいかがしたりけん、この月などは思ひも寄らであらんなど獨り思ふも、何となく心驕り行きぬ。父母も、我一人人に越えて心地よしと思ふ時はと誠め給ひたれば、また過やしぬべきと恐しく覺えければ、飲みのことしたる酒携へて、終に漕歸りぬとか。

—花月草紙—

mifuku.
missol

天涯放浪の行脚僧

(一)藤原定家。

(二)三卷。西行の家集。

四 詩人西行

藤岡作太郎

西行何者ぞ、天涯放浪の行脚僧。その名を一時の名流俊成と齊しうし、鎌倉、室町の世、抑、歌道に於て定家(一)を難ぜん輩は、冥加もあるべからず、罰を蒙るべきことなり。といはれし時、稱讚の聲また定家に譲らず。近世に至つて定家の價値いたく墜落したれども、山家集(二)の一書は、なほいかなる歌人の机邊をも去らず、西行の名今に噴々たるは抑、何の故ぞ。

西行法師、俗名は佐藤義清(三)、鎮守府將軍藤原秀郷が九世の孫なり。代々武を以て家を立つ。義清また勇敢にして弓術をよくす。和歌に堪能なるは蓋しその天稟なり。鳥羽上皇に仕へて北面の士となり、左兵衛尉に任ぜらる。上皇その才を愛して登庸せんとす。されど義清は榮利を喜ばずして、常に厭離の志あり。その出家の動機につい

厭離

登庸

北面の士

(一)京都府(山城國)紀伊郡に宮址がある。

あめそよく
はなたちは
なにかまほ
てやすくも
よきすくも
になくなり
(藤原俊成の詠)

惕然

(二)清信士度人經の偈句。

愛着の絆

(三)崇徳天皇の時。一人。〇〇〇

ては、或は傳へていはく、嘗て同族左衛門尉憲康と同行して鳥羽殿より退出し、また明日を期して別る。次の朝參朝せんとて、約に隨ひて憲康を誘へるに、門の邊に人立騒ぎ、内には泣悲しむ聲聞ゆ。怪しと思ひて尋ぬれば、殿は昨夜頓死し給へり。とて、若き妻、老いたる母

蹟筆行西傳

の重り伏して歎くに、義清は惕然(一)として遁世の念更に堅し。官を辭して許されざれども、棄恩(二)入無爲(三)は如來の教なりと觀じ、四歳の女が父の歸れるを喜びて取繼るを、思ひ切りて縁より下に蹴落し、これこそ愛着の絆を斷つ始ぞと、顧もせで家を遁れ出で、嗟峨に至りて剃髮せりと稱す。かくて名を西行また圓位といふ。出家する時保

(一)右兵衛佐頼朝
(二)弘法大師

沙
桑門

悠々自適
(三)俗名を遠藤盛
遠といふ。
治元年(一八
五九年)歿
八十一年

延六年にして、西行歳正に二十三なりきといふ。

西行すでに世を遁れて高野に籠り、吉野に隠れ、出でては熊野に参り、伊勢に詣で、鎌倉に下りて、右幕下に見参し、進みて奥州に至り、



文 覺

西の方は中國より四國に渡りて大師の靈場を拜み、それより筑紫に遊べり。常に謂へらく、桑門に家なし、抖擻して身を終ふべし。一枚の笠、一本の杖、草の枕、苔の茵、東西にさすらひ自然を友とし、悠々自適、興至れば則ち和歌を詠ず、高尾の文覺(三)これを師なり。何處にても見あひたらば頭を打割るべし。その後高尾の

手ぐすねを引

いひがひなの
法師どもや

面やう

涅槃

法華會に行脚の僧の参りあひて、花の蔭など眺め歩き、坊に來りて一宿を請ふあり、誰ぞ。と問へば、西行と申すもの。といふ。文覺手ぐすねを引き、望のかなひつる體にて、明障子をあけて出づ。暫しまでもりて、年比承り及びたるに、御尋ね悦び入り候。とて、迎へ入れて饗應に餘念なし。弟子たちはいかなることの出で來んかと、手に汗を握りたるに、この體たらくにて、西行は無事に歸り去りしかば、日比の仰に違ひたるは、と怪しみ問ふ。文覺答へて、あら、いひがひなの法師どもや、あれは文覺に打たれんずるものの面やうか。文覺をこそ打たんずるものなれ。といへりといふ。

西行深く月花を愛し、また釋迦入涅槃と契を等しくせんことを思ひて詠じていはく、

ねがはくは花のもとにて春死なん

そのきさらぎのもちづきのころ

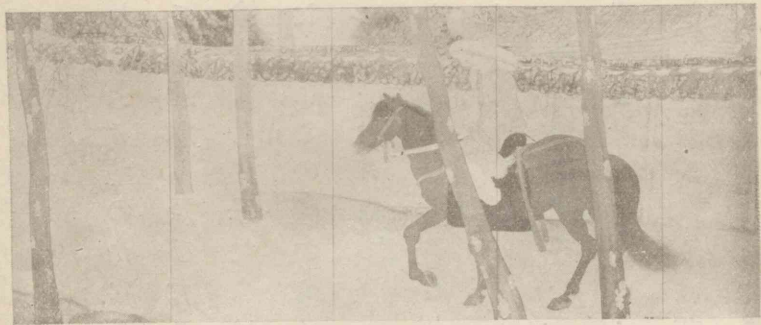
法華會に参りては手ぐすねを引

Wawana

幽契違はず

(一)連歌師。花の下と號した。紀伊の人。文龜二年(一一八二年)歿、年八十二。

一期を劃す



大和路の宗祇(井澤蘇水筆)

晩年洛東(下)雙林寺の邊に草庵を結びて閑居せるが、幽契違はず、建久元年二月十六日、七十三歳にて入滅せり。
我が國古來詩人多しと雖も、深く自然にあこがれ、山川を無二の友として、生涯の過半を旅行の中に終へしもの、前後僅かに三人、西行、宗祇、芭蕉これなり。西行これが先達をなし、宗祇は應仁亂離のをりををも厭はず、私淑してその跡を追ひしもの、芭蕉は元祿泰平の機に乗じて、また西行、宗祇が行狀を慕ひしものとす。西行は歌道稀有の名手、宗祇は連歌第一の大家、芭蕉は俳諧に正風の眼を開きし偉人、各その道に一期を劃せし

風月に放浪し雲水に吟嘯す

吟囊

跼蹐す

京洛

簸却す
隱微の聲

三家がいづれもまた風月に放浪し、雲水に吟嘯せしことを思へば、旅行がいかに詩人の吟囊を肥すものなるかを知るべし。

抑平安時代の貴紳淑女は、賀茂、桂、二川の流域數里の間を己が世界とし、海も見ぬ天地に跼蹐し、足畿外に出でず。一生の經過極めて單調に、感情を刺衝するものなければ、随つて思想の發展もあることなし。見聞するところは東山の花、西山の紅葉、いつも同じ京洛の風物より外を知らざれば、詠ずるところの歌も變化を見ず。子は父に繼ぎ、孫は祖を承け、たゞ同じ詞花言葉を飾るのみにて累代繼承し行けば、和歌の思想辭句の上にも自ら典型を生じて、天真を忘れ、實情を欺き、虚偽に流れ、浮華輕薄徒に形式を飾りて、燦爛たる錦囊その内容は空しく、滔々として風をなせる時、西行獨り蹶起して從來踏襲の典型を簸却し、自ら山水の間に逍遙して、直接に自然が隱微の聲を聞き、感得するところは萬朶の花と咲けり。平安の末崇徳

院の御製が殊に斷腸の響あるは、その悲慘なる實境を咏ぜることの、世上一般の題詠と選を殊にすればなり。わけて西行が歌ふところ、一も古人の粉本を摸倣せず、一字一句皆己が肺腑より出づ。數百年の後なほ名聲噴々として天成の大才と許さるゝも、また宜ならずや。

—國文學全史—

櫻咲く日本よ〔自修文〕

吉田 絃二郎

(一) 身を分けて見ぬ梢なくつくさばや

よろづの山の花のさかりを

これほどに花に對して食^むはばかりの愛着を感じた詩人が、世界にあるであらうか。

しかし、この花に對する愛着の念は、日本人ならば西行ばかりでなく、殆どすべての人に見出すことができるはずだと思ふ。殆ど私たちすべてが春になれば、見ぬ梢なく花を見つくさうと思ふ。

(一) 西行の歌。一首の意は、一つの身では同一の花を咲く全國からは、身を見ないから、身も分けなくて、全國の花の盛をすべて見つくさうと思ふのだ。

祖國
祖先からの國。

日本といふ私たちの祖國が、一番はつきり私たちの心に刻みつけられてくるのは、櫻の花が咲く日である。花が咲いてくれば、日本人全體が、世界のどこかの詩人よりも花を愛し、花をたゝへることを知つてゐる。西行の歌はたまたま日本人のすべての櫻の花に對する愛着を、代言したものに過ぎない。

私は日本に生まれたことを有難いと思ふ。殊に花が咲く日にしみじみそれを感ずる。

山の雪が解けはじめ。もう南の方からは花のたよりがくる。三月も半ば過ぎれば、薩摩、日向あたりの山櫻が咲きはじめる。その頃南方を立つて北の方へと日毎旅枕^{たびまくら}を重ねる人々は、三月の二十四五日頃になれば、北九州の山櫻が綻^{はな}びてゐるのに出會ふ。中國から畿内、東海、東山と、北へ北へと旅を續ければ、短い花の命とはいふものの、勿來關、平泉^{ひらふね}まで行くうちには、四十日以上の花を見ることができる。全く三月から四月と日本國中が花に包まれてしまふ。潮煙^{しほけむり}に閉されて、あるかなきかに見える小さい隱岐や對馬の島々までもが、日本である限りは、雲のやうな花に包まれてゐる。

旅枕
たびまくら

(一) 巖手縣(陸中) 國(西磐井郡) 平泉村。

潮煙
海水のしぶき。

聖地
靈場。

(1)Chaucer.
イギリスの詩人。(西曆一三〇〇年—一四〇〇年)

(2)“Canterbury Tales”
イギリス古文

イギリス古文の傑作である。叙事詩である。ロンドンからカンタベリーへの聖院に参詣する三十二人の人々が馬上で物語つた小話を集めた體に作られてゐる。カンタベリーの東南五哩の宗教上の首府である。札所めぐり禮拜の功德を積み爲に佛國をめぐること。世捨人。 (3)「心なき身にあらはれしは知られけり」

きたつ澤の秋の夕暮。(西行) 相すがた。あり

(1)Wordsworth.
イギリスの詩人。(西曆一七七〇年—一八五〇年)
(2)Emerson.
アメリカの文學者。(西曆一八〇三年—一八八二年)

(3)芭蕉の句。

(4)蕪村の句。

西洋では聖地巡禮といふことが昔からある。Chaucerの「Canterbury物語」などを讀むと、今の日本の御彼岸の札所めぐりを思ひ出すが、もうあゝいふのんきな遍路は、かの地では遠い昔になくなつてしまつたであらう。日本ではまた四國めぐり、大和めぐり、どこそこの新札所めぐりといふものが、なかなか盛である。そしてそれは花の盛を中心にして行はれてゐる。札所めぐり、聖地めぐりといふが、實は花をめぐりての旅である。花遍路である。西行にしたところで、實に一生花をめぐつての旅人であつた。花巡禮であつた。彼は秋の山に鹿も聽いた。雪の野も歩いた。彼は寂しい世捨人のやうにも思はれる。けれども彼くらゐ日本の春を愛し、日本の春を解した詩人はないであらう。

ねがはくは花のもとにて春死なん

そのきさらぎのもちづきのころ

彼は春に對しては貪慾であつた。しぎたつ澤のほとりの秋を見た頃は、恐らく彼は人生無常の相をそのまゝに受容れて、死も恐れなかつたであらう。けれ



(筆瑋頼中田) 春

ども再び旅に春を見た刹那、吉野の花に包まれた日に、彼の執心は燃えたであらう。彼は三十年もなほ生き續けて行きたいと思つたであらう。ウォーヅウォースであつたか、エマーソンであつたか、ちよつと忘れたが、この附近の風光は實にいい。たゞ一つ悪いことには、餘り景色がいゝ爲に、死ぬことがいやになる。といふ意味のことを語つたことがある。西行も恐らく同じことを感じたであらう。伊賀から大和への道すがら、春なれや名もなき山の薄霞。と歌つた日、芭蕉も恐らく同じことを感じたであらう。菜の花や月は東に日は西に。に、蕪村ならずとも、春の日の日本に生まれた幸福を感じないでは居られないであら

西行も芭蕉も世捨人である。しかし、印度あたりの世捨人とはまるで違つてゐる。どこまでも世を捨てきれぬ人たちである。彼等が世を捨てたといふのは、餘りに自然を愛したが故である。心ゆくまで自然に浸ひたされたい爲に、暫く世の煩はしさを避けたばかりである。自然を味はふといふ點では、誰をも彼をも受容れてゐる。日本國中の人々を一緒に誘ひ出して 自然を味はつてゐる。

日本人はこせこせしてゐるとよく非難される。しかし、花の盛の日本人を見ると、あながちさうでもない。花に恵まれた日本の自然が、春の日になれば、日本人の心を特に淨化してくれるのか知らぬが、ともかく花の盛の日本人は、愛すべき國民である。佛詣ほとけまうでや神詣かみまうでにかこつけて四國中をめぐり、大和をめぐつて、花を見て歩くことのできる子供らしさを失はぬ民族である。西行といひ、芭蕉といひ、一生のなまけものであつた。日本の秋を、日本の春を残る限なく見つくりたいが爲に、家業を捨てて歩きまはつた大きな子供である。

日本人ほど詩を作る國民は他にないであらうと誰でもない。私もさう信じてゐる。萬葉時代から日本人は、花下の行樂ひしやうを無性に樂しむことを知つてゐた。

萬葉時代
萬葉集の時代
の意、萬葉集

淨化す
きよくする。

は我が國最古
の歌集で、仁
徳天皇の時
で天皇の時
の歌を集め
たもの

分別くさい人
りさまへのあ
りさまへのあ

(一)服部嵐雪。芭
蕉の門人。寶
永四年(一三
五七年)歿、年
五十四。

あてやか
上品。
(二)「さまざまの
こと思ひ出す
櫻かな」芭蕉

日本人は愛すべきなまけものであつた。その中でも一番大きななまけものが、西行と芭蕉とであつた。それから後の世の歌人や俳人たちには、分別ぶんべつくさい人たちが多過ぎてしまつた。其角(一)にしる、嵐雪らんせつにしる、蕪村(二)にしる、分別(三)があり過ぎる。このことは、歌人の場合でもやはり同じことだが。

それはともかくとして、日本人がこれほど多く詩を作るといふことは、やはり恵まれた日本の自然からであると思ふ。日本に櫻が咲く間は、日本人は恵まれてゐると思ふ。日本人は詩を作ることを忘れてはならないと思ふ。

わけもなく懐かしい櫻。わけもなく暖かい感じの櫻。わけもなく可憐な櫻。わけもなくあてやかな櫻。わけもなく哀な櫻。わけもなく「さまざまのこと思ひ出」させる櫻。誰の爲に咲いてくれるのか、誰の爲に散つて行くのか、待たれる日のみ長くて、散ることの餘りに早い櫻。

無常の實相を餘りに美しくも、餘りに痛ましくも私たちの心に刻みつけてくれる櫻。日本中の山も、原も、町も、けふは花の霞に包まれてしまつた。私は恵まれた日本を思ふ。

西行も、芭蕉も、「花の咲く」けふは「浮かれこそ」したであらう。
けふは日本人にとつて一番明るい幸福の目である。と同時に、一番もの哀な
日である。

五 櫻あらしそひ——狂言

えいたさぬ

アド「これはこの邊のものでござる。この頃はいつ方も花の盛ぢや
と申すほどに、花見に参りたう存ずれども、暇ひまがなさに参ることも
えいたさぬ。もはや暇になつてござるほどに、けふは花見に参らう
と存ずる。まづ太郎冠者を呼出し、申しつけう。やい、やい、太郎冠者あ
るか。シテ「はあ。アド「おたか。シテ「お前に居ります。」

アド「汝を呼出すこと別のことではない。この頃は方々花盛ぢやと
いへども、暇がなさに、花見に行くこともならなんだ。もはや暇にな
つたほどに、花見にいでうと思ふが、何とあらうぞ。シテ「これは珍し

頼うだ人

いことを仰せられます。この頃は櫻の盛ぢやと申すほどに、櫻を御
覽ぜられうとあれば、尤もでござるが、珍しからぬはなを御覽ぜら
れて、何にさせらるゝ。アド「いや、おのれは何事をいふ。櫻も花も同じ
ことぢや。シテ「これは頼うだ人も覺えぬことを仰せらるゝ。さや
うに仰せられたらば、人中で耻をかゝせられう、身どもは苦しうご
ざらぬが。アド「して、汝がそのやうにいふは仔細があるか。シテ「なか
なか、仔細こそござれ。はなが見させられたくば、私のはなを見させ
られ。餘所へござるまでもござらぬ。アド「いや、汝は言語道斷のこと
をいひ居る。汝が面な鼻といふ、花といふは別ぢや。シテ「さうでは
ござらぬ。歌などにも櫻とは詠まれたれども、花とは詠まれませぬ。
アド「なかなか、でもないことをいひ居る。その歌を讀うで聞かせい。
シテ「讀うで聞かせたらば、肝を潰させられう。アド「急いで讀め。シテ
「心得ました。」

言語道斷

でもないこと

(一)紀貫之の歌。拾遺集卷一春に出てる。

(二)平忠度の歌。平家物語卷九に出てる。

(三)よみ人しらす。古今集卷一春上。

(四)小野小町の歌。古今集卷二春下。

櫻ちる木の下かぜは寒からで

そらに知られぬ雪ぞ降りける

これはなんと。アト「此方にも花といふ歌がある。シテ」さらば讀うで

聞かせられい。

行(二)きくれて木の下かげを宿とせば

はなや今宵のあるじならまし

シテ「この方にもまだござる。」

やま櫻わが見にくれば春がすみ

峰にも尾にもたちかくしつゝ

アト「それならこちにもある。」

花(四)の色はうつりにけりないたづらに

わが身世にふるながめせしまに

シテ「それならば此方には謠にござる。アト」うたへ、聽かう。シテ「櫻か

總別むざとしたこと

ざしの袖ふれて。アト「一段の謠うたふいたしやうがござる。やい太郎冠者。謠花見車くるゝより、月の花よ待たうよ。月の花よ待たうよ。シテ」はあ、これでつまりました。アト「總別何も知り居らいで、むざとしたことをいひ居つて、某と競合きあひ居る。彼方へ失せい。シテ」はあ。アト「えい。シテ」はあ。

—續狂言記—

六 南 都

佐々木恒清

(一)京都

堂塔相呼び樓閣相應ふ

星霜

(二)聖武天皇時代の藝術

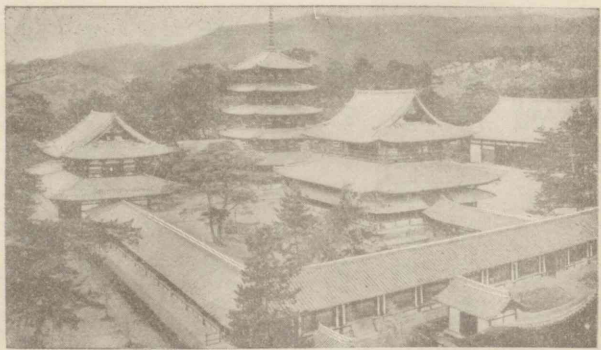
南都(一)は西京と同じく古典的情味の最も深い所である。今や平城京址には堂塔相呼び樓閣相應ふといふやうな、舊時の壯觀を見ることはできないけれども、紫雲常に變遷たる法隆寺の五重塔は、本邦に於ける隋唐文明の先驅者たる威容を表し、悠々たる千二百年の星霜は、大佛殿のいらかの上から北和の天地を見おろして、天平藝術の粹ここに集れりと叫んでゐるやうである。奈良朝の政治

奈良朝の宗教、奈良朝の風俗等には、勿論幾多の缺點もあつたであらうが、當代の美術、當代の文學を通して見た奈良朝の精神は、實に潑刺たる進取の元氣に満ちてゐたものであつた。萬事が積極的で、大規模で、一般にきびきびした愉快な時代であつた。その有様は、春から初夏にかけての氣分とでもいはうか、活々とした青葉若葉の森蔭の、からりと晴れた空に元氣よく翻る鯉幟を見るやうで、實に男性的の趣味の溢れるやうな時代であつたのである。

まづこれを宗教の方面から觀察すれば、飛鳥時代から白鳳時代にかけて盛であつた法相宗や、奈良時代に最も勢力のあつた華嚴宗などは、どちらかといへば至極樂天的な、しかも元氣に満ちた宗旨であつた。これは今日平城京址を行脚するものの、誰しも感ずるところであつて、當時の佛寺はなるべく山地を避けて平地を選んで建てたので、當代の六宗は一に都市佛教だと呼ばれてゐる。寺を

(一)おもに推古天皇以後孝徳天皇頃までの約六十年間。
 (二)天武天皇時代。
 (三)白雉年中道昭が唐から傳へた宗派。
 (四)天平年中唐の道璿が傳へた宗派。

Plan.

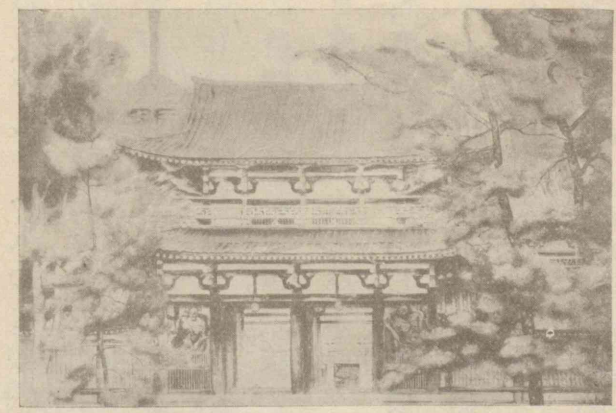


法隆寺全景

平地に建てたので、自然七堂伽藍の規制正しいものができた。即ち南に南大門があり、少し中へ入つて中門があり、廻廊がその中門の両側から出て、中央の金堂を圍みながら、背後の講堂に連接する。中門外の左右には東西兩塔があり、講堂の背後左右には鐘樓、經藏が並び、最後に食堂や三面僧房を建てまはすといふやり方、左右均齊、前後照應のプラン正しく、殿樓相呼應して、ラスキンの所謂、建築は總合藝術なり。の意味を表したものである。南都の諸大寺即ち法隆寺を始め、東大寺でも、興福寺でも、藥師寺でも皆この形式を採つてゐる。單にそのプランだけを見ても、非常に自由で積極的であつて、決して陰鬱とか軟弱とかの

勁健摯實

感を起させない。更に内部の佛像を見ると、飛鳥時代のものは固拙であるが、極めて勁健摯實である。簡朴ではあるが、全く眞率平和である。奈良時代のものは圓滿最勝である。雄渾富麗である。力の美と精神の美とが最もよく合體した所に、無限な高致を現出してゐる。どこに悲觀的な表現があるであらうか。いづれにしても、優秀な大陸文明の直輸入をやつた時代である。世界第一の巨像を鑄た時代である。十數年の歳月を費し、巨億の國帑を抛つて、三國一の大伽藍を造營したその精神を追想しただけでも、雄大な時代の精神と、典雅な趣味と、高渾な氣魄とを認めることができ



(筆汀春元山) 門中寺隆法

高致

(一)東大寺の本尊である毘盧舍那佛。
國帑
(二)東大寺の本堂である所謂大佛殿。

るではないか。

格調

上代の歌謠を集めた萬葉集や、祝詞、宣命の類を見ても、我等は潑刺たる生氣の横溢してゐるのを認める。その文辭は莊重、その格調は雄健で、それは後の平安朝や鎌倉時代のやうに弱々しい思想に囚れたり、厭世悲觀の感情を洩らしたりしたやうなものとは同一視することができぬ。勿論、佛教や儒教の影響は、多少時代の國民性の上にも現れてゐるけれども、まだまだ我が國民は至極樂天的で、また極めて現代的で、しかも大國民的襟度をもつてゐた。これは美術や文學の上ばかりでなく、社會萬般の事がらに於ても、十分認めることができるのである。

我が邦上古より奈良朝までの歴史は、飛鳥から奈良へかけての約五六里四方を舞臺として演ぜられたのである。建國以來千二百年間の我が國體の基礎、我が民族の發展、我が文明の成立等は、皆こ

搖籃地

(一)大宰少貳小野老朝臣の歌。
(二)玉葉集所載、よみ人しらす。

の小舞臺に演ぜられた所作事であつた。この我が文明の搖籃地も、平安遷都以後は遠く政治の圏外に捨てられたので、曾ては萬葉の歌人をして、青(一)によし奈良の都は咲く花の、匂ふが如く今盛なり。と讚美せしめたものが、その後幾年も経たぬ間に世(二)の中は常なきものと今ぞ知る、奈良の都のうつろふ見れば、と嘆ぜしめるほどに衰頽したけれども、當時のきびきびした氣魄の大きい快活な面影は、到る所に於てしのぶことができるのである。

要するに、南都は秋よりも春の氣分を表した都である。夕暮より夜にかけての都といふよりも、朝から晝にかけての都である。紫や緋のやうな女性的の色ではなくて、綠若しくは朱のやうな男性的の色(一)の都である。しとしとと降る時雨ではなくて、沛然として至る驟雨である。涙に満ちた悲劇ではなくて、楽しいお伽噺である。

—南都と西京—

(一)「春はたゞ花のひとへに咲くばかりに、秋の哀は秋ぞまさされる。」
遺集よみ人しらす

氣色立つ

名にこそ負へおほつかなきさましたる



兼好法師

七 をりふしの移り變り 吉田兼好

をりふしの移り變るこそ、ものごと(一)に哀なれもの哀は秋こそ(二)まされ。と人毎にいふめれど、それもさるものにて、今一きは心も浮立つものは、春の氣色にこそあめれ。鳥の聲なども殊の外に春めきて、のどやかなる日影に、垣根の草萌出づる頃より、や、春深く霞みわたりて、花もやうやう氣色立つほどこそあれ、をりしも雨風うち續きて、心あわたゞしう散過ぎぬ。青葉になり行くまで、よろづにただ心をのみぞ惱ます。花橘は名にこそ負へれ、なほ梅の匂にぞ、古のことも立返り、こひしう思ひ出でらる。山吹の清げに、藤のおぼつ

七 をりふしの移り變り

(一)陰曆四月八日
(二)賀茂祭。四月
の中の酉の日。

水鶏のたゞく

蚊遣火

(三)六月晦日の大
祓。

今更にいはず
にもあらず
あぢきなし
すさび
かいやり棄つ
べきもの

かなきさましたる、すべて思ひ棄てがたきこと多し。
灌佛の頃祭の頃、若葉の梢涼しげに茂り行くほどこそ、世の哀も
人のこひしさもまさると人の仰せられしこそ、げにさるものなれ。
五月あやめふく頃、早苗とる頃、水鶏のたゞくなど心細からぬかは。
六月の頃、あやしき家に夕顔の白く見えて、蚊遣火ふすぶるも哀な
り六月ばらへまたをかし、棚機祭るこそ艶かしけれ。
やうやう夜寒になるほど、雁鳴きてくる頃、萩の下葉色づくほど、
わさ田刈干すなど、取集めたることは秋のみぞ多かる。また野分の
あしたこそをかしけれ。いひ續くれば、皆源氏物語、枕草子などにこ
とふりにたれど、同じことまた今更にいはずともあらず、思しき
こといはぬは腹ふくるゝわざなれば、筆に任せつゝ、あぢきなきす
さびにて、かいやり棄つべきものなれば、人の見るべきにもあらず。
さて冬枯の景色こそ、秋にはをさをさ劣るまじけれ。汀の草に紅

遣水

すさまじ

(一)十二月十九日
から二十一日
までの三日間
宮中で行はれ
た佛事
(二)下陵八墓に幣
鳥を奉られた
使。
やんごとなし
(三)十二月晦日の
鬼やらひ。

ことごとし

葉の散りとゞまりて、霜いと白う置けるあした、遣水より烟の立つ
こそをかしけれ。
年の暮れはてて、人毎にいそぎあへる頃ぞ、またなく哀なる。すさ
まじきものにして、見る人もなき月の、寒けく澄める二十日餘りの
空こそ、心細きものなれ。御佛名、荷前の使立つなどぞ、哀にやんごと
なき公事どもしげく、春のいそぎに取重ねて、催し行はるゝさまぞ
いみじきや。
追讎より四方拜に續くこそおもしろけれ。晦の夜いたう暗きに、
松ども點して、夜半過ぐるまで、人の門たゞき走りありきて、何事に
かあらん、ことごとしくのゝしりて、足を空に惑ふが、曉方よりさす
がに音なくなりぬるこそ、年の名残も心細けれ。亡き人のくる夜と
て魂祭るわざは、この頃都にはなきを、東の方にはなほすることに
てありしこそ哀なりしか。かくて明行く空の氣色、きのふに變りた

七 七をりふしの移り變り

りとは見えねど、引きかへ珍しき心地ぞする。大路のさま松立てわ
たして花やかに嬉しげなるこそまた哀なれ。 — 徒然草 —

八 青葉若葉

あらたふと青葉若葉の日の光。
目には青葉やまほとゝぎす初がつを。
籬ばしる友切丸やほとゝぎす。
芭蕉 素堂 蕪村

杜鵑なくや湖水のさゝにぞり。
一聲の江に横たふやほとゝぎす。
蘭田刈つて水鶏に遠き寢覺かな。
芭蕉 丈草 蕪村

蹟筆太夢

(一)山口信章。俳人。甲斐の人。享保元年(一七二〇年)生。三十七年(一七五二)年七十五歳。

さみたれや
ある夜竊に
松の月
夢太

(二)八島夢太郎。俳人。江戸の人。天明七年(一八二七)年四十七歳。

石切

(一)平泉與惣右衛門。俳人。攝津の人。元文三年(一八〇三)年三十八歳。年七十八歳。

行水の捨てどころなし蟲の聲。
石工ののみ冷したる清水かな。
橋おちて人岸にあり夏の月。
夕立や家をめぐりてあひる啼く。
夕涼よくぞ男にうまれける。
鬼貫 蕪村 太紙 其角 其角

九 小松内府 その一

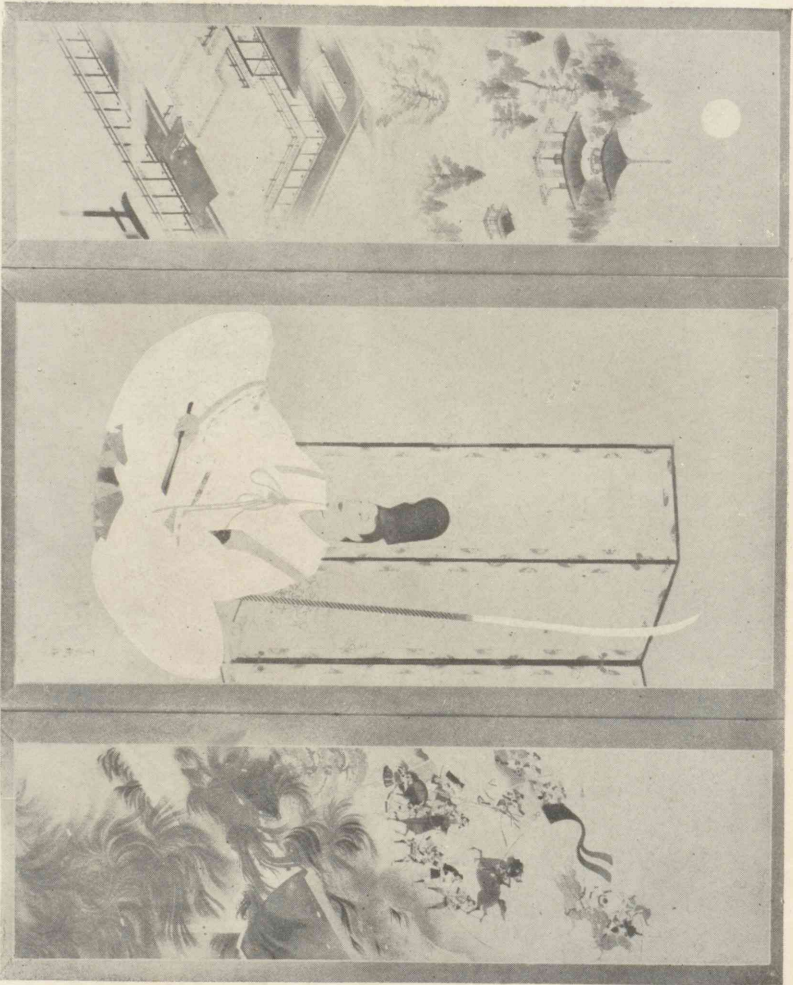
(三)太政の入道はかやうに人々數多縛め置きても、なほ心ゆかずや
思はれけん、すでに赤地の錦の直垂に、黒絲絨の腹卷の白金物打つ
たる胸板せめ、先年安藝守たりし時、神拜のついでに靈夢を蒙つて、
嚴島大明神よりうつゝに賜はられたりける銀の蛭卷したる小長
刀、常の枕を放たず立てられたりしを脇に挟み、中門の廊にぞ出で
られたる。大方その氣色ゆゝしうぞ見えし、貞能と召す。

(四)筑後守平貞能。清盛の腹心。

九 小松内府 その一

- (一) 清盛の叔父忠正。
- (二) 崇徳上皇。
- (三) 軍仁親王。
- (四) 清盛の父忠盛。
- (五) 鳥羽法皇。
- (六) 藤原信賴。
- (七) 後白河上皇。
- (八) 大内即ち二條天皇。
- (九) 藤原經宗。
- (一〇) 藤原惟方。

筑後守貞能は木蘭地の直垂に緋緘の鎧着て、御前に畏まつてぞ候ひける。入道宣ひけるは、いかに貞能、このこといかが思ふぞ。保元に平右馬助をはじめとして、一門半ば過ぎて新院の御方に参りにき。(一) 一宮の御事は故刑部の卿殿の養君にてましまししかば、旁見放ち参らせ難かりしかども、故院の御遺誠にてませて、御方にて先をか(二) けたりき。これ一つの奉公。次に平治元年十二月、信賴、義朝が謀叛の時、院内を取り奉つて大内に立籠り、天下暗闇となつたりしにも、入道隨分身を捨てて兇徒を追落し、經宗、惟方をめし縛むるに至るま(三) で、君の御爲にすでに命を失はんとすることたびたびに及ぶ。されば人何と申すとも、いかでかこの一門をば七代までは思し召し棄てさせ給ふべき。それに成親といふ無用のいたづらもの西光と申(四) す下賤の不当人が申すことに君のつかせ給ひて、動もすればこの一門滅さるべき由の御結構こそ然るべからね。この後も讒奏する



安藝守清盛

服部有恒筆

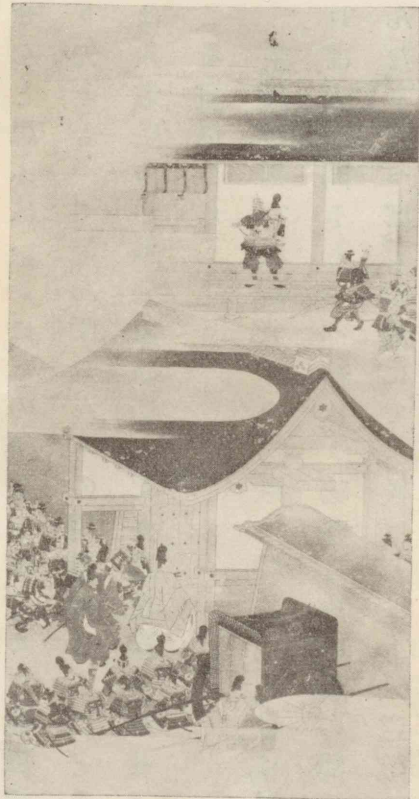
(一)後白河法皇。

ものあらば、當家追討の院宣を下されつと覺ゆるぞ。朝敵となつて後はいかに悔ゆとも益あるまじ。暫く世を鎮めんほど、法皇をば鳥羽の北殿へ移し參らするか、然らずばこれへまれ御幸をなし參らせんと思ふはいかに。その儀ならば、定めて北面のものどもが中より、矢をも一つ射んずらん。その用意せよと侍どもに觸るべし。大方は入道、院方の奉公思ひ切つたり。馬に鞍おかせよ。着脊長取出せ。とこそ宣ひけれ。

(二)平重盛の邸。

主馬の判官盛國急ぎ小松殿へ馳參つて、世は早かう候。と申しければ、大臣聞きもあへ給はず。嗚呼、はや成親の卿の首の刎ねられたんな。と宣へば、その儀にては候はねども、入道殿の御着脊長を召され候ふ上は、侍どもも皆うち立つて、たゞ今院の御所法住寺殿へ寄せんとこそ出立ち候ひつれ。暫く世を鎮めんほど、法皇をば鳥羽の北殿へ遷し參らするか、然らずばこれへまれ御幸をなし參らせう

(一) 清盛の邸。



(筆音兩堀小) 赴へ殿條八西盛重

とは候へども、内々は鎮西の方へ流し參らせんとこそ議せられ候ひつれ。」と申しければ、大臣、何によつてたゞ今さることのおはすべきとは思はれけれども、けさの禪門の氣色、さるもの狂ほしきこともやおはすらんとて、急ぎ車を飛ばせて、西八條殿へぞおはしたる。

門前にて車より下り、門の内へさし入りて見給ふに、入道腹巻を着給ふ上、一門の卿相雲客數十人、各いろいろの直垂に思ひ思ひの鎧着て、中門の廊に二行に着せられたり。その外諸國の受領、衛府、諸司などは縁にゐるこぼれ、庭に

さやめく

もひしと並みゐたり。旗竿など引側め引側め、馬の腹帯を固め、冑の緒を締め、たゞ今皆うち立たんずる氣色どもなるに、小松殿、烏帽子直垂に大紋の指貫のそば取つて、さやめき入り給へば、事の外にぞ見えられける。

五戒
五常

面はゆう

入道伏目になつて、あはれ例の内府が世をへうずるさまにふるまふものかな。大きに諫めばやと思はれけれども、さすが子ながらも、内には五戒を保つて慈悲を先とし、外には五常を亂らず、禮儀を正しうし給ふ人なれば、あの姿に腹巻を着て向かはんこと、さすが面はゆう耻づかしうや思はれけん、障子を少し引立て、腹巻の上に素絹の衣を、あわて着に着給ひたりけるが、胸板の金物の少し外れて見えけるを隠さうと、頻りに衣の胸を引違へ引違へぞし給ひける。大臣は舍弟宗盛の卿の座上に着き給ふ。入道宣ひ出さるゝこともなく、大臣もまた申し上げらるゝ旨もなし。

一〇 小松内府 その二

稍あつて入道宣ひけるは、あの成親の卿が謀叛はことの數にも候はず、一向法皇の御結構にて候ひけるぞや、暫く世を鎮めんほど、法皇をば鳥羽の北殿へ遷し参らするか、然らずばこれへまれ御幸をなし参らせんと思ふはいかに、と宣へば、大臣聞きもあへ給はず、はらはらとぞ泣かれける。入道、さていかにやいかに、とあきれ給へば、稍あつて大臣涙をおさへて、この仰承り候ふに、御運ははや末になりぬと覺え候。人運命の傾かんとては、必ず惡事を思ひ立ち候ふなり。また御有様を見参らせ候ふに、更に現とも覺え候はず。さすが我が朝は邊地粟散の境とは申しながら、天照大神の御子孫、國の主として、天兒屋根尊の御末、朝の政を掌らせ給ひしよりこの方、太政大臣の官に至る人の甲冑をよろふこと、禮儀を背くにあらずや。就

邊地粟散の境

破戒無慙

中御出家の御身なり。法衣を脱捨てて忽ちに甲冑をよろひ、弓箭を帶しましまさんこと、内には破戒無慙の罪を招くのみならず、外には仁義禮智信の法にも背き候ひなんぞ。かたがた恐ある申事にて候へども、心の底に旨趣を残すべきにも候はず。

(一)伯夷と叔齊

まづ世に四恩候。天地の恩、國王の恩、父母の恩、衆生の恩これなり。その中に最も重きは朝恩なり。普天の下王地にあらずといふことなし。さればかの潁川の水に耳を洗ひ、首陽山に蕨を折りし賢人も、勅命の背き難き禮儀をば存知すところ承れ。いかに況んや、先祖にも未だ聞かざつし太政大臣を極めさせ給ふ。所謂重盛が無才愚暗の身を以て蓮府、槐門の位に至る。加之、國郡半ばは一門の所領となつて、田園悉く一家の進止たり。これ希代の朝恩にあらずや。今これ等の莫大の御恩を思し召し忘れさせ給ひて、みだりがはしく法皇を傾け参らせ給はんこと、天照大神、正八幡宮の神慮にも背かせ給

蓮府
槐門
進止

佛陀の冥慮

ひ候ひなんず。それ日本は神國なり。神は非禮を受け給ふべからず。この一門が代々の朝敵を平げて、四海の逆浪を鎮めしことは無雙の忠なれども、その賞に誇ることは傍若無人とも申しつべし。然れども當家の運命未だ盡きざるによつて、事すでに露れ候ひぬ。その上仰せあはせらるゝ成親の卿を召置かれぬる上は、たとひ君いかなる不思議を思し召し立たせ給ふとも、何の恐か候ふべき。所當の罪科行はれぬる上は、退いて事の由を陳じ申させ給ひて、君の御爲には愈、奉公の忠勤をつくし、民の爲には益、撫育の哀憐を致させ給はば、神明の加護にあづかつて、佛陀の冥慮に背くべからず。神明、佛陀感應あらば、君も思し召し直すことなどか候はざるべき。

これは尤も君の御理にて候へば、かなはざらんまでも、院中を守護し参らせ候ふべし。その故は、重盛はじめ叙爵より今大臣大將に至るまで、しかしながら君の御恩ならずといふことなし。その恩の

一入再入

重きことを思へば、千顆萬顆の玉にも超え、その恩の深き色を案ずれば、一入再入の紅にもなほ過ぎたらん。然らば院中に参り籠り候ふべし。悲しきかな君の御爲に奉公の忠を致さんとすれば、迷廬八萬の頂よりもなほ高き父の恩忽ちに忘れんとす。痛ましきかな、不孝の罪を逃れんとすれば、君の御爲にはすでに不忠の逆臣ともなりぬべし。進退これ谷れり。是非いかにも辨へ難し。申し受くる所詮は、たゞ重盛が首を召され候へ。その故は、院參の御供をも仕るべからず、また院中をも守護し参らすべからず。

富貴といひ、榮華といひ、朝恩と申し、重職といひ、旁極めさせ給ひぬれば、御運の盡きんこと難かるべきにあらず。富貴の家には祿位重疊せり。再び實なる木は、その根必ず傷むと見えて候。心細くこそ候へ。いつまでか命生きて亂れん世をも見候ふべき。たゞ末代に生を享けて、かゝる憂目に逢ひ候ふ重盛が果報のほどこそ拙う候へ。

直衣

たゞ今も侍一人に仰せ付けられ、御壺の中へ引出されて、重盛が頭を刎ねられんことは、いと易いほどの御事にこそ候はんずらめ。これを各聞き給へ。とて、直衣の袖も絞るばかりにかき口説き、さめざめと泣き給へば、その座に並みぬ給へる平家一門の人々、皆袖をぞ濡されける。

ひがごと

入道頼みきつたる内府のかやうに宣へば、世にも力なげにて、いや、それまでのことは思ひも寄り候はず。悪黨どもの申すことに君のつかせ給ひて、いかなるひがごとなどもや出で來んずらんと思ふばかりでこそ候へ。大臣たとひいかなるひがごと出で來候へばとて、君をば何とかし参らせ給ふべき。とて、つい立つて中門に出で、侍どもに宣ひけるは、たゞ今これにて申しつることどもをば、汝等はよく承らずや。けさよりこれに候ひて、かやうのことどもを申ししづめんとは存じつれども、餘りにひたさわざに見えつる間、

ひたさわざ

まづ歸りつるなり。院参の御供に於ては、重盛が頭の刎ねられたらんを見て仕れ。されば人参れ。とて、小松殿へぞ歸られける。

その後大臣、主馬の判官盛國を召して、重盛こそけさより別して天下の大事を聞き出したんなれ。われをわれと思はんずるものどもは、物の具して急ぎ参れと催せ。と宣へば、馳せまはつて披露す。おぼろげにては騒ぎ給はぬ人の、かやうの披露のあるは、まことに別の仔細のあるにこそとて、われもわれもと馳参る。都の内外にあふれるたる兵ども、あるは鎧着て未だ冑を着ぬもあり。あるは矢負うて未だ弓を持たぬもあり。片鎧ふむやふまずにて、あわて騒いで馳参る。

小松殿に騒ぐことありと聞えしかば、西八條に數千騎ありける兵ども、入道にはかうとも申しも入れず、さやめきつれて、皆小松殿へぞ馳せたりける。弓箭にたづさはるほどのものは一人も残らず。

筑後の守貞能がたゞ一人候ひけるを、御前へ召して、内府は何と思ひて、これ等をば皆かやうに呼取るやらん。けさこれにていひつるやうに、淨海が許へ討手などもや向けんずらん。と宣へば、貞能涙をばらはらと流して、人も人にこそよらせ給ひ候へ。いかでかたゞ今さる御事候ふべき。けさこれにて申させ給ひつる御事どもをば、はや皆御後悔ぞ候ふらん。と申しければ、入道、内府に中たがうては悪しかりなんとや思はれけん。法皇迎へ參らせんと思はれける心も和ぎ、急ぎ腹巻ぬぎ置き、素絹の衣に袈裟うちかけて、いと心にも起らぬ念誦してこそおはしけれ。

— 平家物語 —

一一 平家雜感 その一

高山林次郎

凡そ世に傳へ遺されし歴史は多かれど、平家の都落ばかり、哀にもまた目覺しきはなかるべし。

(一) 治承四年十二月、平重衡、父清盛の命を受けて奈良東大寺興福寺を焼いた。
 (二) 養和元年三月、重衡等、源行家を尾張國墨股川に討つて破つた。
 (三) 養和元年、平氏展、義仲に破られた。
 (四) 壽永二年七月、義仲延曆寺に據つた。
 (五) 一み吉野の山のあなたに宿もがな、身のうき時のかくれ家にせん。(古今集、よみ人しらす)
 (六) 壽永二年七月、義仲を避けて平氏西海に走つた。
 一炬の煙となす
 鳳闕
 椒房

南都の餘燼未だ冷めず墨股の勝鬪なほ響きぬるに、信越俄に雲亂れて、木曾の五萬騎はや比叡のあなたに充ち満ちぬ。宇治、淀の備脆くも潰えて、都も今を限りとぞ見えし。おはれ一門の天下身を置くに所なし。世はかく憂きを、み吉野の山のあなたに隱家はなきか。いざさらば已みなん。都の中にていかにもならんよりは、西國の行幸に一旦の凌辱を忍ばせ給はんや。生死も知らぬ別路に、人の哀の限りもなう、また歸り來べき都としも思はねばにや、六波羅、池殿、西八條以下一門譜第の邸宅、宿房、京白川の四五萬家をあはせて、一炬の煙となしはてぬるこそ、あわたゞしかりしか。

ここに鳳闕の礎空しく残り、椒房の嵐夜々悲しむ。保元この方、天下の榮華をつくしたる花の都の故郷を、燒野の原と願て、末は煙の波路をば、行方も知らずさすらふらん。直衣、束帶の身にも、今は黒金の衣を着けたれども、誰かは詠歎の餘哀になれて、弓矢の譽を勵む

一一 平家雜感 その一

四七

(七)「ふるさとを
焼野が原とか
へりみて、未
も煙の浪路を
ぞ行く。」(平
家物語、平經
盛) 翠華搖々

身にしむ秋は
欺かれず

(一)重盛の第三子
清經。明月に
對して笛を吹
き、海に投じ
て死んだ。

べき。さても棄難き命や。今こそはうき世な
れ。さすがにしのぼる、昔のさまの夢に入
るをばいかにせん。翠華搖々として西に向
かへば、秋風到る所野に満てり。嗚呼、きのふ
は東關のもとに轡を並べて十萬餘騎、けふ
は西海の波に纜を解きて七千餘人。行手の
空はわかねども、身にしむ秋は欺かれず。渚
に寄する波の音、袂に宿る月の影、いづれか
心を傷ましめざるべき。月の出づる山の端
を、あなた(一)の空とや思しけん、日暮、舳に笛吹
く人あり、響は遠く煙波をかすめて、三軍ひ
としく耳を欬つ。嗚呼、この時この人、想果し
て如何。



一のそ (筆仙棟井平) 落 没

一一一 平家雜感 その二

世にも哀なるは平家とぞいふめる。げに
この一門の盛衰を考ふるに、心も詞も及び
難きなり。

案ずれば、一旦の榮華に耽りて、百年の計
を思はず、今や秋の嵐の吹荒ばんずる且も、
春の夜の夢なほ臆にして、覺めての後はさ
すがにうき世と觀ずれども、先世後代す
でに梭をかへたるをいかにすべき。今を昔に
反さんすべもかた絲の、よりくづれたる世
こそ、返す返すも是非なけれ。

されば風雅にかくれては、一題の遺詠に



二のそ (筆仙棟井平) 落 没

梭をかふ

(一)平忠度。

平家雜感 その二
二のそ (筆仙棟井平) 落 没

(一)平維盛

今生の本懐を終へ、恩愛にほだされては、己身の現在に來世の果報を思はず。哀は桐の一葉に散初めて、世はとこしへの秋とぞ見えにける。思へば怪しきまでに哀なりける運命かな。

さるにても入道相國の生涯こそ、なかなかおもしろかりけれ。

弓矢のいさをしは、や畢んぬ。朝家の權柄今はた盛なり。一門殿上に昇りて六十餘人、私封全國にわたりて三十餘州、攝籙の家は名のみにて、四海の成敗皆ここに集れり。昔は殿上の交をだに嫌はれし人、今は、この人ならでは人にあらじ。と唱へられ、三百の禿童は路に往反すれども、京師の長吏これが爲に目を歛つるばかりなり。されば十善の帝王畏くも外戚の威におされ給ひて、八幡、賀茂の御幸は、八重の潮路の巖島とぞ觸れられける。なにがしの卿が、入る日をも招きかへさんずる勢。と書かれしも、げにことわりとぞ覺ゆる。不敵なる入道は、私門の榮に飽きたらで、世に人もなげにふるま

攝籙

成敗

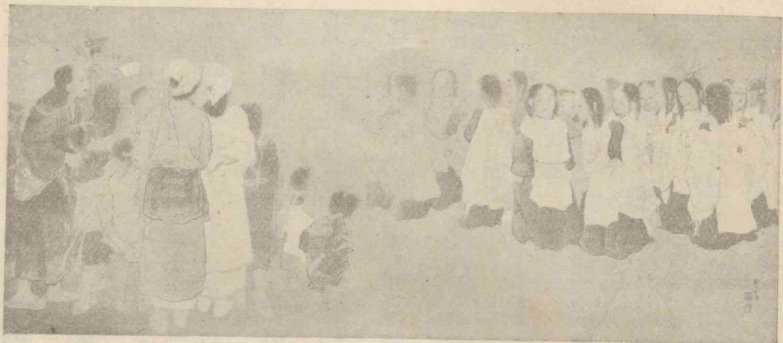
射山の嵐

(一)治承四年福原遷都

(二)平安京、當時

の落首に「百年を四かへりまで、にすき來に、愛宕の里に、あれや、はてなん」(平家物語)

(三)重盛の子。平家没落の前、後山に上つた。野終焉の時、は不明。一八二〇年、
容儀帶佩



三の百の禿童 (菊池契月筆)

はれけるこそゆゝしけれ。ここに卿相雲客、流離の難に遇ふもの四十餘人、法皇の御身を以てすら、城南の離宮に射山の嵐をしのばせ給ふ。中にも重代の帝座俄に動きて、愛宕の里の哀をとゞめけるこそ、なかなかにあさましかりしか。アハ
咲きも残らず散りも始めぬ、櫻花、嵐なくともかくてやはやむべき。一朝東關急を傳へて、大將軍權亮少將維盛、赤地の錦の直垂に萌黄匂の鎧着て、連錢蘆毛の馬に金覆輪の鞍置かせたる容儀帶佩こそ、あつはれ平門隨一の貴公子と見えしかど、富士川の水禽に算を亂しし十萬餘騎は、徒に永き世の

(一)比叡山延曆寺
と奈良興福寺。

笑をとゞめたるに過ぎず。加ふるに北土俄に雲亂れて、木曾の山氣漸く都に逼り、^(一)兩山の衆徒またすでに反覆の色を示しぬ。平家の運命日に益急なり。

時しも入道は病に罹りぬ。あはれ病の床の寂しきに、霜夜の鐘の響の闇の底に沈む時、安藝守の昔より太政入道の今に至るまで、三十餘年の過去を靜かに憶ひ出でたる時、而して命の際の身ぞと觀じたる時、彼果して如何の感慨をか催しけん。一代の榮華身に餘りて、保平のいさをまたいふに足らずと思はざりしか。己につらかりし人々を、かくまでに惱まししことの罪深かりきとは思はざりしか。幾たびか帝座を驚かし奉りしはては、軍兵を擁して法皇を幽閉しまゐらせしことの中にも、非道の所行なりしを思はざりしか。更に小松の内府が、身命にかへて乃父の罪業を救はんとせし至孝の情に想ひ到りて、恩愛の絆にうたゝ、悔恨の心を動かすことなかり

乃父

三世の因果
とまれかくま
れ
一我
眇軀

しか。佛門に歸依して入道と呼びなせる身の、今や六慾煩惱の絆を離れんずる大事の際に、今生の名利を棄てて、未來の淨樂を欣求する一念を發することなかりしか。皆あらず。入道は死に至るまでその初念を翻すことなく、正にその生けるが如くにして死せしなり。今はの詞にいはく、兵衛佐頼朝が首を見ざりつるこそ、返す返すも遺憾なれ。我死したりとて佛事孝養をもすべからず、堂塔をも建つべからず。急ぎ討手を下し、彼が首を刎ねて我が墓前に懸けよ。これぞ我に對しての今生、後世の孝養にてはあらんずる。と。一念の執着に必衰の運命をものともせず、三世の因果を身にひくとも、なほ怨敵に報いんことを必せり。その事の可否はしばらく措き、とまれかくまれ、丈夫たる心の強きは感ずべきなり。たとひ四海の波を翻して彼が頭にそゝぐとも、なほこの一我をいかにもすること能はざらん。六尺の眇軀ここに至れば天地の大にも比ぶべく、運命我

に於て浮塵に等しからん。所謂死して而して生けるものといふべきか。

——樽牛全集——

一三 寂光院 その一

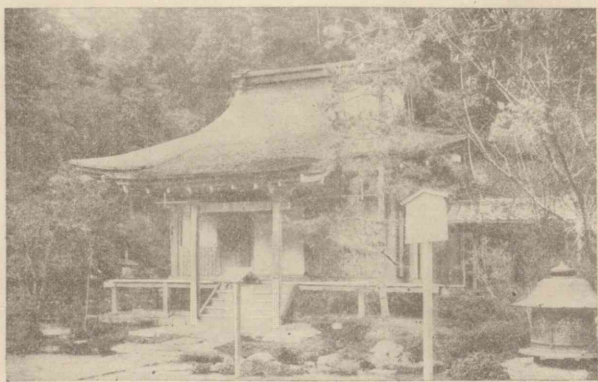
(一)後白河法皇。
(二)後鳥羽天皇の即位元年(一八四六年)。

夜をこめて
(三)藤原實定。
(四)藤原兼雅。
(五)源通親。
夏草の茂みが

法皇は文治二年の春の頃、建禮門院の大原の閑居の御すまひ御覽ぜまほしうは思し召されけれども、衣更着、彌生のほどは嵐烈しう、餘寒もいまだ盡きせず。嶺の白雪消えやらで、谷のつら、もうち解けず。かくて春過ぎ夏來つて北祭も過ぎしかば、法皇夜をこめて大原の奥へ御幸なる。しのびの御幸なりけれども、供奉の人々には徳大寺、花山院、土御門以下公卿六人、殿上人八人、北面少々候ひけり。遠山に懸る白雲は、散りにし花の形見なり。青葉に見ゆる梢には、春の名残ぞ惜しまる。頃は卯月二十日餘りの事なれば、夏草の茂みが末を分入らせ給ふに、はじめたる御幸なれば、御覽じなれたる方

蕘破れては霧
不斷の香を
きき、屏落ちて
は月常住の燈
を掲ぐ

(一)「夏山の青葉
まじりの遅櫻、
初花よりもめ
づらしきかな。」
(金葉集、藤原
盛房)



もなく、人跡絶えたるほどにも思し召し知られて、あはれなり。西の山

の麓に一字の御堂あり、即ち寂光院これなり。古う造りなせる泉水、木立、よしあるさまの所なり。蕘破れては霧不斷の香を、焼き、屏落ちては月常住の燈を掲ぐとは、かやうの所をや申すべき。庭の若草茂り合ひ、青柳絲を亂りつ、池の浮草波にただよひ、錦をさらすかとあやまたる。中島の松にかゝれる藤波の、うら紫に咲ける色、青葉まじりの遅櫻、初花よりも珍しく、岸の山吹咲亂れ、八重立つ雲の絶間より、山杜鵑の一聲も、君の御幸を待ち顔なり。法皇これを觀覽あつて、かくぞあそばされける、

綠蘿の垣
翠苔の山

〔一〕瓢箪塵空。草
滋。顔淵之巷。
藜藿深鎖。雨
濕。原憲之樞。〔
朗詠集〕
洩る月影にあ
らそひて

まさ木のかづ
ら青つゞら
く人稀なる所
なり

池水にみぎはの櫻ちりしきて
なみの花こそさかりなりけれ

ふりにける岩の絶間より落ちくる水の音さへ古びて、よしある
所なり。綠蘿の垣、翠苔の山、繪にかくとも筆も及び難し。さて女院の
御庵室を叡覽あるに、軒には蔦、薜はひかゝり、しのぶまじりの忘草、
瓢箪^一塵空し、草顔淵が巷に滋く、藜藿深く鎖せり、雨原憲が樞を濕ほ
すともいひつべし。杉のふき目もまばらにて、時雨も霜もおく露も、
洩る月影にあらそひて、たまるべしとも見えざりけり。後は山前は
野邊、いざさを笹に風さわぎ、世にたゞぬ身のならひとて、うきふし
しげき竹柱、都の方の音づれば、間遠に結へるませ垣や、わづかに言
とふものとは、峰に木傳ふ猿の聲、賤がつま木の斧の音、これ等が
音づれならでは、まさ木のかづら青つゞら、くる人稀なる所なり。
法皇、人やある。人やある。と召されけれども、御應へ申すものもな

捨身の行

さめざめ

〔一〕藤原通憲。鳥
羽崇徳、近衛、
後白河の四朝
に歴仕した。

し。稍あつて老衰へたる尼一人参りたり、女院はいづくへ御幸なり
ぬるぞ。と仰せければ、この上の山へ花摘みに入らせ給ひて候。と申
す。さこそ世を厭ふ御習とはいひながら、さやうのことに仕へ奉る
人もなきにや、御いたはしうこそ。と仰せければ、この尼申しけるは、
「五戒十善の御果報の盡きさせ給ふによつて、今かゝる御目を御覽
ぜられ候ふにこそ。捨身の行になじかは御身を惜しませ給ひ候ふ
べき。とぞ申しける。この尼の有様を御覽ずれば、身には絹布の分ち
も見えぬ物を結び集めてぞ着たりける。あの有様にても、かやうの
こと申す不思議さよと思し召して、抑、汝はいかなるものぞ。と仰せ
ければ、この尼さめざめと泣いて、しばしは御返事にも及ばず。

一四 寂光院 その二

稍あつて涙をおさへて、申すにつけて憚り覺え候へども、故少納

忍びあへぬさま

言入道信西が女、阿波の内侍と申すものにて候ふなり。母は紀伊二位。さしも御いとほしみ深うこそ候ひしに、御覽じ忘れさせ給ふにつけても、身の衰へぬるほど思ひ知られて、今更せん方なうこそ候へ。とて、袖を顔に押當てて忍びあへぬさま、目も當てられず。法皇、げにも汝は阿波の内侍にこそあなれ。御覽じ忘れさせ給ふぞかし。何事につけても、たゞ夢とのみこそ思し召せ。とて、御涙せきあへさせ給はず。供奉の公卿、殿上人も、不思議のこと申す尼かなと思ひたれば、ことわりにて申しけりとぞ、各感じあはれける。

さてかなたこなたを觀覽あるに、庭の千草露重く、籬に倒れ掛りつゝ、外面の小田も水越えて、鳴立つ隙も見えわかず。さて女院の御庵室へ入らせおはしまし、障子を引明けて觀覽あるに、一間には來迎の三尊おはします。中尊の御手には五色の絲を掛けられたり。左に普賢の繪像、右に善導和尚、並びに先帝の御影を掛け、八軸の妙文、

來迎の三尊
(一)釋迦に侍して
說法を輔けた
普賢菩薩。
(二)唐の高僧。
(三)安徳天皇。

蘭麝の薫
(一)維摩詰のこと。
釋迦と同時代
の人。

(二)出家して入唐
し、圓通大師
と號した。
(三)唐の清涼山竹
林寺のこと。
聖衆來迎

九帖の御書も置かれたり。蘭麝の薫に引きかへて、香の烟ぞ立昇る。かの淨名居士の方丈の室の内に、三萬二千の床を並べ、十方の諸佛を請じ給ひけんも、かくやとぞ覺えける。障子には諸經の要文ども色紙に書いて、所々におされたり。その中に大江の定基法師が、清涼山にして詠じたりけん、笙歌遙かに聞ゆ孤雲の上。聖衆來迎す落日の前。とも書かれたり。少し引きのけて、女院の御歌と思しくて、

思ひきや深山の奥にすまひして
くもゐの月をよそに見んとは

さて傍を觀覽あるに、御寢所と思しくて、竹の御竿に麻の御衣、紙の御衾など掛けられたり。さしも本朝漢土の妙なる類數をつくし、綾羅錦繡の装も、さながら夢にぞなりにける。法皇御涙を流させ給へば、供奉の人々も、まのあたり見奉りしことども、今のやうに覺えて、皆袖をぞ絞られける。

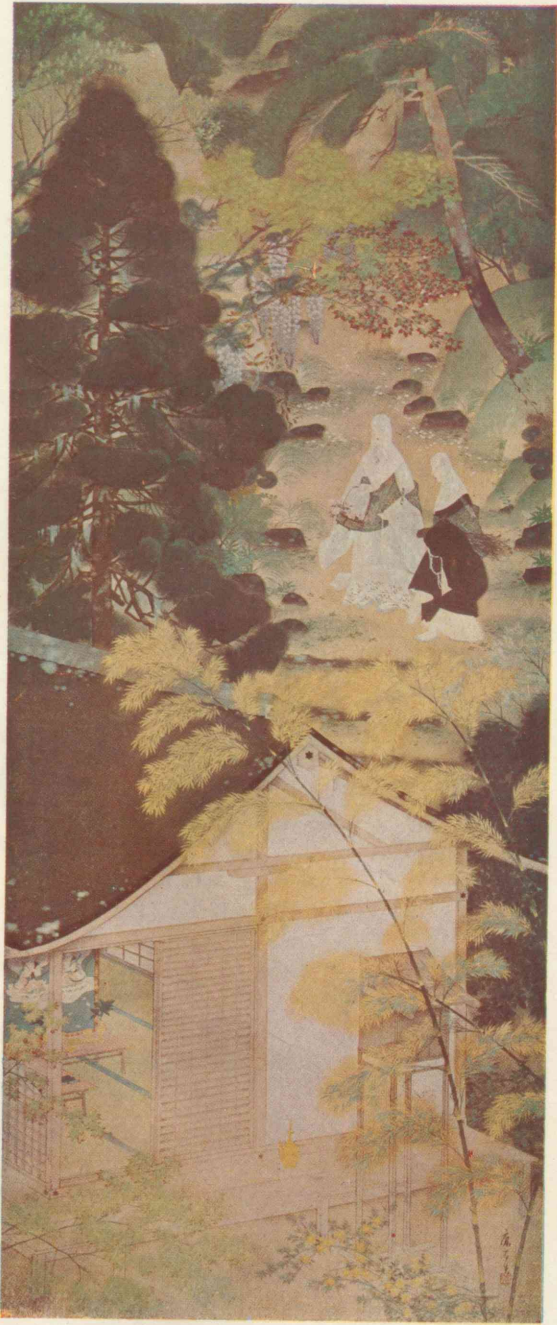
綾羅錦繡

花筐

稍あつて上の山より濃き墨染の衣着たる尼二人、岩のかけぢを傳ひつゝ、おり煩ひたるさまなりけり。法皇、あれはいかなるものぞ。と仰せければ、老尼涙をおさへて、花筐臂にかけ、岩躑躅取具して持たせ給ひて候ふは、女院にてこそわたらせ給ひ候ふなれ。つま木に蕨折添へて持ちたるは、鳥飼の中納言維實の女、五條の大納言國綱の養子、先帝の御乳母大納言の典侍の局。と申しもあへず泣きにけり。法皇御涙を流させ給へば、供奉の公卿殿上人も、皆袖をぞ濡される。女院は世を厭ふ御習とはいひながら、今かゝる有様を見え参らせんずらん耻づかしさよ。消えも失せばやと思し召せどもかひぞなき。宵々毎の閨伽の水、掬ぶ袂もしをるゝに、暁おきの袖の上、山路の露も繁くして、絞りやかねさせ給ひけん、山へもかへらせ給はず、また御庵室へも入らせおはしまさず、あきれて立たせましましたるところに、内侍の尼参りつゝ、花筐をば賜はりけり、世を厭ふ御

閨伽の水

手向の花



岩田正己筆

攝取の光明

ならひ、何か苦しう候ふべき。早々御見参あつて、還御なし参らさせ候へ。」と申しければ、女院御涙をおさへて、御庵室に入らせおはします。一念の窓の前には攝取の光明を期し、十念の柴の樞には聖衆の來迎をこそ待ちつるに、思の外の御幸かなとて、御見参ありけり。

—平家物語—

武士の風流〔自修文〕

八幡太郎義家の勿來關外の風流は、詩歌に詠ぜられ、畫圖に入つて、人の知つた事蹟である。弟の義光といひ、兄の義家といひ、武人として音楽に、文學に、その趣味の高かつたのは、後の武士をして愈、欽慕措く能はざらしめた所以であらう。眞に日本武士の典型であつたといつてよろしい。前九年、後三年、邊土の戦に鞅掌した身の、勿來關外に馬を控へて、

吹く風をなこそその關とおもへども

みちもせに散る山ざくらかな

音楽に
弟義光は笙の
名人であつた。
欽慕
おもひしたふ
こと。
(一)源頼義及び義
家が安倍頼時
及びその子貞
任と宗任とを
討つた戦。(一
七二六年—
七二四年)
(二)源義家が清原
家衡及び武衡
を討つた戦。
(一七四六年
—一七四七年)
鞅掌
従事したはた
らくこと。

典雅 ひんよくみやびやかなこと
 雅懷 風流な心事
 (一) 後白河法皇の院宣によつて藤原俊成が撰した歌集。
 (二) 天正五年上杉謙信(不識庵)が能登七尾城を攻めたのりに詠んだもの。
 (三) 學者。天永二年(一七七一)年歿。
 赤心を人の腹中に置く ま心を以て人に接する
 征夷大將軍 上古蝦夷の叛亂を討つ爲に置かれた職
 (四) 後白河天皇の第四子。三條宮とも高倉宮とも稱する。
 (五) 深山の櫻の木も、冬の間は他の木と同様に見えて區別

何等の典雅ぞ。何等の雅懷ぞ。これは勅撰の千載集に載つた名歌である。(二) 能州の陣頭に明月を詠じた不識庵謙信と、前後一對ともいふべきである。
 (三) 大江匡房が「惜しいかな好漢兵法を知らず。」といつたのを聞いて、直ちにこれについて學んだといふ話も、貞任滅亡の後、その弟の宗任を家來として、赤心を人の腹中に置いた話も、皆その寛仁大度の英雄たることを證明するのである。或家に圍碁を試みて居ると、賊が入つた。「八幡殿の御座ぞ。」といつた聲を聞いて、賊は皆刀を捨てて縛についたといふことが古事談に見えて居る。當時名聲の盛であつたこともこれでわかる。單に武勇一點張でそれだけの名聲は得られるものではない。温雅春のやうな徳風の、人を感化させる趣があつたに違ひない。後の征夷大將軍が皆八幡公の子孫であつたことも、その由來の偶然でないことがわかる。

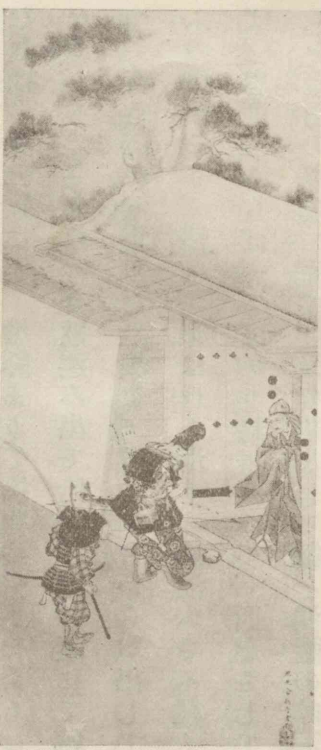
平氏全盛の世、以仁王の令旨を奉じて源氏復興の旗揚をした源三位頼政、或時深山花といふ御題を賜はつて、
 (五) 深山木のその梢とも見えざりし

がながかつたのに、春が來り花が咲いて始めて櫻であることが知られた。
 (一) 治承四年のこと。
 扇の芝 扇形をした芝生。平等院の境内にある。

(二) 藤原俊成。京都の五條に住んだ故にいふ。
 (三) 山城國淀。
 苦しからず さしつかへない。

さくらは花にあらはれにけり

あはれこの源三位、功名の念は急であつたが、時世は未だ彼に幸せず、宇治橋の一戦に脆くもうち敗れて、扇の芝で腹かき切つて死んだ。その時の辭世に、
 埋木の花咲くこともなかりしに



(筆音納堀小) 度 忠

ある。日比は五條の三位俊成卿を歌の師としてゐたが、平家都落の途中から侍五六騎と取つて返し、俊成卿の門をほとほとたたいた。「忠度」と名のれば、「すは落人の歸りたるよ。」と内では騒ぐ様子。忠度馬を下つて聲高らかに、「三位殿に申すべきことありて、忠度が參つて候。」俊成これを聞いて、「苦しからず、

みのなるはてぞ

あはれなりける

平家の公達には風流のすさびのあつた人が多かつた中に、最も名高いのは薩摩守忠度で

一五 晩春の別離

葛崎藤村

時は暮れゆく春よりぞ
また短きはなかるらん。
恨は友のあかれより
さらに長きはなかるらん。

君をおくりて花ちかき
高樓^{たかどの}までも来て見れば、
みどりにまよふ鶯は
霞むなしく鳴きかへり、
しろき光は佐保姫の

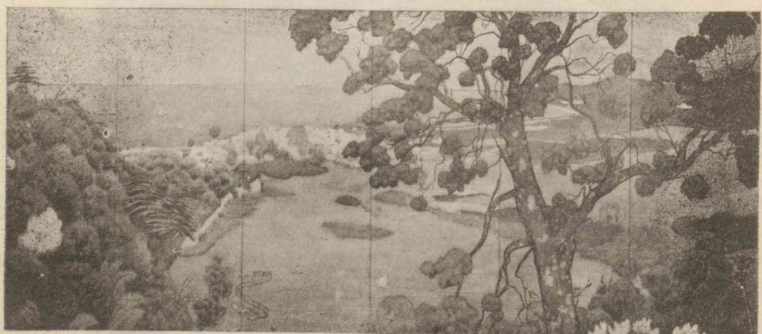
佐保姫の春の
車駕



一のそ (筆村遙田池) 春残の畔湖

春の車駕^{くるま}を照らすかな。

これより君は行く雲と
ともに都を立ちいでて、
おもへば琵琶の湖の
岸の光にまよふとき、
ひがし膳吹^{だんぷき}の山高く、
西には比叡、比良の峰、
日は行きかよふ山々の
ふかきながめを伏仰ぎ、
いかにすぐれし想^{おもひ}をか
沈める波にたふらん。



二のそ (筆村遙田池) 春残の畔湖

(一)白河法皇

ながれはむなし(一)法皇の
 夢はるかなる賀茂の水
 水にうつろふ山城の
 みやびの都ゆく春の
 かすめる姿見つくして、
 畿内にせまる伊賀伊勢の
 鈴鹿の山の波とほく
 海に落つるを望む時、
 いかによろづの恨をば、
 空行く鶯に窮むらん。

春さり行かば、青によし
 奈良の都に尋ね入り、



(筆郎八川中) 門鳴の波阿

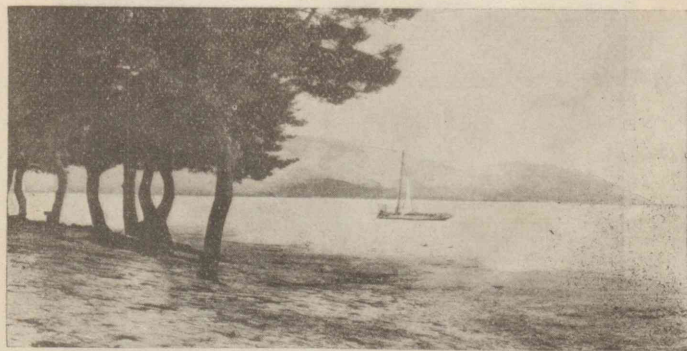
としつき君がこひしたふ
 御堂のうちに遊ぶ時、
 ふるきたぐみ藝術の花の香の
 伽藍の壁にのこりなば、
 いかほよに韻を身にしめて、
 深き思にしづむらん。
 さては秋津の島が根の
 南のつばさ紀の國を
 めぐりて進む黒潮の、
 鳴門に落ちて行く所、
 あまぎは遠く白き日の
 光をもらす雲裂けて、



(筆郎孟木子鹿) 濱の子舞

目にはるかなる遠海の
波のをどるを望む時、
いかに胸打つ音たかく、
君が血汐のさわぐらん。

または名に負ふ歌枕
波に千とせの色映る
明石の浦の朝ぼらけ、
松よろづよの音にひびく
舞子の濱のゆふまぐれ、
もしそれ海の雲落ちて、
淡路の島の影くらく、
さ霧のうちには鳴きかよふ



比 良

ひめごと

千鳥の聲を聞く時は、
いかに浦邊にさすらひて
遠き昔をしのぶらん。

げに君がため山々は
雲を停めん、浦々は
磯にながるゝ白波を
あげんとすらん。よしさらば、
旅路遙かに野邊行かば
野邊のひめごと、森行かば
森のひめごと探りもて、
高きに登り、あめつちの
もなかに遊び、大川の



明 石

朽ちせぬ琴

ながれをきはめ、山々の
 神をもよばひ、谷々の
 鬼をもおこし、歌人の
 魂をも遠く返しつゝ、
 清しき聲をうちあげて、
 朽ちせぬ琴をかきならせ。
 さらば名残は盡きずとも、
 たもとを分つゆふまぐれ、
 見よ、影ふかき欄干に、
 けむりをふくむ藤の花。
 北行く雁はおほ空の
 霞に沈み鳴きかへり、



(現權鹿鈴) 山 鹿 鈴

彩なす雲も愁へつゝ、
 君を送るに似たりけり。

あゝ、いつかまた相逢うて
 もとの契をあたゝめん。
 梅も櫻も散りはてて、
 すでに柳は深みどり、
 人はあかねど、ゆく春を
 いつまでここに留むべき。
 われに惜しむな、家づとの
 一枝の筆の花の色香を。

— 藤村詩集 —

一六 四季小品

② 春 雨

中島廣足

萱葺ける軒は、雨の音靜かにて、池水のあやこまやかなるに、いと深う霞める梢より、つばさしをれたる鳥どもの、そこはかとなく飛びわたるなど、いといたうをかし。暮れぬれば、ましていとしめやかにて、見る書さへ今ひときは心しみぬ。風少し吹出でて、燈臺の火のまた、きたるに、何とも知らぬ花の香の、ほのかにうちかをりたるなどもをかし。

— 樞園文集 —

二 風 鈴

香川景樹

入相

月の晴れわたり、花の散行く時々を告ぐる、いとあはれなり。かの入相、曉うち定めたるたぐひならんや。まして水無月の照る日かげろひて、竹の若葉、松の葉末、そよめき出でし夕暮に聲あはせたる、物

にも似ず。

三 砧

清水濱臣

近しと聞けば遠く、遠しと聞けば近し。しきるもたゆみ、たゆむもまたしきる。雁がねの聲の砧をさそふにやあらん。砧の音の雁がねに通ふにやあらん。あなあやし。あなあやし。そもこの音の悲しきか。住む里の寂しきか。打つをりの憂き故か。皆あらず。聞く人の心の寂しきなり。

— 泊酒舎文集 —

四 秋の山田

藤井高尚

秋の山田は夜こそ殊に寂しきものの、さすがにをかしくはあれ。あやしの小屋に賤の男が起きゐて、ひた引きならしつゝ、鹿猿を驚かし、谷水の流にかけたるひたの、おのれと音するなど、とりあつめてあはれなること多かり。かく心をつくしてもるとはすれど、曉近うなりては、うちまどろむにやあらん。物の音なひもたえだえなれ

ば、小屋近く鹿の寄り來つゝ、何のかひよとうちなきたるは、いぎた
なさをいさめ顔なりや。

五 冬のこゝろ

伴 蒿 蹊

花咲き實なりし木も紅葉を限りに冬がれ、木の芽はる雨も時雨
に變り、それもいつしか染めぬべき物なくなりぬれば、雲に移りて
雪と積る。一歳の月日は、隙行く駒のほどもなきかな。振分髪うな
ゐ子が大人しくなりぬといはれしなん、やがて老の始にて、終に髭
髪（一）の白くなりぬるをしも、つくづくと思ひ較べて、埋火の許にのみ
うづくまるを、若き人々はさこそ見苦しと思ふらめ。我もまたしか
ぞありし、少壯（一）いくばく時ぞ、老をいかん。とからうたにも聞ゆるを、
徒に朽ちはてぬることの、今更に悔ゆるもかひぞなき。前の車の覆
るを後の車の戒てふこともあり。我にな倣ひ給ひそよ。冬は歳の餘
りともいふを、この頃の雪を集め、長き夜を空しくないね給ひそと

うなる子

（一）「少壯幾時兮
奈老何。」漢武
帝、秋風辭

（一）「丈夫爲志
窮當益堅。
老當益壯。」
後漢書馬援
傳

いはまほし老いては益、壯なるべしと勇みし人は、己が類にはあら
ず。たゞ寒きにたへねば、ひたやごもりに籠るほどに、ねぶりは宵よ
り兆して、しかも夜深くは目覺めぬ。冬も憂し。老も憂し。こは老の心
をうつすとやいはん、冬の心をうつすとやいはん。

一七 川柳點

金子元臣

川柳點は實に剃刀の如きか、觸るゝもの皆斷れ、近づくもの皆傷
つく。語句簡勁にして直ちに人の肺腑に入り、諷刺骨に徹り、滑稽お
とがひを解き、或は痛快に、或は輕妙に、或は突梯に、或は奇怪に、千變
萬化、人をして應接に違あらざらしむ。時に輕薄鄙俚なる調なきに
しもあらねど、要するに、寸にして珍なるものなり。いで左にその二
三を擧げて、いひ試みん。

あがるなといはぬばかりの帳を出し

諷刺
おとがひを解
く
突梯
應接に違あら
ず
寸にして珍

無筆者年賀に来て、御慶帳の記名に困り、さらば來ぬ分にして下され。といひしこと、昔の笑話に見えたり。今は帳の代りに名刺受を立關に出す。これもあがるなといはぬばかりなり。

竹の子は盗まれてから番がつき



初代 柳川

よくあることなり。後の祭にもあれ、何にもあれ、番を附くるは附けざるに勝れり。聞きやうによりては、諷刺ともなり、訓誡ともなるなり。

おさへれば薄はなせばきりぎりす

形容の妙を曲盡せり。蘇東坡が「餓蛟取渴虎」と書きしをいみじき手がらのやうに驚ける人、若しこの句を見れば、何とかいはん。

本降になつて出てゆく雨やどり

道灌の「いそがずばぬれざらましを」の歌と一對の巧語、急ぎても

(一)「いそがずばぬれざらましを」旅人の、あつとより晴る、あめ野路のむらさき

座頭

わろし。急がでもわろし。とにかく考へものなり。

提燈が消えて座頭に手を引かれ

その矛盾がをかききなり。塙檢校が「さてさて目あきは不自由な」といひしに似たり。

片假名に四角な文字は手を引かれ

漢文に捨假名、反點の左右にうるさく附きまとへるさま、譬へ得て妙。昔のヲコト點ならんには、四角な文字に灸をする。ともいはいふべし。

手紙には狸臺には鯉を載せ

手紙を見て肝を潰し、臺を見て胸撫でおろすらんをかしさよ。近來は中等教育を終へたるものの文章にも、狐を馬に乗せたる類のこと多し。あながちにこの狸をのみ笑ひ難くや。

名物を食ふが無筆の旅日記

腹のふくる、日記かな。食ふより外に能なき人間を罵倒し得て痛快。

泣く泣くもよい方を取る形見わけ

人情の弱點を穿ち過ぎて、餘りに酷なる心地す。かの赤穂の城渡の際、御金配分に高割を唱へし(一)小野九太夫は、その露骨なるものか。此の如く、川柳點は尋常茶飯のできごとをとらへて、よく滑稽化するのみならず、また最も眞面目なるべき故事、傳説、史實等を題目として、その縦横自在なる口吻を弄せり。

(二)戸隠も神樂のあひだひげをぬき

岩戸の細目に開くまでは、用のなき戸隠明神なるを思ふべし。毛抜にひげぬくひま人の所作を、神代に附會したる、働あり。

御紀行拜見に能因は當惑し

なまじひに名歌を詠みて、苦勞をまうけたるは能因なり。天日に

(一)本名大野九郎兵衛。

口吻を弄す

(二)信濃の戸隠神社。手力雄神を祀る。

附會す

(一)四卷。藤原清輔の著した歌學書。
(二)能因法師の書いた奥州紀行。

(三)猪俣太。早太とも書く。源賴政の臣。
(四)源平盛衰記のこと。

焦して顔だけは黒めたれど、紀行までは手が届かずやありけん、ものにそのさたなし。作者のつけ目はここなり。但し袋草紙に、一度に於ては實か。八十島の記を書けり。とあり。いつも室内旅行家にてはあらざりけらし。

忠盛の高名の場を犬がなめ

抱きとめたるは油坊主なるを思ふべし。わざと聯想の一階を飛越して、高名の場を嘗めたりといへる滑稽突梯、まことに及び易からず。

その暗さ(三)準太櫻に衝きあたり

(四)盛衰記の賴政鶴を射る條に、黒雲とは見たれども、天はまことに暗し。いづくを射るべしと、矢所定かならず。とあり。乃ち郎等準太が左近の櫻に鼻衝きあててまごまごする一場の喜劇を案出し來れるなり。作者はいかなるへうきんものぞ。

(一)曾我五郎の、と。

駄馬

出色

氣轉

(二)源左衛門當世。謡曲鉢の木に出てる。

(三)神奈川縣(相模國)鎌倉郡。越えなづむ

(四)小野氏、平安時代の書家三蹟の一。

湊合の妙

(五)支那周の武王の父。

(一) 時致は鞭をかじつて息をつぎ

兄祐成が急を救はんとて、途に百姓の駄馬を奪ひて大磯に驅けつくるは、曾我の物語中、出色の快談なり。これを圖にして大根の鞭を添へたるは、畫工の氣轉なり。せきにせいたる息やすめに、その大根を嚙らせたるは、この作者の氣轉なり。

(二) 佐野の馬戸塚の坂で二度ころび

(三) 戸塚の坂は鎌倉入の一難所。元來乗力なき源左が瘦馬、さぞや越えなづみしならん。ざるを、二度まで轉びたりと誇張したるに、大いなる可笑味を生ず。

(四) 芭蕉は飛びこみ道風は飛びあがり

湊合の妙を見る。主題の蛙をいはで、突然にしたてたるところに、一種のおもしろみあるなり。

(五) 釣れますかなどと文王そばに寄り

(一)呂尚といふ。文王や武王を輔けて天下を統一させた人。邂逅

(一)群馬縣碓氷郡。

寸馬豆人

さすがの聖人文王と、奇傑太公望との邂逅も、話の口火を切るには、極めて平凡ならざるを得ず。たゞ、などの語、胸に一物ある趣を、狀し來りて、幾多の波瀾あるを覺ゆ。

一八 信濃路の旅

正岡子規

(一) 上野より汽車にて横川に行き、馬車にて碓氷峠を越ゆ。鳥の聲耳もとに落ちて、見上ぐれば千仞の絶壁、百尺の老樹、聳え聳えて天も高からず。樵夫の唄足下に起つて、見おろせば、鳶かづらを傳ひて渡るべき谷間に、腥き風さつと吹きどよめきて、萬山自ら震動す。遙かに來し方を見かへるに、山また山、峨々として、路いづくにかある。寸馬豆人といへるは、彼かとばかり疑はれて、

つゞら折いく重の峰をわたりきて
雲間にひくき山もとの里

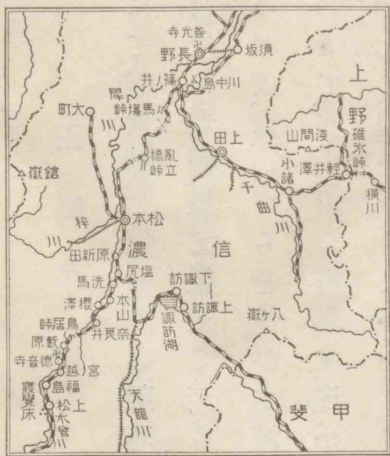
あはひ

日も稍暮れかゝれば、四方濛々として、山とも知らず、海とも知らず。驅上る駒の蹄に踏散らす雲霧のあはひを見れば、一步の外は削りたてたる嶮崖の底も幽かにて、いと怖し。登れども登れども窮る所を知らず。山益々高く、雲愈々低し。

見あぐれば信濃に續く若葉かな
輕井澤はさすがに夏なほ寒く、隙間漏る淺間おろしに、一重の旅衣、見果てぬ夢を護るに難かり。例ならず疾く起出でて窓を開けば、幾重の山嶺屏風を繞らして、草のみ生茂りたれば、その色染めたらんよりも麗し。

山々は萌葱淺葱やほとゝぎす

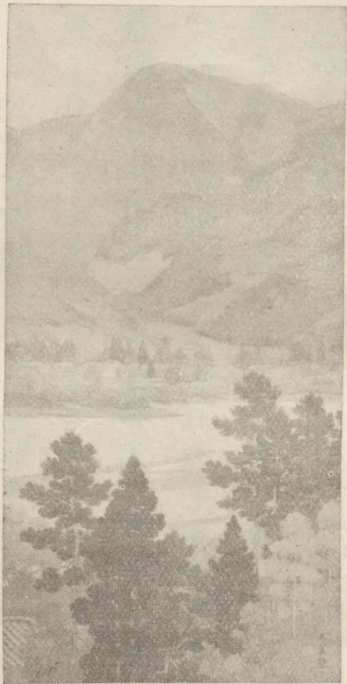
淺間は雲に隠れて、煙もいづこにたち迷ふらんと思はる。汽車を



(一)天台宗。長野市の北端、阿彌陀如来をまつる。

(二)長野縣更級郡、猿ヶ馬場峠といふ。

驅りて善光寺に詣で、それより川中島を過ぐ。古戰場はいづくのほどとも知らねど、山と山とに圍まれて、犀川のめぐるあたりにやあらん、河の水はいたく瘦せて、ほとりの麥畑空しく赤らみたり。日はくれぬ雨はふりきぬ旅衣



(筆雄文本野)りべ川犀

野の狭う尖りて、次第次第に入る山路險しく、弱足に登る馬場峠、さても苦しやと休む足下に、誰が栽ゑしか、珊瑚なす覆盆子、旅人も採らねばや、こぼるゝばかりなり。少し登りてとある樹蔭の葦簾茶屋

袂かたしき

いづくにか寝ん

次の日雨晴る。路に

立てる芭蕉塚に興を

催してたどり行けば、

行手遙かに山重れり。

に懃へば、主婦のもてなしぶり、谷水を五六町の麓に汲みてもてくる汗の滴り、情を汲む一口に浮世の腸は洗はれたり。一樹の蔭一河の流とや、聖の教も時にあうてこそ有難けれ。

この夜は亂橋といふ怪しの小村に足をとゞむ。隣室の雑談に夢覺されて、つとめてここを立出づれば、はや爪先あがりの立峠。旅の若衆と見て取つて、馬子が馬に乗れとのすゝめ。有難や乗りて見れば、旅ほど氣樂なるものはなし。きのふの馬場峠はなぜに苦しみし。路の邊に咲く白き花を何ぞと問へば、これなんうつぎと申す。といふいと嬉しくて、

むら消えし山の白雪来て見れば

駒のあがきにゆらぐ卯の花

峠にて馬を下る。鶯の時ならぬ音に驚かされて、

鶯や野を見おろせば早苗取

(一)東筑摩郡。松本市の南方。
(二)原新田の南約二里。

(三)洗馬の南一里餘。
(四)西筑摩郡。本山の南一里。

(五)櫻澤の南二里餘。

(六)奈良井の南二十町。巖原へ二十五町。

松本にて晝餉したゝむ。早く木曾路に入らんことのみ急がれて、原新田まで三里の道を馬車に縮めて洗馬^(二)までたどりつき、饅頭にすぎ腹を肥して、本山の玉木屋に宿る。

本山を出で櫻澤^(四)を過ぐれば、ここぞ木曾の山入。山のけしき水の有様、はや尋常ならぬけはひにうつゝをぬかし、桃源遠からずと獨り勇めば、鳥の聲も耳にたちて珍し。

奈良井の茶屋に懃ひて、ぐみはなきか。と問へば、ぐみといふものは知りはず。珊瑚實ならば背戸にあり。といふ。山中に珊瑚、さてもいぶかしと裏に廻れば、やはりぐみなり。あるじの女房深切に採りてくれたり。峽中第一の難所といふ鳥居峠^(六)は、若葉の風に夢を薫らせて、瘦馬の力におもしろう攀登る。

馬の背や風吹きこぼす椎の花

頂にて馬を下り、つくづく四方を見おろせば、古木鬱蒼、谷深くし

(一)西筑摩郡木祖村字藪原
(二)西筑摩郡北境の山中から出て伊勢灣に注いでゐる

(三)藪原の南方二里五町

(四)壽永年間の建立

(五)木曾義仲
(六)宮越城址。木曾義仲の本城。一名山吹城

て樵夫の小徑微かに隠見す。珍しく晴れわたりたる空の青嵐を踏まへながら山を下れば、藪原(一)の驛なり。或家に立寄りてお六櫛を求む。このほとりよりぞ木曾川に沿うて下るなる。白雲をあやどる山脈は愈、迫りて、かぶせかゝらん勢怖しく、奥山の雪を解かして清らかなる水は谷を縫うて、その響凄じ。深き淵のたゞ中に、大いなる岩の一つ突出でたる上に、年ふりたる松の枝おもしろく、龍にやあらんと思はれたるもをかし。宮越(三)の村はづれに佇むほどに、いと古代めきたる翁の釣竿を擔ぎたるが、畫の中よりぞ現れ出でたる。笠をぬぎて懇懃に德音寺(四)の道を問ふ。翁のいふ、さても優しの若者や。旭將軍のなき跡を弔はんとてや、ここまでは來給へる。ここに茂れる夏木立は八幡の御社なり。かしこの山の上こそ昔の城の址なれ。このわたりの畑も、つはものどもの住みし夢の名残なるものを、今は桑の木ばかりぞ秀でたる。と、一つ一つに指さす。そゞろに古をし

(一)德音院殿。義山宣公の略。義仲の法名

(二)西筑摩郡福島町

(三)福島と上松との間



德音寺(中中央本堂 右山門兼鐘樓 左義仲の廟所)

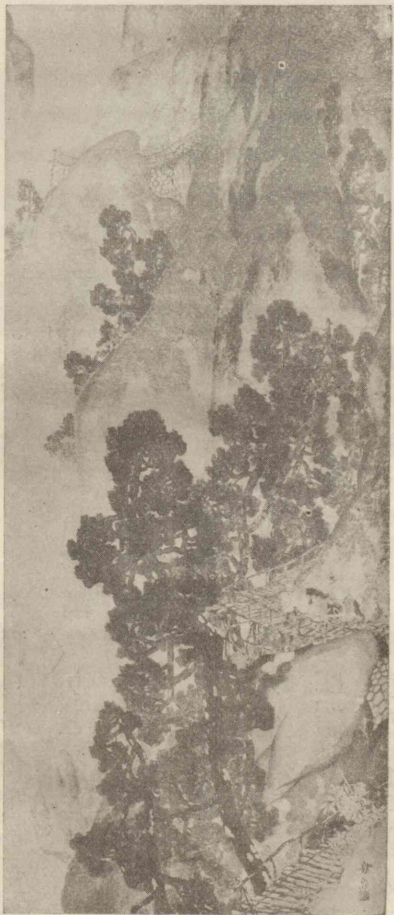
のぶ言葉のはし、この翁、謠ならばかき消すやうに失せぬべし。日照山德音寺に行きて、木曾宣公(一)の碑の石摺一枚を求む。この前の淵を山吹が淵、巴が淵と名づくとかや。福島(二)を今宵の旅枕と定む。木曾第一の繁昌なりとぞ。

翌日朝大雨。待てども晴間なし。傘を購ひ來りて書流す句に、

をりからの木曾の旅路を五月雨

旅亭を出づれば、雨小やみになりぬ。このひまにと急げば、雨の脚に追ひつかれ、木蔭に憩へば、また降りやむ。とにかくと雨になぶられながら、行き行きて、棧(三)に着きたり。見る目危き兩岸の岩の、數十丈の高さに削りなしたるさま、一雙の屏風を押立てたるが如し。

神代の昔よりむし重りたる苔の、美しう青みわたれるあはひあはひに、何げなく咲出でたる杜鵑花の麗しさ。狩野派にやあらん、土佐畫にやあらん。下をのぞけば、五月雨に水嵩増したる川の勢、渦まく



(筆 觀 靜 島 綱) 道 棧

波に雲を流し、道を突き、ては割れ、當りては砕くる響、

(一)松尾芭蕉のこ
と。かけはし
や命なからむ
つたかづら
の句碑。

大磐石も動く心地して、後の茶屋に入り、床几に腰うちかけて目を瞑ぐに、大地の動き、しばしはやまず。蕉翁の石碑を拜みて、さゝやかなる橋の虹の如き上を渡るに、我が身も空中に浮かぶかと疑はれ、

足の裏ひやひやと覺えて、強くもえ踏まず。通り來し方を見わたせば、ここぞ棧のあとと思しきも、今は石を積固めたれば、固より往來の煩もななく、たゞ蔦かづらの力がましくはひまつはれるばかりぞ、古の面影なるべき。

昔たれ雲のゆききの跡つけて

わたしそめけん木曾の棧

(一)上松を過ぐれば、ほどもなく寢覺の

里なり。寺に至りて案内を乞へば、小僧絶壁のきりぎはに立ち、遙かの上を指さして、ここは浦島太郎が龍宮より歸りて後に、釣を垂れし跡なり。川のため中に松の生ひたる大岩を寢覺の床岩、その上の祠を浦島堂とは申すなり。その傍に押立てたる



(筆 博 田 吉) 床 の 覺 寢

(一)長野縣上水内
郡三輪村字上
松。

岩を屏風岩、疊み上げたるを疊岩といふ。象岩はその鼻長く、獅子岩はその口廣し。この外、腰掛岩、俎岩、釜岩、硯岩、烏帽子岩など申すなり。と、いと殊勝氣にぞしやべりける。

誠やここは天然の庭園にて、松青く、水清く、いづこの工匠か削り成しけん、岩石は峨々として高く低く、或は凹みて渦をなし、或は逼りて瀧をなす。いかさま仙人の住所とも覺えてたふとし。

— 瀨祭書屋併話 —

一九 芳流閣上の血戦

瀧澤 馬琴

禍福は糾へる繩(一)禍之與福分(二)何異糾纏(三)漢書賈誼傳(四)寒翁が馬(五)禍分福之所倚(六)福分禍之所伏(七)孰知其種(八)老子

古の人謂はずや、禍福は糾へる繩の如し。人間萬事往くとして寒翁が馬ならぬはなし。そは福の倚る所はた禍の伏する所、彼にあれば此にあり。とは思へども豫てより、誰かよくその極みを知らん。憐むべし犬塚信乃は、親の遺言、記念の名刀、心に占めつ、身につけつ、艱

下總國(茨城縣)古河。

苦のうち、年を経て、得難き時を得てしかば、遙々辭我へもたらして、名を揚げ家を興すべかりし、その福は禍と、ふりかはりたる村雨の、又は故の物ならで、我が身を劈く讐とぞなりし、憾をここに釋く由もなく、こと急にして意外にあり、僅かに當座の辱を避けばやと思ふばかりに、夥の圍を切開きて、芳流閣の屋の上に、攀登れどもとにかくに、脱れ去るべき道のなければ、そこに必死を極めたる、心の中はいかなりけん、思ひ遣るだにいと痛まし。

さればまた犬飼見八信道は、犯せる罪のあらずして、月來獄舎に繋かれし、禍は今恩赦の福、我が縛の索解けて、人にぞかゝる捕手の役儀、犬塚信乃を搦めよ。とて、なまじひに擇み出されつ。他の憂を身の面目に、今更用ひられんこと、願はしからずと思へども、辭みて許さるべくもあらぬ、君命重く、彌高き、かの樓閣は三層なり。その二層なる檐の上まで、身を霞ませて登りて見れば、足下遠く雲近く、照る身を霞ませて

(一)利根川のこと。

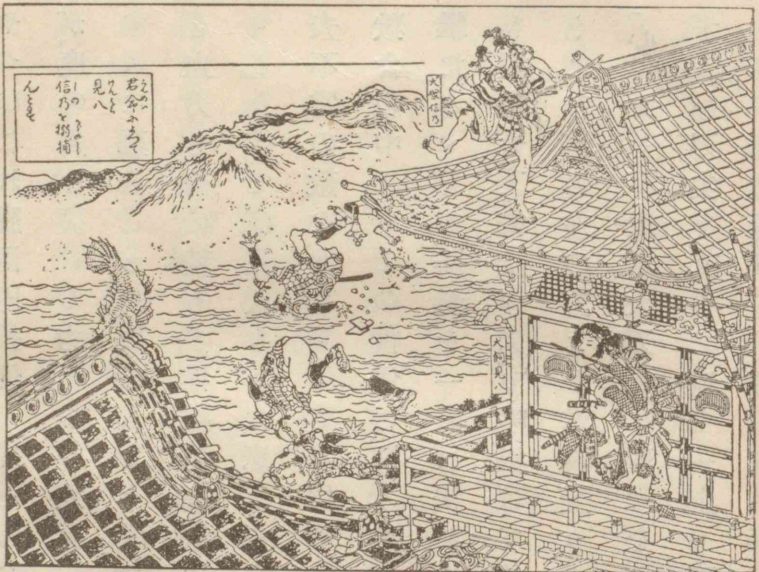
日烈しく堪難き頃は六月二十一日、きのふもけふも乾蒸の、餓熱を渡る敷瓦は、凸凹隙なく波濤に似て、下には大河滔々たる、ここ生死の海に入る、流は名に負ふ坂東太郎、水際の舟楫を絶えて、進退すでに谷りし、敵にしあればいかで我繋ぎ留めんとむさ、びの樹傳ふ如くさらさらと、登りはてたる三層の屋根には目柴翳す由もなく、かたみに透をねらひつゝ、睨まへあうて立つたる有様、浮圖の上なる鶴の巢を、巨蛇の狙ふに似たりけり。

(二)足利持氏の子、鎌倉の管領。
(三)管領足利氏の執權職。

廣庭には成氏朝臣横堀史在村等の、老黨若黨圍繞せし、床几に腰をうち掛けて、勝負いかにと見上げたり。また閣の東西には、腹巻したる許多の士卒、槍、長刀を煌かし、或は箭を負ひ、弓杖突立て、組んで落ちなば撃留めんとて、項を反してこれを觀る。加之外面は、連綿として杳かなる、河水遶りて砌を浸せば、たとひ信乃武事長け、膂力衰へず、よく見八に捷ちたりとも、墨氏が飛鳶を借らざれば、虚空を翔

(四)周代の哲學者、名は瞿。

(一)名は公輸般、魯の人。



(畫挿傳犬八見里) 戦血の上閣流芳

るべくもあらず、魯般が雲の梯なければ、地上に下るべくもあらず。渠鳥ならずも羅に入りぬ。獸ならずも狩場に在り。三寸息絶ゆれば、ことみな休まん。脱れはてじと見えたりけり。
その時信乃思ふやう、初層、二層の屋の上まで、追登らんとせし兵等を、切落しつる。その後、絶えて近づくものなきに、今たゞ獨り登り來ぬるは、世に覺ある力士ならん。き

(一) 欽明天皇の朝
百濟に使し、
雪夜幼兒の虎
に食はれたる
を憤り、虎穴
をなぐりて虎
を獲たり。
(二) 和田義盛の臣
將軍實朝の前
で二個の大鹿
角を重ねて折
つた。
遮莫

御詫さふ

一上一下

手練

やつはこれ膳臣巴提便が、虎を暴てにせる勇あるか、また富田(一)の三郎が、鹿の角を裂ける力あるか。遮莫一人の敵なり。引組んで刺違へ、死するに難きことやはある。よき敵にこそござんなれ。目に物見せんと血刀を、袴の稜はもて推拭ひ、高瀬の如き方桴はに、立つたるまゝに寄するを待てば、見八もまた思ふやう、かの犬塚が武藝勇悍、素より萬夫不當の敵なり。さりとても搦めかねて、他の援を借ることあらば、獄舎の中よりこの役儀に、擇み出されしかひもなし。搦め捕るとも撃たるゝとも、勝負を一時に決せんものを。と思ひにければちつとも擬議せず、御詫さふ。と呼掛けて、持つたる十手を閃かし、飛ぶが如くに方桴の、左の方より進み登りて、組まんとすれども寄せつけず。心得たり。と、鋭き太刀風に、撃つをはつしと受留めて、拂へば透かさずこむ刀尖さきを、支へて流す一上一下、すべる藁を踏止めて、頻りに進む捕手の秘術。彼方も劣らぬ手練の働、嵩より落す太刀筋を、あちこ

虚々實々

ち外す虚々實々、未だ勝負をわかざれば、廣庭なる主従士卒は、手に汗握らざるもなく、瞬もせず氣を籠めて、見る目もいと遙かなり。さるほどに犬塚信乃は、悔り難き見八が武藝に、敵を得たりけりと、思へば勇氣彌増して、刀尖より火出づるまで、寄せては返す太刀音、掛聲、両虎深山に挑む時、錚然として風發り、二龍青潭に鬪ふ時、沛然として雲起るも、かくぞあるべき。春ならば峰の霞か、夏ならば夕べの虹か、と見るばかりなる、いと高き閣の棟にして、死を争ひしていたらく、世に未曾有の晴業なれば、見八は被籠きこの鎖肱くわ當あのはづれを、裏かくまでに切りさかれしかど、太刀を抜かず。信乃は刀の及も續か、で、初に淺痕あまを負ひしより、次第に疼いたみを覺ゆれども、足場をはかりて撓たがまず去らず、疊みかけて撃つ太刀を、見八右手に受流して返す拳に付入りつゝ、やつと掛けたる聲とともに、眉間を望みてはたと打つ、十手をちやうと受留むる、信乃が及は鏢際より、折れて遙

戯作三昧
戯作に一心に
なること。戯
作とは小説や
戯曲などの作
戯曲や小説の
作者や戯曲比
の文學に比
べて小説家
の輕んじられ
た江戸時代
に於いては
作者が自ら謙
遜して謙
言葉

かに飛失せつ。見八得たりと無手と組むを、そがまゝ左手に引着けて、送りに利腕しかと取り、振倒さんと曳聲合はせて、揉みつ揉まるゝ力足、これかれ齊しく踏みすべらして、河邊の方へころころと、身をまろばせし覆車の俵、坂より落すに異ならず。勾配險しき棧閣に、削り成したる藁の勢、止るべくもあらざめれど、送にとつたる拳を緩めず、幾十尋なる屋の上より、末遙かなる河水の底には入らでほどもよし、水際に繋げる小舟の中へ、うち累りつゝ、挫と落つれば、傾く舷と立つ浪に、ざんぶと音する水煙、纜ちやうと張切つて、射る矢の如き早河の眞中へ吐出されつ。しかも追風と引く潮に、誘ふ水なる下り舟、行方も知らずなりにけり。

——南總里見八犬傳——

戯作三昧〔自修文〕

芥川龍之介

「これは初から書直すより外はない。」

(一) 椿説弓張月、
為朝丸主人公
とした歴史小
説。馬琴の傑
作の一つ。

(二) 「三七全傳南
柯夢」傳奇小
説。馬琴四大
傑作の一つ。

(三) 支那廣東省の
地名。同地産
の硯石は支那
で最も尚ばれ
殊にその紫石
を最上とする。

(四) うつくまつた
みつちの形を
摘みにつけた
文鎮。

(五) 文房具の一で、
机の上にある
硯の先に立て
る屏風形のも
の。

勞作
苦心した著作

屑々
つまらない。
取るに足りない

馬琴は心の中でかう叫びながら、忌々しさうに原稿を向ふへ突きやると、片肘突いてごろりと横になつた。が、それでもまだ氣になるのか、眼は机の上を離れない。彼はこの机の上で「弓張月」を書き、「南柯夢」を書き、さうして今は「八犬傳」を書いた。この上にある端溪の硯、蹲螭の文鎮、墓の形をした銅の水差、獅子と牡丹とを浮かせた青磁の硯屏、それから蘭を刻んだ孟宗の根竹の筆立——さういふ一切の文房具は、皆彼の創作の苦みに、久しい以前から親しんでゐる。それ等のものを見るにつけても、彼は自ら今の失敗が、彼の一生の勞作に暗い影を投げるやうな——彼自身の實力が根本的に怪しいやうな、忌はしい不安を禁ずることができない。

「自分はさつきまで、本朝に比倫を絶した大作を書くつもりであつた。が、それもやはり事によると、人並に自惚の一つだつたかも知れない。」

かういふ不安は、彼の上に、何よりも堪難い落莫たる孤獨の情をもたらした。彼は彼の尊敬する和漢の天才の前には、常に謙遜であることを忘れるものではない。が、それだけにまた同時代の屑々たる作者輩に對しては、傲慢であると

遼東の家
世間を知らず
ばかりえらい
と思ふことの
驚十八史略
の遼東有る家
生白頭將
獻之。道遇
三群家皆白
といふ文から
出た語。

共に、飽くまでも不遜である。その彼が結局、自分も彼等と同じ能力の所有者だつたといふことを、さうして更に厭ふべき遼東の豕だつたといふことは、どうして易々と認められよう。しかも彼の強大な「我」は、「さとり」と「あきらめ」とに避難するには、餘りに情熱に溢れてゐる。彼は机の前に身を横たへたまゝ、親船の沈むのを見る難破した船長の眼で、失敗した原稿を眺めながら、靜かに絶望の威力と戦ひ續けた。若しこの時、彼の後の襖がけた、ましくあけはなされなかつたら、さうして「お祖父様たゞ今。」といふ聲と共に、柔かい小さな手が、彼の頭へ抱きつかなくなかつたら、彼は恐らくこの憂鬱な氣分の中に、いつまでも鎖されてゐたことであらう。が、孫の太郎は襖をあけるや否や、子供のみがもつてゐる大膽と率直とを以て、いきなり馬琴の膝の上へ勢よくとび上つた。



瀧澤馬琴

「お祖父様たゞ今。」

「お、よく早く歸つて來たな。」

この語と共に「八大傳」の著者の皺だらけな顔には、別人のやうな悦が輝いた。茶の間の方では、甲高い妻のお百の聲や、内氣らしい嫁のお路の聲が賑やかに聞えてゐる。時々太い男の聲がまじるのは、をりから悴の宗伯も歸り合はせたのらしい。太郎は祖父の膝に跨がりながら、それを聞きすましてもするやうに、わざと眞面目な顔をして、天井を眺めた。外氣にさらされた頬が赤くなつて、小さな鼻の穴のまはりが、息をするたびに動いてゐる。

「あのね。お祖父様にね。」

栗梅の小さい紋附を着た太郎は、突然かういひ出した。考へようとする努力と、笑ひたいのを耐へようとする努力とで、ゑくぼが何度も消えたりできたりする。それが馬琴には、自ら微笑を誘ふやうな氣がした。

「よく毎日。」

「うん、よく毎日。」

「御勉強なさい。」

馬琴はとうとう噴きだした。が、笑の中ですぐまた語をつぎながら、
「それから。」

「それから——ええと——痼癢を起しちやいけませんつて。」

「おやおや、それつきりかい。」

「まだあるの。」

「どんなことが。」

「ええと——お祖父様はね、今にもつとえらくなりますからね。」

「えらくなりますから。」

「ですからね、よくね、辛抱おしなさいつて。」

「辛抱してゐるよ。」

馬琴は思はず眞面目な聲を出した。

「もつともつとよく辛抱なさいつて。」

「誰がそんなことをいつたのだい。」

「それはね。」

太郎は悪戯さうに、ちよいと彼の顔を見た。さうして笑つた。

「だあれだ。」

「さうさな。けふ御佛參に行つたのだから御寺の坊さんに聞いて來たのだらう。」

「違ふ。」

斷然として首を振つた太郎は、馬琴の膝から半分腰を擡げながら、顎を少し

前へ出すやうにして、

「あのね。」

「うん。」

「淺草の觀音様がさういつたの。」

かういふと共に、この子供は家内中に聞えさうな聲で、嬉しさうに笑ひながら、馬琴につかまるのを恐れるやうに、急いで彼の側から飛退いた。さうしてうまく祖父をかついだおもしろさに小さい手を叩きながら、ころげるやうにして、茶の間の方へ逃げて行つた。

馬琴の心に、嚴肅な何物かが刹那に閃いたのはこの時である。彼の唇には幸福な微笑が浮かんだ。それと共に彼の目には、いつか涙が一杯になつた。この冗談は太郎が考へ出したのか、或はまた母が教へてやつたのか、それは彼の問ふところではない。この時、この孫の口から、かういふ語を聞いたのが、不思議なのである。

「観音様がさういつたのか。勉強しろ。痼癩を起すな。さうしてもつとよく辛抱しろ。」

六十何歳かの老藝術家は、涙の中に笑ひながら、子供のやうに頷いた。

その夜の事である。馬琴は薄暗い圓行燈の光の下で、八犬傳の稿をつぎ始めた。執筆中は家内のものも、この書齋へはいつて來ない。ひっそりした部屋の中では、燈心の油を吸ふ音が、こほろぎの聲と共に、空しく夜長の寂しさを語つてゐる。

初め筆を下した時、彼の頭の中には、微かな光のやうなものが動いてゐた。が、十行二十行と筆が進むに随つて、その光のやうなものは、次第に大きさを

増してくる。經驗上その何であるかを知つてゐた馬琴は、注意に注意して、筆を運んで行つた。神來の興は火と少しも變りがない。起すことを知らなければ、一度燃えても、すぐにまた消えてしまふ。

「あせるな。さうしてできるだけ深く考へろ。」

馬琴は動もすれば走りさうな筆を警めながら、何度もかう自分にさゝやいた。が、頭の中にはもうさつきの星を砕いたやうなもの、川よりも早く流れてゐる。さうしてそれが刻々に力を加へて來て、否應なしに彼を押遣つてしまふ。

彼の耳にはいつかこほろぎの聲が聞えなくなつた。彼の目にも、圓行燈の微かな光が、今は少しも苦にならない。筆は自ら勢を生じて、一氣に紙の上をすべりはじめた。彼は神人と相搏つやうな態度で、殆ど必死に書續けた。

頭の中の流は、ちやうど空を走る銀河のやうに、滾々としてどこからか溢れてくる。彼はその凄じい勢を恐れながら、自分の肉體の力が萬一それに耐へられなくなる場合を氣づかつた。さうして緊く筆を握りながら、何度もかう自分に呼びかけた。

澎湃
波のうち合ふさま。

毀譽
世間の評判。

味到
味はひつくして底にいたる。
残滓
のこつたかす。

「根かぎり書續ける。今己が書いてゐることは、今ででもなければ書けないことかも知れないぞ。」
しかし、光の靄に似た流は、少しもその速力を緩めない。反つて目まぐるしい飛躍の中に、あらゆるものを溺らせながら、澎湃として彼を襲つてくる。彼は終に全くその虜になつた。さうして一切を忘れながら、その流の方向に、嵐のやうな勢で筆を驅つた。

この時彼の王者のやうな眼に映つてゐたものは、利害でもなければ、愛憎でもない。まして毀譽に煩はされる心などは、とうに眼底を拂つて消えてしまつた。あるのはたゞ不可思議な悦である。或は恍惚たる悲壯の感激である。この感激を知らないものに、どうして戯作三昧の心境が味到されよう。どうして戯作者の嚴かな魂が理解されよう。ここにこそ「人生」は、あらゆるその残滓を洗つて、まるで新しい鑽石のやうに、美しく作者の前に輝いてゐるではないか。その間も茶の間の行燈のまはりでは、姑のお百と、嫁のお路とが、向かひ合つて縫物を續けてゐる。太郎はもう寝かせたのであらう。少し離れた所には厩

丸薬云々
宗伯は醫者である。

弱らしい宗伯が、さつきから丸薬をまろめるのに忙しい。

「お父様はまだ寝ないかねえ。」

やがてお百は、針へ髪の毛の油をつけながら、不服らしくつぶやいた。

「きつとまたお書きもので夢中になつていらつしやるのでせう。」

お路は眼を針から離さずに返事をした。

「困りものだよ。碌なお金にもならないのにさ。」

お百はかういつて、悴と嫁とを見た。宗伯は聞えないふりをして、答へない。お路も黙つて針を運び續けた。こほろぎはここでも、書齋でも、變りなく秋を鳴きつくしてゐる。

—傀儡師—

二〇 奥の細道 その一

松尾芭蕉

月日は百代の過客にして、行交ふ年もまた旅人なり。船の上に生涯をうかべ、馬の口とらへて老を迎ふるものは、日々旅にして旅を棲所とす。古人も多く旅に死せるあり。余もいづれの年よりか片雲

(一)「天地者萬物之逆旅。光陰者百代之過客云々。」
李春夜宴桃李園序

(一)元祿元年
道祖神

(二)鯉屋杉風。杉山氏名は元雅、鶴歩と號し。江戸の門人。享保十七年(一七三六)別墅は江戸深川六間堀に在つた。
(三)上野公園から西北に續く地。
(四)武藏國(東京府)南足立郡奥州街道最初の宿驛。

の風にさそはれて、漂泊の思やまず、海濱にさすらへ、去年の秋、江上の破屋に蜘蛛の古巢を掃ひて、やゝ年も暮れ、春立てる霞の空に白河の關越えんと、そゞろ神のものにつきて心を狂はせ、道祖神の招にあひて、取るもの手につかず、股引の破を綴り、笠の緒つけかへて三里に灸するより、松島の月まづ心にかゝりて、住める方は人に譲り、杉風が別墅に移る。

草の戸もすみかはる代ぞ雛の家

彌生も末の七日、曙の空朧々として、月は有明にて光をさまれるものから、富士の嶺かすかに見えて、上野、谷中の花の梢、またいつかはと心細し。睦ましき限りは宵より集ひて、船に乗りて送る千住といふ所にて船をあがれば、前途三千里の思胸に塞がりて、幻の巷に離別の涙をそゞぐ。

行く春や鳥啼き魚の眼は涙

これを矢立の始として、行く道なほ進まず。人々は途中に立並びて、後影の見ゆるまではと見送るなるべし。



旅人 (田野九浦筆)

今年元祿二とせにや、奥羽長途の行脚たゞかりそめに思ひ立ちて、吳天に白髪(一)の恨を重ぬといへども、耳に觸れて未だ目に見ぬ境、若し生きて還らばと、定めなき頼の末をかけ、その日漸く草加(二)といふ宿にたどり着きにけり。瘦骨の肩にかゝれるものまづ身を苦しむ。たゞ身すがらにといでたるを、紙衣一衣は夜の防ぎ、浴衣、雨具、墨筆のたぐひ、あるはさり難き錢などしたるは、さすがにうち棄て難くて、路次の煩となれるこそわりなけれ。

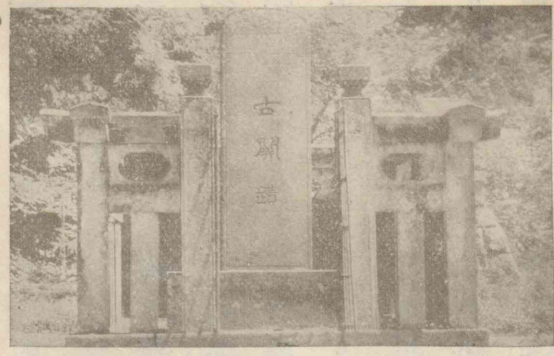
(一)武藏國(埼玉縣)北足立郡奥州街道の宿驛。

(一)「たよりあら
げいかで都へ
けふ白河の關
は越えぬと一
拾遺集、平兼
盛」

風騷の人

(二)藤原清輔。二
條天皇の御に
の歌人。竹田
大夫國行とい
ふものこの關
を過ぐるると
服裝を特に改
めたこと清輔
の著草子に
見えて居る。
(三)芭蕉の門人。
俗稱河合宗五
郎。旅行の同
伴者である。
寶永六年(一
七二九)歿。
年六十二。
(四)磐城、岩代を
流れる大河。
(五)磐梯山のこと。
(六)磐城國(福島
縣)石城郡。
(七)相馬郡。
(八)同田村郡。
(九)岩代國(福島
縣)郡。

心もとなき日數重るまゝに、白河の關にかゝりて旅心定まりぬ。
いかで都へと便求めしも理なり。中にもこの關は風騷の人、心を留
む。秋風を耳に残し、紅葉を面影にして、青
葉の梢なほ哀なり。卯の花の白妙に、茨の
花の咲きそひて、雪にも越ゆる心地ぞす
る。古人冠を正し、衣裳を改めしことなど、
清輔の筆にも留め置かれしとぞ。
卯の花をかざしに關の晴着かな
曾良
とかくして越えゆくまゝに、阿武隈川
を渡る。左に會津嶺高く、右に磐城相馬三
春の莊、常陸、下野の地をさかひて、山連なる影沼といふ所を行くに、
けふは空曇りても影うつらず。須賀川の驛に等躬といふものを



白河の關の址

縣岩瀨郡。子
石と須賀川と
の間にある新
田。

(一〇)同岩瀨郡。

(一)性は相良、名
は伊左衛門。名
等躬はその號。
芭蕉の門人。二
寶永二年(一
七二五)歿。
年七十八。

ことふりにた
れど

(二)支那湖南省の
北部にある大
湖。

(三)支那浙江省に
在る。

(四)支那浙江省に
在る。一名錢
塘江。海嘯の
奇を以て知ら
れてゐる。



松島

尋ねて、四五日留めらる。まづ白河の關いかに越えつるやと問はる。
長途の苦み、身心疲れ、かつは風景に魂奪
はれ、懷舊に腸を斷ちて、はかばかしう思
ひめぐらさず。
風流のはじめや奥の田植歌
船をかりて松島に渡る。その間二里餘、
雄島の磯に着く。
抑、ことふりにたれど、松島は扶桑第一
の好風にして、凡そ洞庭、西湖に耻ぢず。東
南より海を入れて、江の中三里、浙江の潮
をたふ島々の數をつくして、峙つもの
は天を指し、伏すものは波に匍匐ふ。或は二重に重り、三重に疊みて、
左に別れ、右に連なる。負へるあり、抱けるあり、兒孫を愛するが如し。

(一)山を攀る神。

(二)禪僧。土佐の人。萬治二年(一三一九年)歿、年七十八。

風雲の中に旅寝す

(三)醫者。芭蕉の友人。江戸の人。(四)芭蕉の門人。姓は中川。美濃國(岐阜縣)大垣の人。

松の綠濃やかに、枝葉汐風に吹きためられて、屈曲自ら撓めたるが如し。千早振神代の昔、大山祇のなせる業にや、造化の天工、いづれの人か筆を揮ひ、詞をつくさん。

雄島が磯は地續きて、海に出でたる島なり。雲居禪師の別室の跡、座禪石などあり。はた松の木蔭に世を厭ふ人も稀々見えて、落穂、松毬などうち煙りたる草の庵閑かに住みなし、いかなる人とは知られずながら、まづ懐かしく立寄るほどに、月海に映りて、晝の眺また改りぬ。江上に歸りて宿を求め、風雲の中に旅寝するこそ、怪しきまで妙なる心地はせらるれ。

松島や鶴に身をかれほとゝぎす

曾良

余は口を閉じて、眠らんとしていねられず。舊庵を別るゝ時、素堂松島の詩あり。原安適松が浦島の和歌を贈らる。袋を解きて今宵の友とす。且つ杉風濁子が發句あり。

(一)元祿二年五月。雉兎芻蕘

(二)陸前國(宮城縣)牡鹿郡の町。

(三)「すめろぎの御代榮えんとあづまなるみちのく山にこがね花さく」(萬葉集)

(四)同國桃生郡橋浦村。

(五)同牡鹿郡稻井村の字。

(六)同上。

(七)同登米郡新田村新田沼。

(八)同郡登米町。

(九)藤原清衡、基衡、秀衡。

(一〇)平泉館址。奥の御館。

(一一)秀衡が作つた平泉鎮護の山。富士山に擬し雌雄の金鶏を山上に埋めた。

二一 奥の細道 その二

(一) 十二日、平泉へと志す。聞傳へたる姉齒の松、緒絶の橋など人跡稀に、雉兎芻蕘の行交ふ道そこともわかず。終に道ふみ違へて、石の巻といふ湊に出づ。黄金花咲く。と詠みて奉りたる金華山海上に見わたされ、數百の廻船入江に集ひ、人家地を争ひて、かまどの煙立續きたり。思ひかけずかゝる所にも來れるかなと、宿からんとすれど、更に宿かす人なし。漸く貧しき小家に一夜を明かして、明くればまた知らぬ道迷ひ行く。袖の渡尾駁の牧、眞野の萱原などよそめに見て、遙かなる堤を行く。心細き長沼にそうて、戸伊摩といふ所に一宿して、平泉に至る。

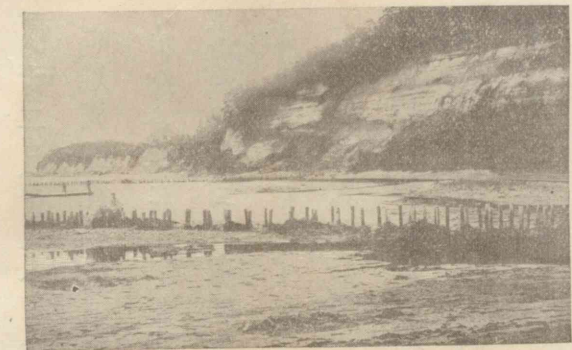
(二) 三代の榮耀一睡の中にして、大門の跡は一里此方にあり。秀衡が跡は田野になりて、金鶏山のみ形をのこす。まづ高館に上れば、北上

(二)衣川館義經の居館。
(一)泉三郎忠衡の居館。

功名一時の叢となる

(三)國破山河在。城春草木深。(杜甫)

(三)清衡、基衡、秀衡。



衣川

川南部より流る、大河なり。衣川は泉が城を遶りて、高館の下にて大河に落入る。泰衡等が舊跡は衣が關を隔てて南部口をさし堅め、夷を防ぐと見えたり。さても義臣すぐつてこの城に籠り、功名一時の叢となる。國破れて山河あり、城春にして草青みたり。」と、笠うち敷きて、時の移るまで涙を落しぬ。

夏草やつはものどもが夢の跡

かねて耳驚かしつる二堂開帳す。經堂は

遺址

三將の像をのこし、光堂は三代の棺を納め、三尊の佛を安置す。七寶散りうせて珠の扉風に破れ、金の柱霜雪に朽ちて、すでに頽敗空虚の叢となるべきを、四面新たに圍みて、藁を覆ひて風雨を凌ぐ。しばし千歳の記念とはなれり。

雨の光堂



高谷龍岬筆

(一)天台第二世の座主。下野の人。貞觀六年(八二四年)歿、年八十。
(二)羽前國(山形縣)北村山郡尾花澤町。

(三)山形市の邊を指したのであらう。
(四)秋田から山形に出る間に在る。
(五)羽後國(山形縣)飽海郡酒田町。
(六)義經の臣常陸坊海存を祀る所といふ。

五月雨のふりのこしてや光堂

山形領に立石寺といふ山寺あり。慈覺大師開基にて、殊に清閑の地なり、一見すべき由人々の勸むるによつて、尾花澤(二)よりとつて返す。その間七里許なり。日未だ暮れず、麓の坊に宿かり置きて、山上の堂に登る。岩に巖を重ねて山とし、松柏年舊り、土石老いて苔滑かに、岩上の院々扉を閉ぢてももの音聞えず。岸をめぐり岩をはひて佛閣を拜し、佳景寂莫として、心澄行くのみ覺ゆ。

閑かさや岩にしみ入る蟬の聲

最上川はみちのくより出でて山形を水上とす。ごてん(三)はやぶさなどいふ恐しき難所あり。板敷山の北を流れて、はては酒田(五)の海に入る。左右山覆ひ、茂みの中に船を下す。これに稻積みたるをやいな船といふなりし。白絲の瀧は青葉のひまひまに落ちて、仙人堂岸(六)に臨みて立ち、水漲りて船危し。

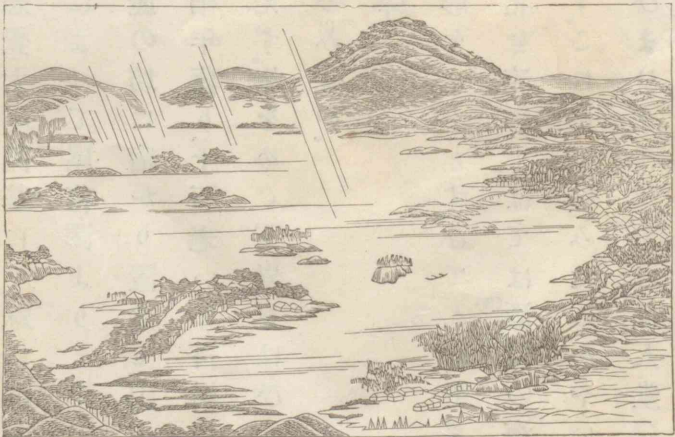
(一)羽後國(秋田縣)由利郡。鳥海山の西北麓。その海岸はその後文化元年(一四六四年)鳥海山の噴火によつて埋没した。

闇中摸索

(二)能因法師が閑居のあとといひ傳へられる。

五月雨を集めて早し最上川
江山水陸の風光數をつくして、今象潟に方寸を責む。酒田の湊より、東北の方山を越え、磯を傳ひ、いさごを踏みて、その間十里、日影稍傾く頃、汐風眞砂を吹上げ、雨濛朧として鳥海山の山隠る。闇中に摸索して雨もまた奇なりとせば、雨後の晴色またたのもしと、あまのたま屋に膝を容れて、雨の晴るゝを待つ。

その朝、天よく晴れて、朝日花やかにさし出づるほどに、象潟に舟を浮かぶ。まづ能因島に舟を寄せて、三年幽居の跡をとぶらひ、向ふの岸



(畫挿傳詞繪翁蕉芭) 潟 象

(一)「きさかたの櫻は波にうつもれて、花の上こぐあまのつり舟」(西行法師)
(二)陸前國(宮城縣)名取郡。陸羽の境。關谷山にあつた。關谷山。また由利郡。小砂川から吹浦へ越える所といふ。
(三)秋田縣秋田市

(四)出羽と越後の境。
(五)市振と書く。越後に屬し、境川を隔てて越中に對する。

にあがれば、花の上漕ぐと詠まれし櫻の老木、西行法師の記念をのこす。寺を干満珠寺といふ。この寺の方丈に坐して簾を捲けば、風景一眼のうち、に盡きて、南に鳥海天を支へ、その影映りて江にあり。西はむやむやの關路を限り、東に堤を築きて、秋田に通ふ道遙かに、海北に構へて、浪うち入るゝ所を汐越といふ。江の縦横一里許、面影松島に通ひてまた異なり。松島は笑ふが如く、象潟は恨むが如し。寂しさに悲みを加へて、地勢魂を惱ますに似たり。

象潟や雨に西施がねぶの花

酒田のなごり日を重ねて、北陸道の雲に望み、遙々の思胸を傷ましめて、加賀の府まで百三十里と聞く。鼠の關を越ゆれば、越後の地に歩行を改めて、越中の國いちぶりの關に至る。この間九日、暑濕の勞に神を腦まし、病起りて事を記さず。

荒海や佐渡に横たふ天の川

二二 郷土の魅力

相馬 御風

郷土といふものの人間の心を引きつける作用は、今更ながら不思議なものである。一方に、月日は百代の過客にして、行交ふ年もまた旅人なり。船の上に生涯をうかべ、馬の口とらへて老を迎ふるものは、日々旅にして旅を棲所とす。古人も多く旅に死せるあり。余もいづれの年よりか片雲の風にさそはれて、漂泊の思やまず」といひ、或は

羈旅

「羈旅邊土の行脚、捨身無常の觀念、道路に死なん。これ天の命なり。」などといつてゐたかの芭蕉翁でさへ、他方に於ては

「代々の賢き人々も故郷は忘れ難きものにおもほえはべる由。我今は初の老も四とせ過ぎて、何事につけても昔の懐かしきまゝに、はらからのあまた齡傾きてはべるも見捨難くて、初冬の空の

うち時雨る、頃より、雪を重ね霜を経て、師走の末、伊陽の山中に至る。なほ父母のいまそがりせばと、慈愛の昔も悲しく、思ふこと



茶 一 (筆完山高)

のみあまたありて、

ふるさとや隣の

緒に泣く年の暮。」

などといつてゐる。

ふるさとは蠅まで

人をさしにけり

ふるさとは西も

東もばらの花

といつた風に、永い間自分の故郷を詛つて、旅から旅へと漂泊してゐたあのすねものの俳諧寺の一茶ですら、晩年には
これがまあつひの棲所か雪五尺

などと驚きながらも、その雪の深い信州柏原の郷里に歸り住んで、そこで一生を終へた。

更にかの近世稀有の聖僧といはれる越後の良寛和尚の如きも、二十二歳から四十三歳までの二十餘年間の雲水行脚の旅にあきたらないで、それ以來ずつと越後の郷里に孤獨な庵住生活を續けて、靜かな往生を遂げてゐる。

ふるさとへ行く人あらばことづてん

けふ近江路をわれ越えにきと

草枕夜ごとにむすぶやどりにも

むすぶは同じふるさとの夢

などといふ彼の旅中の歌を讀んでも、いかに彼が故郷を慕ふ思の切なものであつたかを察することが出来る。

二十三歳で妻子を振棄てて佛門に歸し、諸國修行の旅に出た西

行も、

柴の庵のしばし都へからじと

おもはんだにもあはれなるべし

世の中を捨てて捨てえぬ心地して

みやこ離れぬわが身なりけり

などと歌つて居り、且つ晩年には都に歸つて死んだ。

かういつた風に、昔から代表的な漂泊の人々として知られたこれ等脱俗の人々すらも、不思議に彼等の生まれ且つ育てられた郷土に對しては、しかく切な愛慕の情をもつてゐた。抑、この郷土の人間に對してもつてゐる魅力は、どこからくるのであらうか。

抑、郷土が私たちの心を引きつける點は、どういふところであるか。その地の自然が、他のいづれの土地よりも風景の美に於て優れてゐる爲かといふと、必ずしもさうではない。人情が特に他のいづ

理智的

れの土地のそれよりも醇美である爲かといふに、それも然りとはいへない場合が少くない。それでは何か特別に自分の生活に都合のいい外的條件がある爲かといふに、それも必ずしもさうばかりとはいへない。さうかといつて私たちは、理智的に考へて、故郷といふものは大切なものだといふに明白に判断してから後に、故郷を慕つてゐるとはなほ更考へられない。

然らば、人々は何故に自分の郷土といふものに心を引かれるのか。それは全く「何とはなし」にである。理智的判断によるのでもなく、功利的見地からでもなく、或は特に美的判断が然らしめるといふのでもなく、それはたゞ「何とはなし」にである。郷土の人心を引きつける魅力は、實にこの「何ともいつて見やうのない所から發する。それは自然と人間と、過去と現在とを一つに融かした一種不思議な音樂的な詩的な魅力である。また私たちが郷土を慕ふ心は、全く自

功利的見地

本然的情緒

分にもよくわからない内心自發の情緒である。いかなる力を以てしても否定し難い本然的情緒である。この不可思議な情緒の存在してゐる事實は、恐らくいかなる理智の人と雖も、否定することはできないであらう。

けれども、今の時代にはおひおひこの自分の郷土といふものを失ひつゝ、ある人が多くなりつゝ、あることも、また明らかな事實である。

私は曾て、漁夫にとつて海は單に彼等に生計の資を與へる爲のみの場所でなくして、また實に彼等にとつての貴い心の糧を與へる領土であるといふやうなことを書いたことがある。全く漁師ほど海を愛することの切なものはない。それは海は彼等にとつては離れ難い心の世界である。農夫にとつて山野田畑が單に彼等の生計の資を得る場所でないと同じである。

外に愛慕すべき郷土を失ふことは、同時に内に心靈の故郷を失ふことである。漁師にとつて海は單に生計の資を得るのみの場所と考へられる時、漁師は即ち心の故郷を失ふのである。農夫が山野田畑を生活の爲の資を得る場所とのみ考へる時、農夫は心靈の郷土を失ふのである。

西洋の或新しい女の哲學者の書いたものの中に、こんな一節があつた。

「ロシアとの戰爭中、粗末な米の飯を有難がつてゐた日本の兵士は、何かの機會に僅かばかりの草花でも見ると、ヨーロッパの遠足家のそれにもまして、一種の精神的更新を感得したといふことである。一體、ヨーロッパの遠足家は、無慈悲にも自然の最も美しい春の着物であるところの草花を汚したり、さまざまの樹木、や記念物を傷つけたり、卓子や椅子などにまで容赦なく自分の

Europe
(歐羅巴)

つまらない名前などを彫りつけたりして、彼等自身を楽しませてゐる輩である。

私たちは一般のヨーロッパ人が、それほど自然を愛し得ない人たちであるかどうかの事實を知らない。しかし、私たち日本人が一般に自然を愛する切な心をもつた民族である事實は、信じて疑はない。自然は何といつても私たちの心の故郷である。脚氣患者が郷里に歸ることによつて、いつとはなしに健康を恢復することができ、さるやうに、私たちの傷ついた心は、魂は、心の底から自然を愛し、自然を懐かしむことによつて、その健康をとりもどすことができる。自然を魂の郷土として懐かしむことのできる幸福を、私たちは永遠に失ひたくない。私たちは自分にも、また自分の子どもたちにも、永遠に「郷土」の有する魅力を失はせたくはない。それは私たちの爲の搖籃であつて、また墳墓であるべきである。

——對山雜記——

二三 天地の心

島木赤彦

高槻のこすゑにありて頬白のさへづる春となりけ
るかも

畑中に手くも
わにかこも
紫の清し
蘇ひなり
ほと清なり
にきはし
赤彦



蹟筆彦赤木島

若山牧水

うすべにに葉はいちはやくもえ出でて咲かんとすな
り山ざくら花

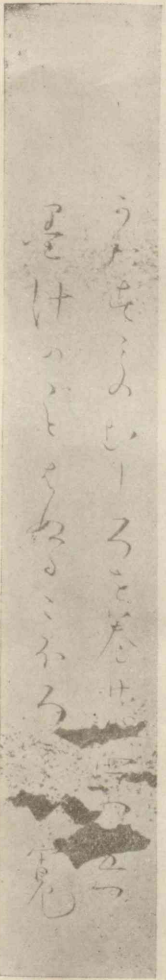
金子薫園

牛のゆく白河道の水ぐるまかたりことりといとまあ

(一)名は三郎、歌
人、書家。

岡麓

葉ざくらの葉だりの露の朝じめり山吹草の花咲きに
けり



蹟筆寛野謝與

與謝野寛

啼きに啼くあさまし長しかしがましみじかき歌をし
らぬ蟬かな

前田夕暮

まひる日のあきらかにてれる山原は大いたどりの花
さかりなり

かたすみ
むしるを
つけば四
つ五のこ
つはぬる
とはぬる
ほろぎ
寛

(二)歌人、京
都の慶應
大學の
教授。

(一) 廣島縣の人。歌人。法學士。

たらちねの母がつりたる青蚊帳をすがしといねつたる
みたれども

(一) 中村憲吉

夏山をめぐり疲れて日暮がたとりの國の出雲へく
だる

高原の月の光はくまなぐれの葉が音すも
茂吉



蹟筆吉茂藤齋

(二) 山形縣の人。歌人。醫學博士。

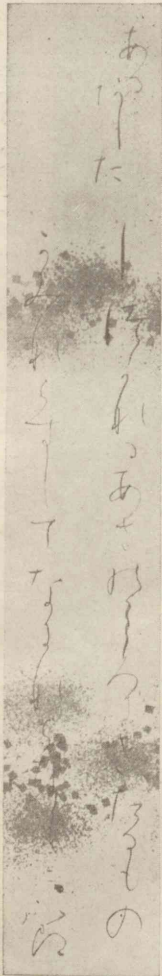
しづかなるたうげをのぼりこし時に月の光は八谷を
てらす

(二) 齋藤茂吉

(三) 尾上八郎

(三) 岡山縣の人。歌人。文學博士。柴舟と號する。東京女子高等師範學校教授。

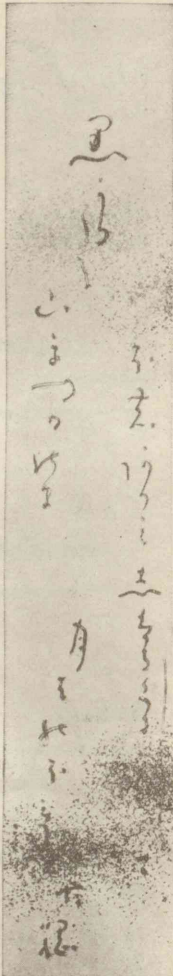
あるあしたあさの心にきたるものかみならず
八郎



蹟筆郎八上尾

(一) 歌人。文學博士。東京帝國大學講師。三重縣の人。

黒かりし山まつのおひまほのあかみほしてはくはれり
信綱



蹟筆綱信木々佐

ゆく秋の大和の國の薬師寺の塔の上なる一ひらの雲

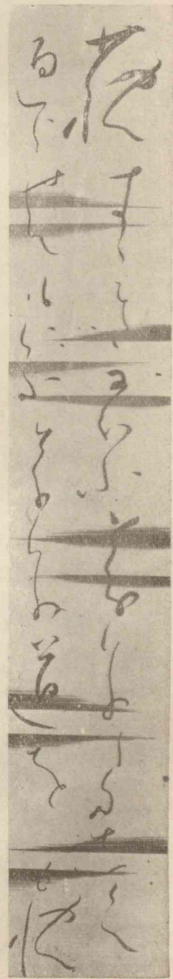
(一) 佐々木信綱

(二) 歌人。名は幾多郎。千葉縣の人。

目の前に五百重おきふす雪の山しづかなるかな鷹ひ
とつかける

(二) 古泉千樞

北原白秋
松原のしぐるゝ寺の前どほりとほる人はあれど日の暮のかげ

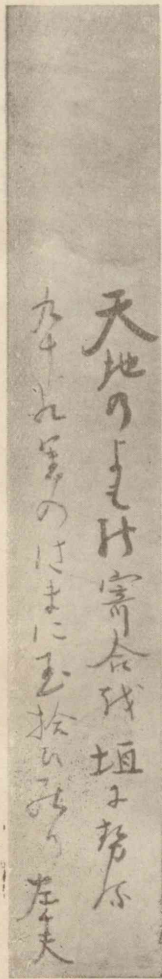


北原白秋筆蹟

萩すゝきにほふとたりてのしとせりもらふとせり道のとな白秋

(一) 歌人の千葉縣人。大正二年歿。年五十。

伊藤左千夫
みぎひだり背によりつくを負ひなめて笑あふるゝ眞晝の家に



伊藤左千夫筆蹟

天地のよも寄合の垣に九里のほま玉拾ひ居り左千夫

落合直文

一つもて君をいはゝん一つもて親をいはゝん二もとある松

二四 畫題としての源實朝 佐々木信綱

扇風器の風の柔かに涼しい食堂を出ると、午後の日光は緑の芝生にまぶしく輝いてゐる。高くまた低く、海の音が絶えず小松原を越して響いてくる。自分等は小松原の中の砂道を踏んで、砂山の上に登つた。そこには海濱院で設けてある廣い露臺があつて、眼の下には稻村が崎と長者が崎とを左右の境とした青海原が、蓆のやうに敷きわたされてゐる。けふの東道の主人は、現代有數な美術品蒐集家で、また鑑賞家である。客は知人たることを余の喜の一つとしてゐる畫家である。この二人と他の一人の客たる余と、三人相對して語り合つた。談話は主として美術の品さだめで、最初のうちは余

(一) 神奈川県(相模國)鎌倉町にあるホテル。
(二) 葉山の近くにある。

品さだめ

は傍聴者であつたが、畫家がふと、この鎌倉の海に對して思ひ浮かべられるのは、實朝の生涯である。若し實朝を畫題として選ぶとしたら、どういふ所がふさはしからうか。といひだしてからは、自分も多く説明者となつた。

自分の思ふところによれば、實朝は我が國の歴史上多く類例を見ない複雑な一人格である。彼には祖先已來の血を受けた雄々しい武士的素質があつたことは否まれぬ。しかも一方に、その教養上なし得て來た閑雅な生と生得の聰明とは、確かに貴公子たる彼の人格に於ける著しい特色をなしてゐた。さうしてかゝる性格を以て、平生絶えず外戚の壓迫に苦しんで、その雄心を以ても明智を以ても如何ともなし得ず、不安不平のうち、自ら沈痛憂鬱の性を養ひ、眞個悲劇の主人公たる性格をなし得たともいふべきで、まさしく平安文雅の時代から、鎌倉の末期に至る過渡時代といふ特殊な

過渡時代

(1) Hamlet
シエクスピア作悲劇「ハムレット」の主人公。デンマークの王子。
(2) Denmark
丹國。
(3) 一抔

靈腕

(三) 鎌倉時代の日記。吾妻鏡とも書く。今は五十一卷ある。作者未詳。

時代の生んだ黒い花であつた。彼の人と爲りを思ふ毎に、いつも聯想されるのは、ハムレットである。東西國情も違ひ、境遇も閱歴も違ふが、我が鎌倉の薄倅將軍には、どこかその性情に、デンマークの王子と似通つた所があつたに違ひないとは、常に自分の感じてゐた點である。

かやうな人物であるから、敢へて傳記のいづこを選ぶまでもなく、畫家の靈腕を以て一人の實朝の容姿だけを描き得たら、確かに立派な畫であらうが、しかし、更にこれに特殊な背景で情景が添うたら、愈、可なるべきはいふまでもなからう。

さらばこれを彼の傳記中に求めて、畫題として可なるのはいかなる場面であらう。嘗て東鑑(三) 東鑑について彼の傳を調べたをりの記憶をたどつて、これを數へ擧げて見よう。

まだ十三歳の幼時、しかもすでに將軍として、八月十五日の夜、明

伶人

(一) 宋の佛工。平安末期に來朝し頼朝、實朝等に仕へた。
 (二) 大船を由比が濱飯島崎で造り、建保五年四月進水の式を行はうとしたが、船が砂の上にあつて遂に浮かばなかつたので、實朝は渡宋の企をやめた。
 (三) 靜岡縣(伊豆國)熱海町の東北約一里の島。箱根内の初島。箱根路をわが越え、伊豆の寄る小島に波の寄る見ゆ。(續後撰集、實朝)

月に乘じて由比が濱に出で、一二艘の舟を装はせ、六七人の伶人をして管絃の妙をつくさしめた彼。

胸中鬱勃の懷を遣るべく渡宋の念を起して、燈下に地圖を展げ、陳和卿と相對した彼。

同じくその目的の爲に造らしめた唐船が愈成つて、今や海に浮かべようとするとするのを、半ば希望と半ば不安とを抱いて、砂山の上から眺めてゐる彼。

源家はかねて箱根と伊豆山との二所の權現を祈願所として、二所詣をするのを慣例とした。即ち武士數騎を伴なつて、緑の山路から馬の上で所謂沖の小島に波の寄るのを見させてゐる彼。

關東の風物はその詠歌に感化を與へた。中にも三浦三崎は好んで屢遊んだ地であつた。三崎の絶壁を見つゝ、かの大海の磯もとゞるに寄する波、われて碎けてさけて散るかも、の作を口吟んだ彼。

(一) 神奈川県(相模國)三浦郡葉山村。

(二) 鴨長明。方丈記の著者。山城鴨社の祠官。和歌、管絃をよくした。建保元年(一八七三年)歿。年六十三。

(三) 「出でていなげ、主なき宿となりぬとも、軒端の梅よ春を忘るな。」

風なほ寒き二月の半ば、緑の沖と白き富士とを背景にした杜戸の浦の松原(今の葉山なる森戸)に、壯士等の小笠懸を觀つゝ、興を催してゐる彼。

時雨降りすさぶ神無月の夜、關東に下向した鴨の社の氏人長明(二)入道に對して、その物語を聽いてゐる彼。

秋の夜の眞夜中を眠られぬまゝ、に南面に出た。燈火消え人靜まり、十八日の夜の月の色は幽かに、こほろぎの聲は心を傷ましめる。思ひ沈んで數首の歌を獨吟してゐると、夢の如き青女が一人前庭を奔り過ぎようとする。誰ぞ、誰ぞ、と頻りに問うてゐる彼。

右大臣宣下は、彼に最後の誇と苦痛とを與へた報道であつた。當時精神的壓迫を受けて、確かに神經衰弱に陥つてゐたと思しい彼が、一種不吉な豫想に充たされて、胸中無限な不安を抱きつゝ、ぬしなき宿の歌を誦したその夜——建保七年正月の下旬は雪が多か

そのかみ

つた。二十三日の晩頭から降始めて、二十四日には山に満ち地に積んだ。拜賀の當日なる二十七日の夜に入つて大雪になつた。——神拜事終つて、二尺餘も降積つた雪の光に、夜なほあかき鶴が岡の石段を下りつゝ、ふと立ちどまつた彼など語りつゝ、をると、何となくそのかみの時代に心が引入られるやうで、松風、波の音のうちに彼の幻影が浮かんでくるのであつた。

——文と筆——

雲の峰〔自修文〕

相馬御風

たゞすまひありさま

夏の自然の興へる最も大きな歡の一つは、晴れわたつた大空の涯に、日毎にあの雄大な雲の峰の姿を眺め得ることである。毎年のことではあるが、私はふとあの雲の峰のたゞすまひに目を留めた時に、始めて眞に「夏」そのものを感じ得たやうな氣がした。濃青に澄みわたつた空の涯から、靜かに高く湧出たあ

同す一致する。

(一)新潟縣(越後國)西頭城郡糸魚川町の海岸

(一)Beyt.
(埃及)
(二)Spinx.
(昔エジプトで宮殿や墳墓などの爲に設けた人面獅身の像)

の眞白な雲の雄姿に對する時、私の心は自然の悠久そのものと同じたとしてもいひたいやうな、不思議に靜かな歡を感じる。埃まみれになつてあの炎熱の街路をうろつき廻つてゐた都會生活の間にあつても、私には雲の峰の姿に眺め入ることが、夏毎に得られる有難い心の慰めの一つであつた。

ついでこの間のことである。私は三四人の友だちと海岸の波打際に近い砂上に寢そべつて、夕暮近い涼風を身に浴びながら、さまざまな雑談を楽しんでゐた。風ざわつた海の上には、鳥賊の夜釣にと沖へ急ぐ漁舟の白帆の群が光つてゐた。水平線の能登半島の山々の見えるはずのあたりと、佐渡の山に見えるはずのあたりとは、地上の山の見えない代りに、眞白な雲の峰が大空高く湧きあがつてゐた。私たちの視線はいつの間にか、いひ合はせたやうに、その方へ引きつけられてゐた。そしてそれに對するさまざまな讚美の言葉が、次々に私たち各自の唇から洩れた。私たちはまたいつとなしに、幼いものの中に取交はされるやうな話を、その雲の峰の形について取交はしたりした。甲はいつた、ほら、あそこのあの端の所が、まるでエジプトのスフィンクスのやうに見える

るぢやありませんか。」

乙はいった、

「わたしはまた、あそこの上に一段高くなつた所が、以前寫真版で見たトルストイの横顔に似てゐると思つて、さつきから眺めてゐたんですよ。」

すると丙が横あひから、

「あなた方の話を聞いてゐると、まるで「ハムレット」の中のハムレットとポローニアスとの會話みたいですね。あの、そら、ハムレットがポローニアスの追従的な態度をちやかすつもりか何かで、空の雲を指しながら、「あの雲は駱駝のやうに見えるね。」といふと、ポローニアスが「はい、はい、駱駝のやうにも見えまするな。」といつて見物を笑はせる、あの場面です。」

丙のこの諧謔は、ほんの暫くの間でしかなかつたが、すつかりその場合の私たちの興を破つてしまつた。しかし、すぐそのあとで乙によつて話された東北地方のどこかで廣く俗間に信じられてゐるといふ一つの傳説が、私たちの心持に再び詩的な潤ほひを與へてくれた。但しその傳説といふのは、次のやうな至

追従的
おせじ風な。

[Polonius

諧謔
しやれ。

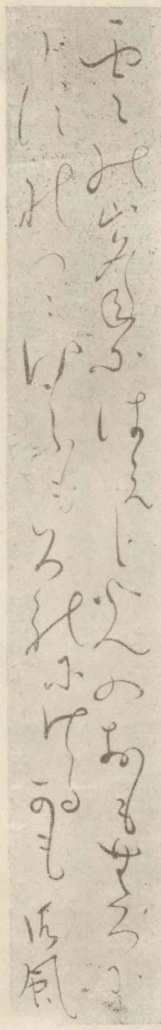
極簡単な話でしかなかつた。

「入道雲は自分が何に似てゐるとか、誰々に似てゐるとかいふやうに形を見定められることが、何よりも嫌ひだ。それ故、人が自分を見て、或一つの形を見定めると、見る間に形を變へてしまふ。」

だが、この至極簡単な話が、とりわけ私にはたまらなくおもしろく感じられたのであつた。

「いかにもさうだ。」と、私の心はうなづいた。雲の峰には定まつた形はない。それは一刹那たりとも固定してはゐない。絶間なく動きつゝある。絶間なく變りつゝある。しかも私たちは、それに氣づかないのだ。たゞ眞に私たちがその事實を認め得るのは、私たち自ら雲の峰のうちに一定の形を見定める瞬間に於てのみである。「あそこが何に似てゐる。」かう獨りできめこんで、さてじつと眺めると、もう雲の方では形を變へてゐる。變化のうちに固定を求め、無常のうちに常住を認める——その時私たちは、始めて眞に變化と無常とを認めるのである。

「雲の峰は形を見定められることが、何より嫌ひだ。」
 なるほどこれはおもしろい——私の心は再びかうなづいたのであつた。
 それにしても、絶間なしに動き、絶間なしに變りつゝも、雲の峰は私たちに
 何といふ靜かさ、何といふ安らかさを感じさせることであらう。



相馬御風筆蹟

雲の峰には
 えし光のお
 もむらにけ
 すれつとけ
 ふもくれに
 けるかも
 御風

しかもその運動に、その變化にのみ徒に心を引かれる時、私たちにはその靜
 かさ、その安らかさは感ずることができない。またその靜かさ安らかさのみ
 徒にたよつて、そこに自分勝手の形態を見定め、飽くまでもその固定した形態
 に執着しようとする時、私たちには却つてその靜かさ安らかさが失はれてし
 まふ。變化に囚れず、常住に執せず、あるがまゝのほがらかな心で對する時の
 み、私たちは眞に雲の峰と同ずることができるのであらう。
 朝夕の風が冷え冷えと肌に感じられる頃になつて、雲の峰が頻りにちぎれち

心境
 心のおきざし
 よ。心の境地。

(一)(二)(三)共に奈良
 法隆寺の境内
 にある。

(五)Panofsky
 北米合衆國ボ
 ストンの人
 明治十一年聘
 せられて我が
 國に來り、我が
 が繪畫を研究
 した。

ぎれに空に浮かび出るのを眺めることにも、私は年毎に新たな感興を與へられ
 る。何ともいつて見やうもない軟かさをもつた白い雲の塊が、悠々と秋めいた
 空の上を動いて行く。じつとそれを眺めてゐる心持にも、私は年々に新たな歡
 を覚える。「心は白雲と同じく遠し。」といつた古人の語に藏せられてゐる心境は、
 永遠に懐かしまるべきであらう。
 —野を歩む者—

二五 中宮寺の觀音

和辻 哲郎

屋根の低い繪殿の廊下を通りぬけて、その後方の傳法堂(三)に行つ
 た。そこにも多くの佛像が並んでゐるが、しかし、夢殿(四)の秘佛を見た
 あとでは、殆ど目に入つて來ない。埃の多い床板の上を歩きながら、
 フェノロサの本の挿繪にある壞れた佛像の堆積を思ひ出して、本
 尊の裏手の廊下のやうな所へ踏みこんだ。壞れた像はまだ隨分多
 く残つてゐた。殊に頭部や手などが埃のうちにごろごろ轉がつて

あるのには、一種異様なおもしろさがあつた。その中から一つの美しい片腕を見つけて、私はF氏を呼びに行つたりなどした。さうして、おしまひに寺僧に叱られた。

そこを出て中宮寺へ行く。寺といふよりは庵室といつた方が似つかはしいやうな小ぢんまりとした建物で、また尼寺のやうな優しい心持もどことなく感じられる。ちやうど本堂——といつても、離座敷のやうな感じのものであるが——の修繕中で、観音様は厨子から出して、庫裏の奥座敷に移坐させてあつた。私たちは次の室に、御客様らしく座蒲團の上に坐つて、隔の襖をあけてもらつた。いかにも、御目にかゝるといふ心地であつた。



中 宮 寺

懐かしい我が聖女は、六疊間の中央に腰掛を置いて、靜かに腰かけてゐる。あの肌の黒い艶は、實に不思議である。ねばり強いやうな木とは思へぬ流動的な感じで、微細な面の凹凸を實に鋭敏に生じてゐる。殊に顔の表情の細かさ柔かさは、微妙な肉づけの注意が、この黒い艶の助をかりて、始めて完全に現れ得たものと思はれる。あのうつとりと閉ぢた眼に、しみじみと優しい愛の涙が、實際に光つてゐるやうに見え、あの微かにほゝゑんだ唇のあたりに、この瞬間に閃いて出た愛の表情が、實際に動いて感じられるのは、確かにあの艶のお蔭であらう。あの頬の優しい美しさも、その頬に指先をつけた手の、いひやうもない形の好さも、腕から肩の清らかな柔かみも、あの艶を除いては考へられない。だから光線を固定させ、或は殺し、或は誇大する寫眞には、この像の面影は傳へられないのである。私たちはたゞうつとりとして眺めた。心の奥ではしめやかに、靜

(1) Maria
キリストの母。

かに、とめどもなく涙が流れた。そこには慈悲と悲哀との盃がなみなみと充たされ、それを嬉しく悲しく飲干す心があつた。誠に至純な美しさで、また美しいとのみでは、いひつくせない神聖な美しさである。

私は聖女と呼んだ。観音といふ言葉よりも、その方がふさはしい。しかし、これは聖母ではない。母であると共に處女である。マリヤの美しさには、母の慈愛と處女の清らかさとの結合が、女を淨化し透明にした趣があるが、しかし、我が聖女は慈悲の權化である。人間心奥の慈悲の願望が、その求めるところを人間の形に結晶せしめたものである。

私の知識の乏しさは、反つて容易に結論をつかませる。凡そ愛の表現として、この像は世界の藝術の中に比類のない獨得なものではないか。これよりも力強いもの、威嚴のあるもの、味はひの深いもの

牧歌的

核心



中宮寺の観音

の、或は烈しい陶酔を表すもの——それは世界に稀でもあるまい。しかし、この純粹な愛と悲との標號は、その曇のない專念の故に、その徹底した柔かさの故に、恐らく唯一な味はひをもつ。その甘美な、牧歌的な、哀愁の浸通つた心持が、若し當時の日本人の心情を反映するならば、この像はまた日本的特質の表現である。古くは古事記の歌から、新しくは歌舞伎、淨瑠璃の文學まで、ものの哀と、しめやかな愛情とを核心とする日本人の藝術は、すでにここにその最も優れた、最も明らかな代表者をもつてゐるのである。浮世繪の人を醉

半跏

(一)聖徳太子。

はしめる柔かさ、日本音曲の心をとろかす悲哀も、その根強い中心の動向は、あの観音に表された願望の一つの流に過ぎなからう。法然、親鸞の宗教も、柔弱といはれる平安時代の小説も、あの願望と、それから流れ出る優しい心情とを基調としないものはない。

あの悲しく貴い半跏の観音像は、かく見れば、我々の文化の出発点である。古事記の歌も、時代からいつてこの像よりさほど古くはない。勿論現在の形に書付けられたのは、百年近く後である。^(一)上宮太子の文化が凝つてこの像となつたとすれば、この像は上宮太子その人の深いしめやかな慈愛を示すものである。日本最初の成文法である太子の憲法が極度に人道的であるのも、また偶然ではない。が、これ等の最初の事象を生出すに至つた母胎は、我が國の優しい自然であらう。愛らしい、親しみ易い、優雅な、その癖、いづこの自然とも同じく底知れぬ神秘をもつた我が島國の自然は、人間の姿に

剽逸
法悦

表せば、あの観音となる外はない。自然に酔ふ甘美な心持は、日本文化に貫通して流れる著しい特長であるが、その根は、あの観音と共通に、畢竟我が國土の自然自身から出てゐるのである。葉末の露の美しさをも鋭く感受する繊細な自然の愛や、一笠一杖に身を託して、自然に融入つて行くしめやかな自然との抱擁や、その分化した官能の陶醉、剽逸な心の法悦は、一見この観音と甚だしく異なるやうに思へる。しかし、その異なるのは、たゞ注意の方向の相違で、捕へるところの對象にこそ差別はあれ、捕へにかゝる心情には、極めて近く相似たものがある。母であるこの大地の特殊な美しさは、その胎より出た子孫に同じ美しさを賦與した。我が國文化の考察は、結局我が國自然の考察に歸つて行かなくてはならぬ。

— 古寺巡禮 —

二六 美しき故國

矢代 幸雄

五年目の秋を日本に迎へて、忘れたものに再び出逢つて珍しくてしやうのないやうに、日本の秋は美しいなと思ひました。平野にはまだ夏の名残が暑く溜つてゐる九月初に、昔行きつけた蘆の湯へ登つて行きました。薄が見たかつたからです。湯の花澤へかけての高原を秋風がわたつて、銀緑の細長い薄の葉は、貫之の草書の亂れがさかともあらうかとばかり波打つてゐました。湯の宿に滞留してゐるうちに、目に見えて秋が惜しくなつて行きました。けふは寒いと思つて高原へ出ると、高原の銀色は見違へるやうに、牙えて來ました。ここに高原の銀色といふのは、私の好きな薄原のことです。絹絲のやうな穂の藤紫から紅が褪せて、凄愴として、牙えた光がまさつて來たのです。そこに秋風が波打たせてゐました。

(一)箱根山中にある。

(二)蘆の湯から十五町。

(三)紀貫之。

(Switzerland
(瑞士))

日本は綺麗な國だと思ふのです。日本を褒める爲に外國を悪くいふ氣はいたしません。たゞ日本はほんたうに綺麗な國でした。去年の秋はイギリス、一昨年の秋はイタリー、その前の秋はスويسからドイツを通つてイタリーに歸る、もう一つ前の秋はフランス、スペインを遊び過ぎて、秋ももう深い頃イタリーに歸つた。自然はどこも美しい。秋の空が時雨れても、初冬の空がからりと晴れても、國にその國特有な美しさがある。でも日本の秋——それはまた無上に綺麗です。

秋ばかりではありません、日本の春も殊にさうです。今年、京都から中國九州へと旅して見ました。櫻の花と菜種の花とが到る所満開でした。菜種が野を黄色く、だんだら縞にすると、櫻は山を鹿子斑にします。土佐繪の夢です。よく古土佐の繪巻物には、——例へば、ねざめ物語繪巻の見返に、一面に櫻の花が咲いてゐます。細い枝と

幹との星のやうな花が、一面にみんなこちらを向いて咲いてゐます。をかしいほど花だらけです。あれを美術の學者は日本畫に於ける自然の圖案化裝飾化といひます。いゝえ、そんな人間の勝手に工夫したものではありません。あれが日本の自然の相すがた、そのすなほ日本人の心への印象です。久しぶりに日本の春を歩いて、私は古土佐の繪卷物の國を歩くといつたやうに、華やかに、そして寂しく浮かれました。

それから秋、秋といへば、この間また平家の嚴島へ納めた經卷を見ました。あれは銀の藝術です。金光眩い佛畫の彩色から、王朝時代の莊嚴藝術が生まれる。金莊嚴が洗はれ白く練れて艶麗となり、纖巧となり、遂に銀色の涼しい夢となる。嚴島經卷を見ながら、私は華麗な神經質の王朝の秋を見たやうな心地がしました。日本の秋の一相が確かにそこにある。經卷の中勸持品でありましたか、料紙裏

(一)長寛二年夏の末に奉納。三十三卷。

に、銀地に群青色の桔梗の花が、小さい星のやうに寂しさうに描いてありました。銀河に明るい秋の夜に、見えない小さい星を懐かしむ、それともまた萩薄にしつとりと置かれた白露の圖といひませ



ねざめ物語繪卷の返見

うか。歐洲の秋の野に銀の光の露のおもしろさを私は知りません。あちらの牧場はいち早く刈られて、枝垂れ靡く草の葉がないからでせうか。牧畜が盛で、おいしい草は刈られないうちに、もう放牧の牛と羊とに根本まで綺麗に食べられてしまふのです。西洋の草場は遠見が毛氈を敷いたやうに綺麗なだけです。運動場の芝生の通りです。

日本の秋の野は曲線模様です。もの狂はしい旋律です。また薄の

(一)共に東京府荏原郡。

ことをいひだしますが、武藏野は土壤の肥えてゐるせいか、大きな、作つたやうな薄が、よく大根畑にはさまつて生えたりしてゐます。私の往む大森から池上馬込の方へかけては、新開地の家の建ちか



(筆溪杉田安) き

けた空地に、思ひがけなく昔の武藏野の形見かと思はれるほど立派な薄が、縦横に曲線幻想を逞しうしてゐることがあります。秋の午後にありがちな、無風の寂滅といったやうな静かな光のうちに、幻想の薄はこの世ならぬ淨光そのものになりま

す。のどやかな日影は長い葉を銀條に、長い穂を金絲に輝かして、金銀の豪華な花火を落日の前に揚げ、そして寂しくなつてゐるやうです。

(一)野村宗達。畫家。能登の人。古土佐の風を慕つて一派をなした。寛永中の人。
(二)本阿彌光悦。畫家。書家。また刀劍鑑定家。寛永十四年(一六三七年)歿。年八十一。

そこに、いつそのこと月があればと想像するのは、私の心が武藏野の秋の薄の記憶から、いつの間にか宗達の繪模様の中を歩いてゐるせいでせう。宗達はその師光悦が新古今の歌を書きつける巻物の料紙に、金銀泥で四季の花と草とを思ふさまに描いたことがあります。名筆を懐かしんで巻物を繰つて行くと、藤、躑躅の咲く夏景色から、繪巻が秋に入つて行く。萩原から薄原、大きな薄が秋一杯に亂れたかと思ふと、一卷の中心點のやうに、ほかつと大きな月が、薄の向ふに、薄模様を着ながら浮かびました。ばかばかしいやうです。お伽噺の月よりも不思議です。繪模様の國ならこそあんなに美しい月が出る。——薄の美しさ。それは風に靡く風情をのみ昔から歌はれます。高原に雲垂れて蕭條として靡く薄は、確かに詩人を泣かせますけれども、無風に寂光に浸つて曲線の迷走を肆にする薄も、また一つの夢の花です。亂れた詩想の収めやうもない耽美です。

(Napoli)
ネーブルスと
もいふ。イタ
リーの都。同
名の海に臨み
風景の絶佳な
以て知られる
警見的感銘

西洋の景色が、西洋の食物のやうに、どこか大味のやうな氣のす
るのは私だけでせうか。スミスは綺麗だけれども、掃除したやうな
綺麗さです。イギリスの田舎は平遠閑雅、綠蔭に清流緩やかにめぐ
つて、ちやうどうまく白鳥が浮かんだりして、えもいはぬ眺です。け
れども、なんだかびきに飽きてしまふのは、やかましく賞められる
英國の風景畫に飽きやすいと、大した違ひはありません。イタリー
の青空は眼も痛いくらゐ鮮かです。ナポリの白い建物の尖端をし
つくりと限る濃藍とも、紺青とも、群青ともいひやうのない永遠相
の空も、警見的感銘の烈しいわりに、あとに残る感じは大ざつはで
す。何故でせう。

二七 銀の猫

上田 秋成

文治それの年の秋八月十五日、鎌倉の大將殿、鶴が岡の宮居に詣

御前追ふ

返りまをし

忌垣

なほ人

雲水

colorado

でさせ給ふ例のことにて、御供つかうまつる人々、御前追ひ、御後べ
つかうまつれる、渚に遊ぶ葦田鶴の歩みして、疾からず、遅からず、列
を亂さず練出でさせ給へるを、大路に膝折伏せ、畏み奉る人數多あ
るに、警衛して、あなとだにいはせず、



上田秋成

世にいかめしく尊き御有様なり。
返りまをしして、御手輿に召させ
給ふほど見留めさせ給ひ、御階の忌
垣のもとに畏まり居る法師のある
が、見上げ奉る面つき、旅に飢ゑて、い
と瘦黒みづきたるに、衣杖笠なども乞食者のさましたる、なほ人な
らずや思しけん、あの法師が修行するやう、名をも問へ。と仰せ給ふ。
御輿添の若侍急ぎ走り寄りて、有難く御目給へり。何處よりの修行
ぞ、名をも申せ。といふ。ゆくりなきに驚きたるさまして、雲水に在處

おほとなぶら

實子
藐姑射の山

月花の譽

〔一〕伊勢の海の
千尋のはまに
ひろふとも
今は何てふか
ひかあるべ
き。〔後撰集、
敦忠朝臣

定めずはべるものにて、名は圓位と申す。といふ。聞し召されて、さればこそ聞知りたれ。穴熊の猛き獲物の類ならで、賢き人得たる例に誘ひ歸らん。我が後につきて來れといへ。とて、召連れさせ給へり。

御館に入らせ、御裝束改めさせ給へば、やがておほとなぶら數多照らしかゝげたり。けふの道行づとゐてこ。と仰せ給ふ。法師參れ。とて、御座近き簀子に召されたり。大將殿見おこせ給ひて、昔は藐姑射の山の御宮仕せし人の、世をはかなきものに思ししみて、身は黒くやつしたれど、月花の譽はものの心なきあづま人さへ聞知りたるぞ。八百日ゆく濱の眞砂の中には、玉とて拾ひ収めたらんを、語りて聞かせよ。と仰せ給ふ。右

「いと輝かしきにぞ、たゞ夢路をたどるやうにはべりて、聞え奉るべきこともはべらず。さとき御眼に見顯されてはべるこそ、いと有難けれ。伊勢の海千尋の濱におり立ちならひはべれど、かひあ

ることもうち出ではべらぬには、これとて捧げ奉るべくもあらず。君にもかねて學ばせ給ふとも漏りきゝ奉る。天の下まつりごち給ふ御器物の大いなるに思し寄せ給ふには、かけても及ぶまじきをさへ思し知りはべる。大空に羽うちつけて飛ぶ鶴の聲霜枯の淺茅が下の蟲の音、いかで取りなめて聞ゆべき。あな畏し。と申す。

うち笑ませ給ひ、弓取りし人のもとの心の猛きには、詠む歌も直く明らさまにと聞くは實か。歌は武士の荒々しき心には詠み得まじきものに、宮人たちはさたし給へりとや。軍に出立ちて、笛鼓の音、馬の嘶はものとも思はぬを、この三十字餘りの學には心の後るるはいかに。こは畏き御心にも思し惑はせ給ふものか。古の代々の帝は、馬に鞍おき、御弓矢取らして御軍に立たせ給ひし。その御歌を讀み見奉れば、猛く直々し、調もいと高しとこそ聞きわたりはべれ。いでや歌詠まんとては、ますらを心をと隠し、あてになよびかに

あて
なよびか

漢の高祖の作
大風起兮雲
飛揚威加
海內兮歸
鄉安得猛
士兮守四
方
魏の曹操の作

藤原秀郷。田
原藤太といふ
鎮守府將軍と
なつた。

のみ詠みいでまくするこそ、この道のいみじき煩なれ。君がさどく
猛き御心のまゝにうちまねばせ給はんには、今の世の人誰かは並
びあひ奉らん。三尺の劔を取りて、大風起り雲飛揚す。と歌ひ、槊を横
たへて、烏鵲南に。と詠ぜし君たちは、鞍の上にて文に遊ばせ給ふな
らずや。玉造等がいみじく磨りみがきたるも、染殿の八入の色も、は
かなき目移りばかりは何にかは。されど谷深き鶯の聲、信濃路出づ
る荒駒の歩み、いづれの道、いづれの業にも、初より優れたらんは鬼
にこそはべらめ。といふ。
人々あれ聞き給へ。世は捨て遁るとも、たのもしき人の心ならず
や。圓位よ。圓位よ。汝が遠つ祖の秀郷といひしは、世にいみじき弓の
上手となん聞ゆる。傳へたることもあるべし。かくこそと思ひし
ぬることは忘れずてぞあらん。事一言にても教へ承らばや。こは益、
恐ある御問はせなり。御物語のはてばては、武士の道しばしも怠ら

をこがまし

周代の兵法家
呉起が卒の疽
なすつた故事

せ給はぬ御心より、野山を住所の瘦法師にだに問はせ給ふことの
忝さよ。向かひ奉りてはをこがましく、何をかは家の傳はりなどと
て聞え奉るべき。まして有難き大官仕を否み奉り、親たちの慈みを
さへあだなるものに思ひなして、年僅かに二十三にして家を出で
たるいたづらものの、弦ひかんすべだに心にも留めはべらず。たゞ
一言の忘れ難きは、賞を重くし罰を軽くせよといひしと、任ずるも
のを辱しむれば危しといひしこととのみ。病める士卒の疽をすひ
しは、人の心をよく買ひなすと雖も、眞の情よりとも覺えはべらず。
かまどを減じて人を危きに陥るゝは、將帥のさかしきにて、國を治
め天の下を知るべき君の御心にあらず。さはれ、軍を出し給へること
との怪しきまで賢くおはするを、餘所ながら見聞きはべるには、こ
の方の御問、免させ給へ。とて、額を板敷に擦りつけて申す。
君笑みほこらせ給ひ、口とく、心賢しき法師なり。今宵は月見る夜

まらうど

ぞ。人々と土器取りはやし、曉かけて遊ばん。まらうどは酒飲まざるべし。鹿、猿の中に立交りて歌詠めといふとも、詠むまじ。たゞ我が前にて遊べ。飽かず飲み、ものきたなげに食散らす人々は暖かにこそ。風冷やかなるに、この火取りて法師に参らせよ。とて、白銀をもて作れる猫の形したるを取傳へて、君より賜はす。とて、前に置きたり。鹿猿はなほ心猛し。鼠をだにえ捕らぬ。瘦法師が爲には、げに似つかはしき御賜ぞ。とて、三たび押戴きぬ。翌朝御暇賜はりて立出づるに、御館の人やどりに誰人の童ならん、括袴くわくはかまの裾朝露に濡れそぼちて、いと寒げに居るを見て、これ取らせん。火埋みして手足を暖めよ。とてかのきらきらしきものを與へて、顧もせで立去りぬ。て

童うち驚きて、これ見給へ。見も知らぬ法師の、見も知らぬもの賜ひつるは、とて青侍に見すれば、目口をはだけ、かく尊き寶物を誰かば得させん。拾ひやしつる。といふ。さらに、さらに、道のそらにかゝる

青侍

あなづらはし

ものやはあるべき。あな恐し。殿に奉りて給へ。といふ。やがて御館にもて参り、仕ふる君を呼びいでて、しかじかのことなんと申す。いと怪し。大將殿の法師に賜ひしを、いかで童には得させけん。訝し。とて、



銀の猫 (谷口香嶠筆)

まづ急ぎて聞え奉る。君うち笑み給ひ、かの似而非法師、あなづらはしく幼げなるもの

くれしとて、腹立たしくや思ひけん、我が門の前に棄てゆきつるよ。一たび似而非者の手に穢れしもの、その童に取らせよ。とて、取りおろさせ給ひぬ。

西行後にこのことを人に語りていふ、右幕下は誠にねぢけたる

(一)漢の高皇帝。姓は劉。諱は邦。字は季。寛仁大度、遂に秦末の亂を平定して天下を平定した。西暦前一九五年歿年八十。
 (二)支那魏(三國)の主。姓は曹。名は操。策略に長じてゐた。建安二十五年(西暦二〇〇年)歿。年六十。

君なり。口に蜜あれど、心には針のおはすらん。^(一)漢高の大度、曹孟徳の智略あるに似て、天下の人皆この君の網の中に入れられたるは、佛の冥福といふことを生まれ得給ひけん。たゞ悲しむべきは、神の御裔の、この後やうやう衰へさせ給はん世の姿なるは、とて、涙とゞめ難くしてもの語りしとなん。心なき身にもこれを聞傳へては、秋の夕暮ならずとも、うち顰みぬべし。

— 藤篋冊子 —

二八 西湖の月

谷崎潤一郎

夕食を済ませた後、西湖の月を見るべく、ホテルの後から畫舫に乗つて出たのは、その晩の九時頃であつたらう。東岸に沿うて湧金門から柳浪聞鶯の方へ漕いで行かせながら、私は舳に座を占めて、一點の曇もない大空の月の光を、満身に浴びてゐた。いかに隈なく晴れわたつた宵であつたかといふことは、湖を取巻いてゐる四方

(三)浙江省孤山の麓にある。
 (四)西湖十景の一。

(一)江西省九江府。
 (二)江西省潯陽道。匡山ともいふ。風景絶佳。

(三)江西省の北部。支那第二の大湖。

の山々や、汀に近く女の洗髪のやうにうなだれてゐる楊柳や、稀には岸邊の樓閣などまでが、一つ一つその影を水面に落してゐたのでも、大凡想像することができよう。嘗て潯陽江邊の甘棠湖の月を觀た時に、雄大な廬山^(一)の山容が水にくつきりと映つてゐるのを眺めた覺はあるけれども、今夜の月は、あの時にもまして朗かである上に、湖の廣さもまた甘棠湖よりは遙かに大きい。水のおもてといふものは、それでなくてもかういふ晩には、實際より廣々と見えるものだが、船がだんだん陸を離れるにつれて、私の行手にたゞへられてゐる湖の水は、腹が膨がるやうに底の方から盛上つて來て、次第に岸を遠くの方へ追ひやつてしまふのである。ここでちよいと斷つて置きたいのは、西湖の風景が美しいのは、主としてその湖水の面積が、洞庭湖や鄱陽湖^(二)のやうなばかばかしい大きさでなく、ひと目で見わたされる範圍に於て、蒼茫とした廣さをもち、優しい姿

鼓橋

をした周囲の山や丘陵と、極めて適當な調和を保つてゐる點にあるのだと思ふ。雄大だと思へば雄大なやうにも見え、箱庭のやうだと思へば箱庭のやうにも見え、その間に入江があり、長堤があり、島嶼があり、鼓橋があつて、變化はありながら、恰も一枚の繪を展げたやうに、すべてが同時に雙の眸まなこにはいつてくるのが、この湖の特長である。今夜にしても、船が進むに随つて、無限に大きく大きく開いて行くやうに覺えながらも、陸は決して地平線の向ふへは隠れてしまはない。が、その實、岸邊の山だの森だのは、地平線より却つてずつと遠くにあるもののやうに感じられる。



一のそ (筆雪關本橋) 湖 西

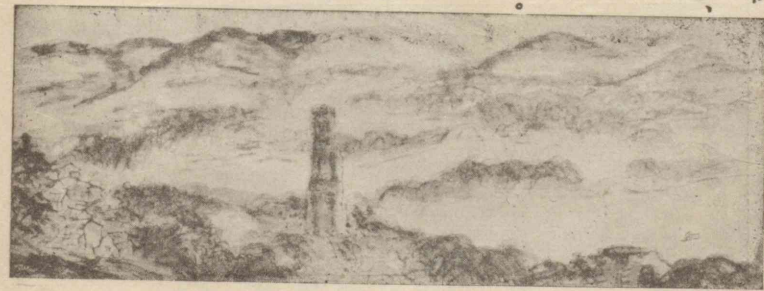
吃水

首を舉げて四方の陸をぐるりと眺め廻した後、今度はそろそろと眼を下の方へ向けると、私の視野にはいるものは、やがてたゞ一面の波ばかりになつてしまつて、何だか船が水の上を渡つてゐるのではなく、水の底に沈みつゝあるやうな心地がする。その上、この湖の水は、月明りのせいもあらうけれど、さながら深い山奥の靈泉のやうに透徹つてゐるので、鏡にも似たその表面に、船の影が倒に映つてゐなかつたら、殆どどこから空氣の世界になり、どこから水の世界になるのだから區別がつかないほど、底の方まではつきりと見えてゐるのである。吃水の浅い、草履のやうに薄つぺらな船の上に横たはつて、水と



二のそ (筆雪關本橋) 湖 西

空氣との相觸れる平面を滑かに進んで行く私の體は、たゞ濡れてゐないのが不思議なだけで、時には全く水の世界に潜入したといつてもいいくらいである。舷に顔を出して底を見きはめると、深さはやうやう二三尺か四五尺よりない。林和靖が「疎影横斜水清淺」といつたのは、思ふにこの湖のことであらうが、「水清淺」の意味と美しさとは、かうしてこの底を眺める時に、始めて明らかに會得することができ、私はさつき、深山の靈泉のやうに透徹つてゐるといつたけれども、たゞそれだけでは、到底この時の感じを言表すにはもの足りない。なぜかといふのに、ここにたゞへられてゐる三四尺の深さの水は、靈泉の

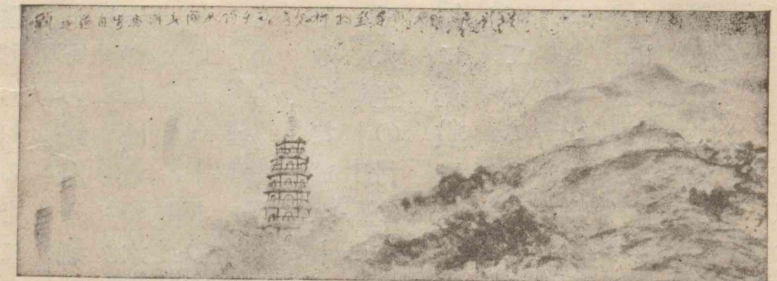


三のそ (筆雪關本橋) 湖 西

(一) 宋の詩人。名は逋。和靖は諡。廬山に結んで、西面に梅を植ふる。天聖四年十二月。西曆一〇四二年。林和靖の山園小梅の詩の句。

羅衣

如く清冽なばかりでなく、一種異様な例へば、とろゝのやうな重みのある滑かさと、飴のやうな粘とをもつてゐるからである。この水の數滴を掌に掬んで、暫く空中に曝して置いたなら、冷やかな月の光を受留めて、水晶の如く凝りかたまつてしまふだらう。私の船の艚はそのねつとりした重い水を、すらしすらしと切つて進むのではなく、ぬらぬらとこね返すやうにして、操られて行くのである。をりをり艚が水面を離れると、水は青白く光りながら、一枚の羅衣らゐのやうに、それへべつたりと纏はり着く。水に纖維があると、いつてはをかしいけれども、全くこの湖の水は、蜘蛛の絲よりも更に微かな、さうして妙に執拗



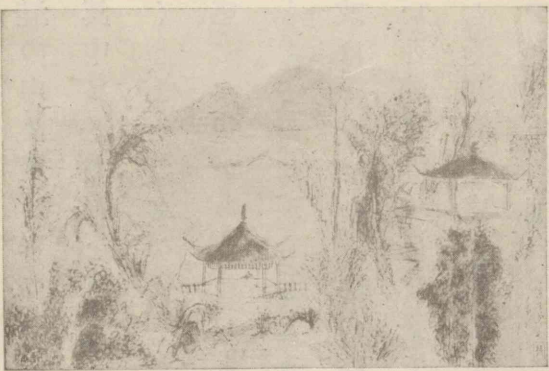
四のそ (筆雪關本橋) 湖 西

な弾力のある纖維から成立つてゐるやうにも感じられる。とにかくにも綺麗に澄んだ水ではあるが、輕快ではなく、寧ろ鈍重な氣分を含んだ水なのである。そんな感じがするのは、一つには、その水底に蒼苔のやうな細かい藻草が密生してゐて、柔かいビロードの床のやうな、暗綠色の光澤を反射してゐるせいでもあらう。實際それは、非常に精巧な、驚くほど美しい艶と潤ほひをもつたビロードといふより、外に適當な言葉を知らない。さうして大空の月の女神は、そのビロードの地質を一層艶々と光らせる爲に、無數の長い銀の絲で、蛇のうねりのやうな波紋を、一面に縫取つてゐるのである。若しこの湖に仙女があるならば、かの女の纏ふべきマントの色は、必ずこのビロード色であるに違ひない。底が餘りに淺い爲にどうかすると、艚は心なくもそのビロードの面をかき亂す。はつと砂埃が風に舞上るやうに、濁つた泥が圓い輪を描いて、煙のやうに水中

1)Mantle

に浮かび上る。

柳浪聞鶯の前を通り過ぎた船は、今度は進路を西に取つて、湖の



(小杉未醒筆) 葛嶺遠望

中心へ漕いで行つた。左岸に黒くかたまつてゐる背の低い一叢の林は、恐らく桑畑か何かであらう。右岸はと見ると、――船が私の知らぬ間に、ぐるりと方向を一轉したので、何だかかう急に眼が廻るやうに、周圍が潤然とうち開け、寶石山の保叔塔が、波に没しかゝつた帆柱のやうに、遙かな空にぼうつと夢の如く淡く霞んでゐる。その左の葛嶺の山の裾に、灯がち

らちらと瞬いてゐるのは、新々旅館だらう。ここから眺めわたした様子では、向岸までは非常に遙かで、西湖は海の如く廣がつてゐる。

(二)共に西湖の邊にある山。

しかし、海にしては水面が穩か過ぎて、殆ど波らしいものは眼に留らない。私の體が蟲けらのやうな小さいもので、偉大な大理石の圓盤の中に置かれてゐるのかとも想像される。子供の時分に野原の眞中などで、眼を瞑つてぐるぐると廻つた後で、またはつと眼を開くと、よくこんな廣々とした、氣が遠くなるやうな天地の大いさを感じた覺がある。だが、それよりもなほ不思議なのは、そんなに廣々としてゐながら、どこまで行つても、水は依然として二三尺の、——或はせいぜい人間の胸のあたりまでつかるくらゐな深さしかない。西湖は湖ではなくて、恐しい大きな池であるかの如くに、その時しみじみと感じられたのであつた。巨人が箱庭を作るとしたら、きつとこの西湖のやうなものができるに違ひない。この湖がこのやうに靜かなのは、さうしてその面にあらゆる物象が鮮かな影を印してゐるのは、畢竟、水底が此の如く淺い爲に、波らしい波が立たな

(一)湖の中にある
小さい島の山
(二)以下いづれも
西湖の三面を
圍んだ山

(三)西山氏。俳人。
天和二年(二
三四二年)政
年七十八

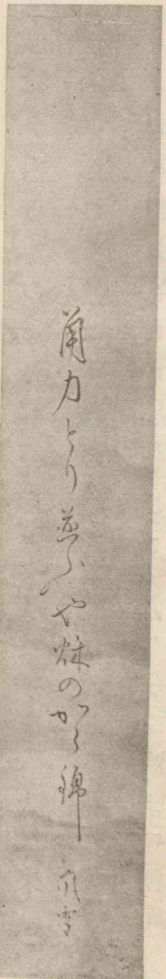
い結果なのであらう。鹽の中にも山の影は映るやうに、たとひ二三尺の深さでも、水はやつぱり水である。正面に鬱蒼と堆く盛上つてゐる孤山(一)の翠嵐を始めとして、その左に低く長く、女性的な優雅な曲線を起伏させてゐる天竺山、棲霞嶺、南高峰、北高峰の山々が、月の光に融けてしまひさうに、朦朧と消えかゝりながらも、なほその影を一つ一つ倒に映してゐる莊嚴な姿に接した時、どうしてこの湖の水底の淺さに考へ及ぶ餘裕があらう。

——潤一郎傑作集——

二九 黄菊白菊

黄菊白菊そのほかの名はなくもがな。 嵐 雪
秋風や白木の弓に弦はらん。 去 來
山は暮れて野は黄昏の薄かな。 蕪 村
白露や無分別なるおきどころ。 宗 因

角力とり並
ふや秋のか
ら錦
嵐
雪

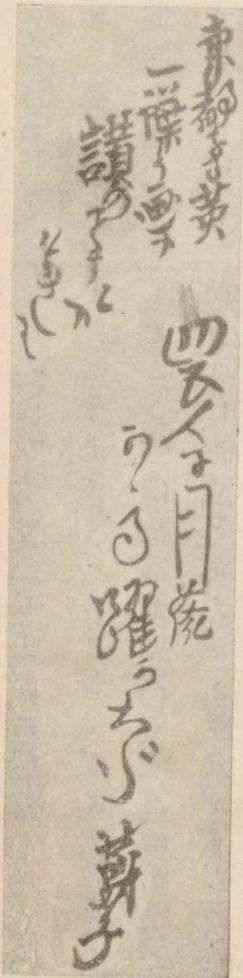


蹟筆雪嵐

まじまじといますがごとし魂祭。
名月や池をめぐりて夜もすがら。
いなづまやきのふは東けふは西。
牛しかる聲に鳴たつゆふべかな。
小坊主の門に立ちけり秋の暮。

季吟
芭蕉
其角
支考
關更

(一)各務氏。芭蕉の門人。享保六十七年(一八二三年)歿。
(二)高桑氏。寛政十一年(一七九九年)歿。
東都なる英一蝶か書に識のそまればけしは
四五人に月落かよる躍かな
蕪村



蹟筆村蕪

三〇 暮秋の雨

加藤 千 蔭

八月二十日餘り、秋のけはひの懐かしくて、例の隅田川のほとり、石濱の庵に行きて宿りぬ。有明の月のにほひも、霧たちわたる曉のさまざま、所がら世に似ぬものから、ここは雨のをぼふる日なん、殊に哀は深かりける。もとより萱葺ける庵なれば、音だになくて、軒の雫の三つ四つ落ちそむるより、籬の萩の下葉の色づきたるが、ほろほろと散るも哀なり。水の面は動くともなくて、鏡の如くなるに、雲の濃き淡きうつろひて、且つ浮かび且つ消ゆる水沫にこそ、雨のけはひはしるかりけれ。水脈の一筋は、さしひく汐にもまじらで、とはに縹の色に流れいにて、沖に出づめり。これや、水上の秩父の山の眞清水の落ちくるならん。うちむかふ岸の榛原のみ、濃き墨がきの如くなるが中に、柞の黄ばみたるは、さすがにほのかに見えて、そのひまひまより長き堤の見えわたるに、堤のをちなる梢は、やうやうに薄

墨もてかき消したらん如くいとしも遙けきは、たゞ靡かぬ煙とのみぞ見ゆる。ここかしこより鳥の飛行きつゝ、ねぐらの鷺の翅重げに起出でて、河の瀬の眞菰におり立てば、みさごの群來て、水の面に浮かべるもをかし。上つ瀬より、筏師の蓑笠着て、棹を筏の上に横た

暮の形

あらしや 暮

加藤千藤筆蹟

へ、おのれこまぬきて、思ふ事なげに居り、筏は水のまにまに流れ行くもしづけし。渡守舟さしいだせば、大笠傾けて渡り行く人の、や

春の野にあそふ千藤白妙の袖振はへてかけろふのもゆるしはふの菫摘也

あらしや 暮
あらしや 暮

がて堤をあるくさまも繪によく似たり。すべて一日の中に、筑波嶺より吹下すかと思へば、沖よりも風通ひ來て、岸の木立も、長き堤も、あるは現れ、あるは隠れて、限りなき青海原に向かひたらんやうに覺ゆるをりもありけり。かくて稍夕暮近くなりゆけば、群鳥のおの

がじしねぐら求むるに、雁の一つら二つら渡り行くなど、えもいはん方なし。暮れはてても、なほ行く水の色のみ遠白く残りて、川添小田にはへる水分の神のみ火の、海女のいさりともしいふべく、かすかに見えわたるも哀なり。

秋ふけて小雨そぼふる隅田川

たが墨がきのすさびなるらん

—うけらが花—

實業帝國新讀本 卷七 終

昭和二年十一月五日發行
昭和二年十一月二日印刷

發行

(本讀新國帝業實)

定價	
自卷一	至自卷四
各金七拾錢	各金六拾參錢
自卷五	至自卷十九
各金五拾貳錢	各金五拾貳錢

編者 芳賀矢一

發行者兼印刷者 東京市神田區通神保町三番地 合資會社 富山房

代表者 合資會社 富山房社長 坂本嘉治馬

印刷所 東京市小石川區音羽町七丁目六番地 富山房印刷工場

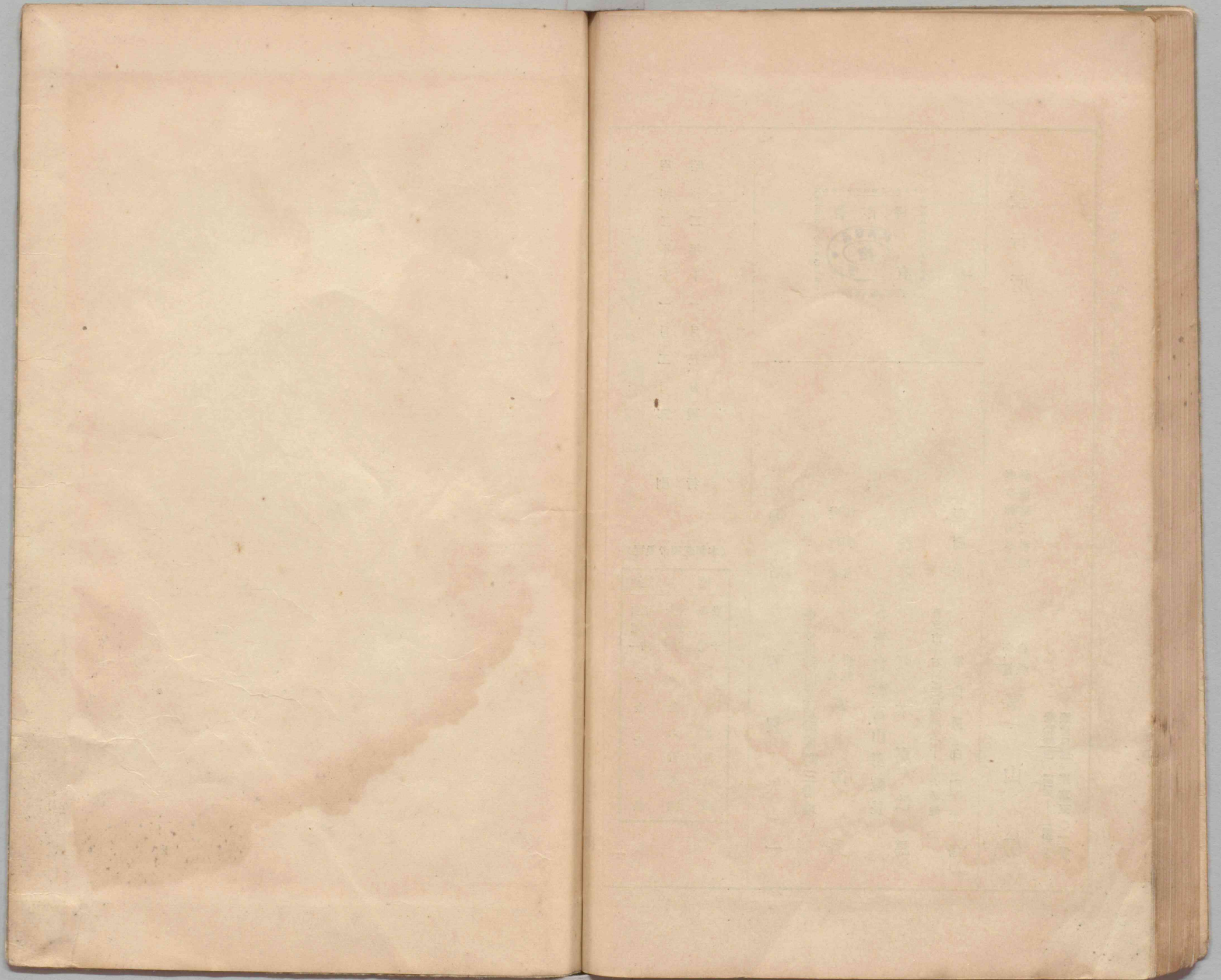


發行所

東京市神田區通神保町三番地

合資會社 富山房

電話神田 二四六——二四九番 振替口座 東京五〇一番





広島大学図書

200085183

